

とんとんむし



No. 10

姫路昆虫同好会

佐用郡三日月町の蛾覚え書

川 副 昭 人

日本各地の蛾の分布に関する資料は蝶に比べるとまだまだ貧粗で、とくに西日本では報文が少ないようである。京阪神の代表的な山や著名な採集地からできえ蛾に関する記録や報告は全く断片的で、古くから採集されているにもかゝらずまとまったものを殆んど見ない。漸く最近、熱心な若手の愛好者達によって、それらの不十分な記録の集積の上に最近の採集成果を重ねて、関西の何ヶ所かで蛾の目録作成が手がけられるようになった。しかし何と言っても蛾の採集者がもっと増えないことには、完全なリストの作成は程遠い事に思われる。

ここに述べようとする三日月町は地形的に極めて平凡な山間盆地で、これといった自然地理上の特色は一つ無いといってよい。私の採集地点は小さな盆地の中へ北から張り出した丘陵末端部の、ちょっとした針広混雑林に囲まれた山寺の門の下で、海拔高度220m、国鉄姫新線三日月駅から2kmの道のりである。昆虫相を一口で言えば全く平凡の一語に尽き、どこにでもいる普通種が圧倒的に多く、当然その総種類数もさほど多くない。もっと北へ行けば同じ佐用郡内でも海拔1000mをこえる日名倉山があり、恐らく中国山地としての分布相の特色も出てくるだろうし、逆に南の方へ、よく似た低い山をいくつか越えれば、瀬戸内海的な、あるいは所謂南方的要素がぐんと加わってくるであろう。とにかく三日月という所は万事中途半端で、目立った特色のない、平凡な種類が圧倒的な小盆地である。しかし、採集していると時たま、おや、と思われるものが飛んでくる。京阪神でおもに採集してきた私が、ここで初めてお目にかかった種類もいくつかある。それらの中には、ちょっと遠い山地や海岸あたりから最近進入してきたものもあろうし、あるいはまた、この山間盆地がもっと自然林に蔽われていた頃の勢力種の生き残りであることもあろう。恐らく西播地方の佐用、上月、山崎、龍野など、こことよく似た丘陵地帯は、蛾相もこの三日月と余り大差があるまい。この一文がこれら西播地方の蛾相の一端をうかがい知る手がかりにもなればと思って筆をとった次第である。

ところで、最初に断っておかねばならないのは、今私のやっている仕事は分類や分布に関する事ではないので、手許に三日月産の蛾の標本を揃えているわけで

はない、ということである。従って、採集標本に裏づけられた“目録”や“リスト”のような形では報告することができない。それでも私自身が本来は“採集屋”であるから、目ぼしいものはできるだけ展覧してあるし、たとえそれがどこにでも山ほどの最普通種であっても一応は採っておこうと心がけている。そして、採集後は飛来種についてノートにメモをしている。それらをもとに、種名と採集時期とを列挙し、必要と思われるものには短かいコメントをつけておこうと思う。採集したのは1983年6-9月、1984年3-11月、1985年6月以降でほぼ毎月1回(文末参照)、従って晩秋から冬の蛾については全く未知である。この寺(詳しくは三日月町下本郷、高蔵寺)を採集地に選んだのは全く私的な理由——ここが私の家の昔からの菩提寺であり、それ故にいろんな便宜が個人的にはからって貰える——からであって、お奨めできるような好採集地とは余り言えない。なお、現在の私の仕事(雌を生かしたまま持帰り、産卵させ、その胚から染色体を調べる)が目下の所大蛾類でせい一ぱいであるので、小蛾類はほとんど採っていない。ここでも大蛾類に限らせて頂きたい。

なお、採集時期はたとえば「6上、7上」とあれば6月上旬と7月上旬に採集したことを示すが、決して6月上旬と7月上旬「のみ」に飛来したことを意味しないし、いわんや6月上旬と7月上旬の2回の発生を意味するものではない。また、一応各月の1-10日を上旬、11-20日を中旬、21日以降を下旬とした。学名は省略する。順序は保育社の図鑑に従うのが便利と考え、ほゞこれに合わせた。

マドガ科

1. アカジマドガ (5上、6上、7下、8上)
マドガ科では本種のみがやたらと多い。
2. マダラマドガ (5上)

ボクトウガ科

3. ゴマフボクトウ (6上、7上・下、8上、9上)
4. ボクトウガ (6上、8上)

アゲハモドキ科

5. アゲハモドキ (6中、9上)

イラガ科

6. ムラサキイラガ (6上、9上)
 7. テングイラガ (6上、7上)
 8. タイワンイラガ (6上、7下、8上) イラガ科中最も多い。
 9. ナシイラガ (6上・下、7上、8上) 前種と共に最普通種。
 10. クロシタアオイラガ (6上)
 11. イラガ (7上・下、8上)

フタオガ科

12. クロホシフタオ (6上)

シャクガ科

13. オオアヤシャク (6上・下、7上、8上、9上)
 9月の雌は容易に産卵する。
 14. ウスアオシャク (5上、6上、9上) 三日月では余り多くない。
 15. アシプトチズモンアオシャク (4下、7上)
 16. カギバアオシャク (6上・下、9上・下)
 17. ノコバアオシャク (6上) 8月にも出る。
 18. カギシロスジアオシャク (6上・下、8上、9上・下) 最普通種。
 19. コシロオピアオシャク (6上・下) 6月には前種および次種と共に大型アオシャク中の最普通種であるが、一般には余り多い種ではない。
 20. クロスジアオシャク (6上・下)
 21. キマエアオシャク (6上、7上・下) 秋までいる。
 22. スジモンツバメアオシャク (6上)
 23. ヒメツバメアオシャク (9上・下)
 24. ハガタツバメアオシャク (6上・下)
 25. ヨツモンマエジロアオシャク (6上、8上、9下)
 26. ギンスジアオシャク (6下、7下、8上、9上)
 27. クロモンアオシャク (6上、7上・下、9上)
 28. ヨツメアオシャク (6下、9上)
 29. コシロスジアオシャク (9上)
 30. ウスキヒメアオシャク (5上)
 31. ウシミズアオシャク (4下)
 32. マルモンヒメアオシャク (5上)
 以上のほかにも Jodis などの小型アオシャクがいくつか採れているが、同定していない。
 33. フタナミトビヒメシャク (4下、5上)
 34. ウスベニスジヒメシャク (6上、7上、8上)

35. クロスジオオシロヒメシャク (6上・下、9上)
 36. ヒトツメオオシロヒメシャク (7下、8上)
 37. マエキヒメシャク (8上) 他にもいろいろと *Scopula* 属小型種がくるが、採集していない。(♀の同定が厄介なので)
 38. ベニヒメシャク (9上)
 39. ホソスジキヒメシャク (7上) *Idea* 属 (= *Sterrh*) の小型種もふつうは無視している。
 40. シタコバナナミシャク (4下、5上) *Trichopteryx* 属中の最普通種。
 41. チャオビコバナナミシャク (4下)
 42. クロシタコバナナミシャク (4下) 三日月以外では私は見たことがない。上記2種と混じって飛来し、数は決して少なくない。
 43. ウスベニスジナミシャク (3下)
 44. アカモンナミシャク (3下)
 45. アトスジグロナミシャク (6上) 普通種。
 46. ホソバナナミシャク (6上)
 47. ハコバナナミシャク (4下、6上、7上)
 48. ミカヅキナミシャク (4下) 近畿の低山地では各地でとれるが数は少ない。
 49. フタモンクロナミシャク (6下)
 50. モンキキナミシャク (3下、4下、5上) 最普通種。
 51. ナカモンキナミシャク (4下) 前種と混じっているが、それほど多くない。
 52. ギフウスキナミシャク (4下) 大阪の枚岡公園では極めて多いが、箕面、妙見、吉野、それにこゝ三日月でも少なくない種である。
 53. テンツマナミシャク (5上)
 54. ナミガタシロナミシャク (6中)
 55. ウストビモンナミシャク (6上、中)
 56. キマダラオオナミシャク (10下)
 57. キガシラオオナミシャク (6下)
 58. セスジナミシャク (5上、6上) 最普通種。
 59. オオハガタナミシャク (4下、5上、6上、7下) 同様最普通種。
 60. ハガタナミシャク (9下)
 61. シロホソスジナミシャク (4下)
 62. ピロウドナミシャク (9下、10下)
 63. クロオビナミシャク (10下)
 64. ウスクロオビナミシャク (10下)
 65. シロシタトビイロナミシャク (6上)
 66. ヒメクロオビフユナミシャク (11下)
 67. ウスアカチビナミシャク (5上、6上) 春季、他にも *Eupithecia* 属の種が多数飛来する。

68. スギタニシロエダシャク (9上)
 69. ヒメマダラエダシャク (9上)
 70. ヒトスジラダラエダシャク (6上・下、9上)
 71. ユウマダラエダシャク (6上)
Abraxasは69-71の3種が大へん多い。
 72. サザナミオビエダシャク (5上、6上、7上・下)
 73. ヤマトエダシャク (5上)
 74. ウチムラサキヒメエダシャク (6上・下)
 75. クロミスジシロエダシャク (10下)
 76. ナミスジシロエダシャク (4下) 多い。
 77. オオフタスジシロエダシャク (5上)
 78. フタホシシロエダシャク (6上)
 79. バラシロエダシャク (5上、6上、7上・下、8上)
 80. ウスアオエダシャク (4下、5上、6上・下)
 81. モンオビオエダシャク (4下、5上)
 82. ウスオビヒメエダシャク (6上、8上)
 83. ハグルマエダシャク (6下)
 84. スジハグルマエダシャク (7上)
 85. シロズエダシャク (4下)
 86. ウラキトガリエダシャク (6下、9上、10下)
 87. ツマキエダシャク (5上、6上)
 88. フタテンオエダシャク (5上、6上・下、7上・下、9上)
 89. ウスオオエダシャク (6上、9上)
 90. ツマジロエダシャク (7上)
 91. キオビゴマダラエダシャク (6上・下)
 92. クロフオオシロエダシャク (5上、7上)
 93. ゴマダラシロエダシャク (6上・下)
 94. オオゴマダラエダシャク (6上・下)
 95. オオシロエダシャク (9上)
 96. クロフシロエダシャク (6上、9下)
 97. キシタエダシャク (6上・下)
 98. ヒョウモンエダシャク (6上・下、7上)
 99. チャノウモンエダシャク (6上・下、9上)
 100. クロクモエダシャク (6上、9下、10下)
 101. ナミガタエダシャク (6上)
 102. ルリモンエダシャク (5上、6上)
 103. シロテンエダシャク (3下、4下)
 104. オレクギエダシャク (6上)
 105. ナカウスエダシャク (6上・下、10上・下)
 106. フタヤマエダシャク (6上・下、9上・下)
 107. ソトシロモンエダシャク (6上、7下、8上)
 108. マツオオエダシャク (6上)
 109. ウスバキエダシャク (4下) 少ない。
 110. ハミスジエダシャク (6上)
 111. オオバナミガタエダシャク (6上・下、9下)
 112. リンゴツノエダシャク (6上・下、7上・下、8上)
 113. トビネオオエダシャク (6上、9上)
 114. ウスバミスジエダシャク (6上)
 115. フトスジエダシャク (10下)
 116. コヨツメエダシャク (5上、6下)
 117. ヨツメエダシャク (6上・下、7下、8上、9上)
 118. ヨモギエダシャク (6上・下、7上・下、8上、9上・下)
 119. トガリスジグロエダシャク (6上) 阪神地方ではそれほど珍らしくなく、三日月でも6月には数が多い。
 120. マエモンキエダシャク (6上)
 121. セプトエダシャク (4下、5上、6上・下、8上、9上)
 122. フトフタオビエダシャク (3下、5上、6上・下)
 123. オオトビスジエダシャク (6上・下、7上・下、8上、9上) **Ectropis** では他にウスジロエダシャクがいる。
 124. ウスグロナミエダシャク (6中) 少ない種。
 125. ハラゲチビエダシャク (4下、5上、6下、7下、8上)
 126. ヒロオビオオエダシャク (8上)
 127. オオトビエダシャク (9上)
 128. ミヤマツバメエダシャク (7下、9上)
 129. シロフフユエダシャク (3下)
 130. チャオビフユエダシャク (3下) 最近各地でよくとれ、箕面では♂♀共最も数の多いフユエダシャクの1つとなっている。
 131. シモフリトゲエダシャク (3下)
 132. シロトゲエダシャク (3下) この種は前種よりややおくれて出現する。
 133. オカモトトゲエダシャク (3下)
 134. トビモンオオエダシャク (3下)
 135. ハイイロオオエダシャク (6上)
 136. アミメオオエダシャク (4下)
 137. ウスイロオオエダシャク (6上・下)
 138. アトシロエダシャク (3下)
 139. ハスオビエダシャク (4下)
 140. ホソバトガリエダシャク (3下、4下) 本種の♂は夕刻に樹上を盛んにとび渡る。
 141. ヒロバトガリエダシャク (3下)
 142. ゴマフキエダシャク (6上、8上、9上)
 143. ツマトビキエダシャク (6上・下)
 144. ヒゲマダラエダシャク (3下)
 145. ウスクモエダシャク (5上、8上)
 146. クワエダシャク (9上)
 147. オイワケキエダシャク (6上・中) 6月には数多く飛来する。関西では一般に稀。
 148. ギンスジエダシャク (6下、9上)
 149. サラサエダシャク (6上、8上、9上)
 150. ハスオビキエダシャク (8上) 少ない種。
 151. マエキトビエダシャク (5上、6下、7下、9上)

152. エグリツマエダシャク (4下、5上、6上、10下)
 153. オオノコメエダシャク (10下)
 154. カバエダシャク (11下)
 155. ツマキリウスキエダシャク (5上、6上、7下、8上)
 156. コナフキエダシャク (7下)
 157. トガリエダシャク (6上)
 158. キバラエダシャク (6下、10下)
 159. ツマキリエダシャク (3下、5上)
 160. ナカキエダシャク (4下、7上・下、8上、9上)
 161. ウラベニエダシャク (6上、7上)
 162. ウスキツバメエダシャク (6上・下、9下、10下)
 163. コガタツバメエダシャク (6上)
 164. シロツバメエダシャク (6下、9下)
 165. トラフツバメエダシャク (6中)

以上シャクガ科150種以上のうち、No.124とNo.150の2種のみは夫々1♂しか得ていないが、他のほとんどは一晚に10頭以上は飛来する普通種ばかりである。

カギバガ科

166. スカシカギバ (6上、9上、10下)
 167. モンウスギヌカギバ (6上・下、9上・下、10下)
 168. ウスギヌカギバ (4下、6上・下、7上・下、8上、9上・下)
 169. ギンモンカギバ (5上、6上、8上、9下)
 170. ヤマトカギバ (4下、5上、6上・下、7上・下、8上、9下)
 171. マエキカギバ (5上、6上、8上、9上)
 172. マンレイカギバ (6上・下)
 173. ウコンカギバ (6上、8上、9上、10下)
 174. クロスジカギバ (6上、7下、9下、10下)
 175. アシベニカギバ (7下、8上、9上・下)

本科には珍しいといえる種類が無いので、採るときにも熱が入らない。それだけに見過ごしている種もいくつかあると思われる。

トガリバガ科

176. モントガリバ (6上)
 177. オオバトガリバ (6上)
 178. ホソトガリバ (6上) 前種と混じって大へん数が多い。私にとってこれら2種は厄介者で、多数採って帰るのだがどうしても産卵してくれない。近頃はや、諦めの気分である。
 179. ムラサキトガリバ (10下)
 180. マユミトガリバ (4下)
 181. ホシボシトガリバ (4下)

カイコガ科

182. クワゴ (8上)

オビガ科

183. オビガ (9下) 秋の代表的な普通種の蛾であるが、ここでは意外に少ない。

カレハガ科

184. カレハガ (9上)
 185. オビカレハ (6上・下、7上)
 186. クヌギカレハ (10下)
 187. マツカレハ (6下、7上、9上・下)
 188. ツガカレハ (9上)
 189. ヤマダカレハ (10下)
 190. リンゴカレハ (6上・下、9上)
 191. タケカレハ (6上、9上)

本科も余り感激のない蛾で、特に初夏のオビカレハは他と同じく、うるさい位飛来する。

ドクガ科

192. スギドクガ (6上・下、9上)
 193. リンゴドクガ (4下、5上、8上) 明らかにスギドクガより一足先に出現する。
 194. アカヒゲドクガ (4下、5上、6上、7上、8上、9上)
 195. スズキドクガ (6上・下、9上) 6月のドクガでは *Calliteara* (= *Dasychira*) 属中の最多飛来種。秋にも得ているので、年2化は確実である。
 196. ナチキシタドクガ (8上) 1♀を得たのみ(1983年)。
 197. マメドクガ (6下、9上)
 198. ブドウドクガ (8上、9上)
 199. ヒメシロモンドクガ (6上、8上) この雑食性のドクガは樹木だけでなく、私の住む豊中市ではイタドリにも沢山の幼虫がついている。
 200. ヤクシマドクガ (6下) 1959年に1♂飛来。
 201. スゲオオドクガ (6上、8上)
 202. エルモンドクガ (6下、8上) 両月共飛来多数。
 203. スカシドクガ (6上7下、9上)
 204. キアシドクガ (6上) 1958年は全国的に大発生して新聞種になったが、私の家にも寺の住職から問合せの電話があった程異常な大飛翔を見た。
 205. シロオビドクガ (6上・下、7上、9上) 恐らく年2化。
 206. コシロオビドクガ (9上) この珍種は♂が昼飛性で採集のチャンスがない。産ませた卵を友人に依頼して飼育して貰い、6月末に多数の♂♀が羽化した。母蛾は1984年9月1日に、シロオビドクガの

♀♀に混じって日没後すぐに飛んできたものである。

207. マイマイガ (6下、7上) 飛来夥し。
 208. ハラアカマイマイ (6下、7上)
 209. カシワマイマイ (7上) 飛来夥し。
 210. ミノモマイマイ (8上)
 211. ウチジロマイマイ (6下)
 212. ニワトコドクガ (9上)
 213. クロモンドクガ (8上、9上)
 214. ゴマフリドクガ (5上、6上、7上、9上、10下)
 Euproctis属(真正ドクガ類) 中の最普通種で、冬以外いつもいる感じをうける。
 215. キドクガ (6上・下、8上、9上)
 216. ドクガ (8上)
 ドクガ科は私の仕事の上でも重点領域である。シタキドクガとマガリキドクガが飛来するに違いないと期待している。

シャチホコガ科

217. シャチホコガ (4下、5上、6上・下、7上、8上、9上)
 218. ヒメシャチホコ (9上)
 219. セグロシャチホコ (6上、9下)
 220. ヒナシャチホコ (6上)
 221. モンクログンシャチホコ (6上) 阪神地方では最近少なくなった種で、1950年頃は普通種であった。三日月でもやはり稀種。
 222. ホソバシャチホコ (6上・下、7上・下、8上、9上) 本科中の最普通種。
 223. ツマジロシャチホコ (6上・下、8上、9上・下)
 224. ヤスジシャチホコ (6上・下)
 225. スズキシャチホコ (5上、6上)
 226. コトビモンシャチホコ (6上・下、7上、8上、9上)
 227. ノヒラシャチホコ (4下) 晩春の普通種である。
 228. オオトビモンシャチホコ (10下)
 229. アオバシャチホコ (4下)
 230. アカネシャチホコ (4下、5上、8上、9上) 年2化で、とくに春は個体数が大へん多い。
 231. イシダシャチホコ (9上)
 232. ニトベシャチホコ (6上・下、8上) 6月の普通種。
 233. ルリモンシャチホコ (6上) 少ない。
 234. ナカキシャチホコ (6上・下、7上、8上、9上) ホソバと共に最普通種のシャチホコ。
 235. ヨシノシャチホコ (6上・下、8上) 本種も多数飛来する。
 236. ユミモンシャチホコ (4下)

237. タカオシャチホコ (6上・下、8上) 普通種で、ツマジロに混じって多数飛来する。
 238. クビワシャチホコ (6上・下、7上、8上、9上)
 239. ヘリスジシャチホコ (6下、8上)
 240. バイバラシロシャチホコ (5上、6上・下、7上)
 241. アオシャチホコ (4下、5上、6上・下、7下、8上)
 242. オオアオシャチホコ (6下)
 243. ブナアオシャチホコ (8上)
 244. カバイロモクメシャチホコ (6上・下) 本種も飛来種が多い。
 245. オオギンモンシャチホコ (6下、8上、9上)
 246. ハガタシャチホコ (9上)
 247. プライヤエグリシャチホコ (6上・下、7上、8上)
 248. ムラサキシシャチホコ (6上、8上、9上)
 249. オオエグリシャチホコ (4下、5上、6上・下、7上・下)
 250. ホソバネグロシャチホコ (6上・下)
 251. モンクロシャチホコ (8上)
 252. ムクツマキシシャチホコ (6下、7下、8上)
 253. ツマキシシャチホコ (7上)
 254. クロシタシャチホコ (6下)
 255. セダカシャチホコ (6下、7上・下、8上)
 256. アオセダカシャチホコ (6上・下、7上・下) 早朝(午前3時頃)に多数飛来する。
 257. ギンシャチホコ (6上・下、7上、8上)
 258. オオモクメシャチホコ (6上) 本種も1950年頃大阪近郊で決して珍らしくなかったが、現在ではほとんどとれない。シャチホコガ科の蛾は着着いた美しい色調をしており、灯火に飛来しても余りばたつかず、ちょっと離れた所でひっそりと止っていたりして、仲々魅力的で、愛好者も多い。たゞ、深夜から早朝にかけて飛来する種が多いので、採集にもその気構えが要る。
- #### ヤガ科
259. ウスベリケンモン (9上) 近頃減じたものの一つ。
 260. コウスベリケンモン (6上)
 261. キバラケンモン (9上)
 262. ゴマケンモン (6上・下、7下、8上)
 263. キクビゴマケンモン (6下) 1♂を得たきりだが、ゴマケンモンに混じっているのを見逃していることと思われる。
 264. ミツテンケンモン (6上、8上)
 265. シロフヒメケンモン (6上・下、7上、8上、9上) ケンモン類中の最普通種で、前翅前半の白色部がよく目立ち、かつ

- 変異が多くて、結構採集意欲をそそり立てられる蛾である。しかしそれも2~3回の採集で、しまいにうんざりする、それほど多産する。
266. ヒトテンケンモン (6上)
 267. シマケンモン (6下、8上)
 268. サクラケンモン (5上)
 269. シロフクロケンモン (6上・下)
 270. ナシケンモン (4下、5下、6上、7上、9上・下)
 271. シロシタケンモン (6上・下)
 272. リンゴケンモン (8上)
 273. ウスズミケンモン (5上)
 274. シロモンケンモン (6上、7下、9上)
 275. イチモンジキノコヨトウ (9上)
 276. クロスジキノコヨトウ (7上)
 277. カブラヤガ (4下、6上、7上、9上)
 278. タマナヤガ (8上) ニセタマナヤガはまだとれていない。
 279. マエジロヤガ (6上)
 280. クロクモヤガ (6上、10下) 抱卵している♀は晩秋のものに限られる。
 281. カバスジャガ (7上)
 282. オオカバスジャガ (6下)
 283. コウスチャヤガ (10下)
 284. ウスイロアカフヤガ (4下、5上、7上)
 285. アカフヤガ (10下) *Diarsia* 属やそれに近縁の種は各地で飛来数の多いものだが、高蔵寺では一晩で1~2頭しか飛んでこない。
 286. シロモンヤガ (6上)
 287. マエキヤガ (9上・下)
 288. ウスチャヤガ (9上・下、10下)
 289. ハイイロキシタヤガ (6上・下、9上・下)
 290. カギモンヤガ (4下)
 291. タバコガ (9下)
 292. シロシタヨトウ (5上、6上)
 293. フサクピヨトウ (6上) 少ない種。
 294. フタスジヨトウ (6上)
 295. カバキリガ (3下)
 296. カギモンキリガ (4下)
 297. クロミミキリガ (4下、5上)
 298. ブナキリガ (3下)
 299. ホソバキリガ (3下、4下)
 300. クロテンキリガ (4下、5上)
 301. シロヘリキリガ (3下、4下)
 302. スモモキリガ (3下、4下)
 303. カシワキリガ (3下、4下)
 304. アカバキリガ (4下、5上)
 305. スギタニキリガ (3下)
 306. ケンモンキリガ (4下)
 307. マツキリガ (4下、5上)
 早春のキリガ類は、採集回数が少ないだけでなく、周辺の環境から言っても、余り多種類は期待できそうにない。
 308. フタオビキヨトウ (6上、9上)
 309. マメチャイロヨトウ (9上)
 310. マダラキヨトウ (5上)
 311. クロキシタヨトウ (6上、9上)
 312. ナカオビキリガ (10下)
 313. ハンノキリガ (3下、11下)
 314. カシワキボシキリガ (3下)
 315. ミツボシキリガ (3下)
 316. ヨスジノコメキリガ (3下)
 317. チャマダラキリガ (3下、4下)
 318. クロチャマダラキリガ (3下)
 319. キマエキリガ (3下)
 320. フサヒゲオビキリガ (3下)
 321. テンスジキリガ (3下、5上)
 322. ホシオビキリガ (3下)
 323. カシワオビキリガ (3下)
 324. エグリキリガ (5上) 飛び古した1♀。
 325. ウスキトガリキリガ (10下)
 326. ノコメトガリキリガ (10下、11下)
 327. ミドリハガタヨトウ (11下)
 328. ホソバハガタヨトウ (11下)
 329. ヘーネアオハガタヨトウ (11下)
 330. ヒメカバマダラヨトウ (7下)
 331. ペニモンヨトウ (6上)
 332. マエホシヨトウ (9上)
 333. ウスアオヨトウ (6上)
 334. ハジマヨトウ (8上)
 335. ゴボウトガリヨトウ (10下)
 336. クマソオオヨトウ (7上) 1983年7月9日に3頭採集。
 337. アカガネヨトウ (6上)
 338. コクロモクメヨトウ (4下、5上)
 339. ホソバネグロヨトウ (6上)
 340. ネグロヨトウ (6上)
 341. チャオビヨトウ (6上・下、7上、9上)
 342. シロスジアオヨトウ (6上、9上・下)
 343. ハスモンヨトウ (10下)
 344. スジキリヨトウ (9上)
 345. ハイイロモクメヨトウ (6下、9上)
 346. モクメヨトウ (5上、6上、9上)
 347. シロマダラヒメヨトウ (6上・下)

348. モクメカラスヨトウ (6上)
349. オオシマカラスヨトウ (7上・下、8上、9上・下、10下) 産卵期は晩秋以降。
350. カラスヨトウ (7上・下、8上、9上、10下) やはり産卵は晩秋である。
351. シロスジカラスヨトウ (8上・下、9上・下、10下)
352. オオウスツマカラスヨトウ (7上、9上)
353. ノコメセダカヨトウ (6下)
354. シマキリガ (7上)
355. シラオビキリガ (6下、10下) 秋には数が多い。
356. フタテンヒメヨトウ (9上)
357. キクビヒメヨトウ (6上・下、8上、9上) 小型ヤガ中の最普通種。
358. ムラサキツマキリヨトウ (6上・下、8上、9上)
359. マダラツマキリヨトウ (6上、9上)
360. シロスジツマキリヨトウ (9上)
361. アヤナミツマキリヨトウ (9上)
362. シロモンオビヨトウ (6上、8上、9上)
363. シロテンウスグロヨトウ (6上、7上、8上)
364. ヒメサビスジヨトウ (9上)
365. ヒメウスグロヨトウ (5上)
366. テンウスイロヨトウ (6上、9上)
367. クロテンヨトウ (4下、5上)
367. マルモンシロガ (6下)
369. コマルモンシロガ (6上・下、7下、8上、9上・下) 前種より数が多く、殊に秋には夥しい程に飛来する。
370. ムジギンガ (9下)
371. ネジロキノカワガ (6上)
372. ネスジキノカワガ (5上)
373. ベニモンアオリンガ (6上)
374. アカマエアオリンガ (5上、6上、7上、8上、9上)
375. クロオビリンガ (4下、5上、9下)
376. カマフリンガ (6上、7下、9上)
377. ミドリリンガ (6下、8上、9上・下、10下) 秋には個体数が非常に増える。また、晩秋の♀は容易に産卵する。
378. アオスジアオリンガ (5上、7上、8上、9上)
379. アカスジアオリンガ (4下、5上、6下、7下、8上、9上)
380. ギンボシリンガ (7下)
381. リョクモンオオキンウワバ (9下)
382. イチジクキンウワバ (10下)
383. ギンモンシロウワバ (8上、9下)
384. ギンスジキンウワバ (5上)
385. イネキンウワバ (8上)
386. オオマダラウワバ (5上)
387. ユミガタマダラウワバ (6上)
388. ジマフコヤガ (6上、9上)
389. カバイロシマコヤガ (8上)
390. ウスベニコヤガ (6上・下、8上、9上)
391. テンモンシマコヤガ (6上)
392. ヒメククルマコヤガ (6上)
393. モンシロクルマコヤガ (6上、10下) 普通種。
394. マエヘリクルマコヤガ (6上、8上)
395. ハススジクルマコヤガ (7上、9上)
396. モモイロツマキリコヤガ (6上、9下)
397. ウスキコヤガ (6上、7上、9上) 最普通種。
398. シロスジキノコヨトウ (6上、8上)
399. ウンモンキノコヨトウ (9上)
400. アミメケンモン (6上、7上、8上)
401. ヨモギコヤガ (6下、7上、9上)
402. ヒメネジロコヤガ (7上、8上、9上)
403. ネジロコヤガ (6上・下)
404. シロフコヤガ (6上)
405. シロマダラコヤガ (6上、8上、9上)
406. ウスシロフコヤガ (6上)
407. ネモンシロフコヤガ (6上)
408. シロモンコヤガ (6上)
409. キモンコヤガ (5上、7上)
410. ウスアオモンコヤガ (6上)
411. ウチジロコヤガ (6上)
412. フタホシコヤガ (6上) よく似たシロヒシモンコヤガは以前、京阪神で普通に見られたが、最近減少したようである。
413. シロフタオビコヤガ (9上)
414. フタイロコヤガ (6上)
415. サビイロコヤガ (5上、10下) コヤガ類は十分に採っていないので、出現期の参考には余りならないかも知れない。
416. キシタバ (9上)
417. ジョナスキシタバ (10下) 1984年10月27日に飛び古した1♀を採集。北方の中国山地からの迷い子?
418. アサマキシタバ (6上) 1984年6月5日多数の新鮮な個体が飛来。20頭以上を採集しておいた。
419. コガタノキシタバ (7下)
420. マメキシタバ (7上、8上、9上・下) 普通種。
421. アミメキシタバ (7下、8下、9上・下) 長期に亘ってぼつぼつととれる。
422. カバフキシタバ (7下) 1984年7月24日新鮮な1♂。
423. ウスイロキシタバ (6下、7下) さほど珍しい

- 種ではない。例えば、1984年6月27日に計18頭採集。
424. ヒメアシプトクチバ (6上)
425. タイリクアシプトクチバ (9上) 1983年9月6日1♂。アシプトクチバの小柄な個体かと思いつつ念の為にとっておいた1頭である。
426. クビグロクチバ (9下)
427. ヒメクビグロクチバ (7下)
428. アサマクビグロクチバ (9上・下)
429. ウンモンクチバ (6上)
430. ニセウンモンクチバ (5上、6上、7上・下、8上)
Mocis 属では本種が圧倒的に多い。
431. モンキムラサキクチバ (4下、5上、7上・下、8上、9上・下)
432. モンシロムラサキクチバ (4下、7上・下、8上)
433. コヘリグロクチバ (7下)
434. カキバトモエ (6上、7上)
435. シロスジトモエ (5上、6上、7上・下、8上)
436. ハグルマトモエ (6上、7上・下、8上、9上)
437. オスグロトモエ (6上、7上・下、8上、9上)
438. フクラスズメ (10下)
439. ワタアカキリバ (6上)
440. アカキリバ (9上)
441. アカエグリバ (7上)
442. オオエグリバ (8上、9下)
443. マグラエグリバ (6上、7上・下、8上)
444. ウスムラサキクチバ (4下、5上)
445. アカテンクチバ (6上、7上)
446. コウンモンクチバ (7上・下、8上) 多産種。
447. ウスツマクチバ (5上)
448. オオトモエ (6上)
449. アケビコノハ (9上)
450. シラフクチバ (6上)
451. アヤシラフクチバ(アヤクチバ) (6上)
452. オオシラフクチバ(ハガタクチバ) (6上、9上)
453. オオシロテンクチバ (4下)
454. ヒメムラサキクチバ (6上)
455. マエヘリモンクチバ (6上)
456. マエジロクチバ (6上、9上)
457. シャクドウクチバ (6上、7下、8上) 多産種。
458. ウンモンツマキリアツバ (6上、9上)
459. ミツボシツマキリアツバ (8上)
460. ツマジロツマキリアツバ (6上)
461. ウスモイロアツバ (9上) 1983年9月6日多数飛来。講談社の大図鑑で発表された新種である。
462. リンゴツマキリアツバ (6上)
463. マエモンツマキリアツバ (6上)
464. チョウセンツマキリアツバ (6上、9上)
465. アトヘリヒトホシアツバ (9上) これも余り知られていない小型種。
466. ニセミカドアツバ (5上)
467. クロキシタアツバ (8上、9上)
468. タイワンキシタアツバ (5上、6上、7上・下、9上)
469. キシタアツバ (7上、8上、9上)
470. ヤマガタアツバ (5上、6上、7上、8上、9上)
471. ホシムラサキアツバ (7上)
472. モンクロアツバ (5上)
473. ソトムラサキアツバ (7下、9上)
474. ナカジロアツバ (4下、5上)
475. アヤナミアツバ (9上)
476. オオシラホシアツバ (6上、8上、9上)
477. ニセツマアカアツバ (6上、9上、10下)
478. ヒゲブクロアツバ (9上、10下)
479. ツマオビアツバ (9上)
480. ウスグロアツバ (6上、9上)
481. キイロアツバ (6上)
482. シラナミアツバ (6上)
483. フタスジアツバ (6上)
484. シラナミクロアツバ (9上)
485. フジロアツバ (6上)
486. ソトウスグロアツバ (4下、7上)
487. ハナマガリアツバ (6上、9下)
488. ウスキモンアツバ (7上) 講談社大図鑑の写真より黄紋が大きく濃い。

ヒトリガ科

489. ツマキホソバ (6上) Eilema属のホソバは多数飛来するが、♀の同定が厄介なのでほとんど採集していない。
490. ケベリネズミホソバ (6上)
491. マエキクロホソバ (6上)
492. マエグロホソバ (6上、7上、9上・下)
493. ヨツボシホソバ (6上、7上、9上・下、10下)
マエグロとヨツボシの♀は腹端の生殖孔で外見から簡単に区別ができる。
494. クビワウスグロホソバ (6上) 6月の最普通種。
495. ゴマフオオホソバ (6上、8上、9上) 当地では多産する。♀は6月と9月の2回産卵する。昼間飛ぶのは見たことがない。
496. アカスジシロコケガ (6上、7上、9上)
497. オオベニヘリコケガ (6上、9下)
498. ヒメホシコケガ (7上、8上) 本州から未記録のようだが、最近大阪の能勢でもとれている。

九州産より大きい。

- 499.フタホシキコケガ (8上)
 500.ベニヘリコケガ (6上、8上、9上)
 501.ハガタバニコケガ (8上)
 502.ゴマダラベニコケガ (7下、8上)
 503.スジベニコケガ (6上、8上、9上・下)
 504.ゴマダラキコケガ (6上)
 505.クロテンハイロコケガ (6上、7上)
 506.モンクロベニコケガ (6上、7上、8上、9上)
 507.ベニシタヒトリ (6上、9上) 多い。
 508.ホシベニシタヒトリ (9上) 前種と共に多数飛来する。
 509.キハラゴマダラヒトリ (6上、7上、9上・下)
 510.アカハラゴマダラヒトリ (6上、7下、8上)
 511.シロヒトリ (8上、9上)
 512.クロフシロヒトリ (5上)
 513.フタスジヒトリ (6上)
 514.カクモンヒトリ (6上、9上・下、10下)
 515.スジモンヒトリ (6上、8上、9上)
 516.キバネモンヒトリ (7上)
 517.オビヒトリ (6上、7上)
 518.アカヒトリ (9下)
 519.クワゴマダラヒトリ (9上)

コブガ科

- 520.ニセオオコブガ (9下)
 521.リングコブガ (6上)

カノコガ科

- 522.カノコガ (6中) 道傍の草地で。

イボタガ科

- 523.イボタガ (4下) 最近めつきり数の減った蛾で、めつたにとれなくなった。

ヤママユガ科

- 524.オオミズアオ (6上、7上・下、8上) 類縁種のオナガミズアオはまだとっていない。
 525.シンジュサン (6中) 本種も最近姿を見せなくなりつつある。
 526.ヤママユガ (8上、9上・下) 1983年には8月1日に2♂の飛来を見た。なお、1984年9月1日には飛来数が余りにも多いので、できるだけ色変りのものを4-5頭とっておいたが、帰宅後調べてみるとそのうちの1頭が、左右完全に分れた雌雄型であった。

- 527.エゾヨツメ (4下) 多数飛来する。
 528.クスサン (8上・下、9下、10下) 秋の蛾だが1983年には8月8日に既に飛来した。
 529.ヒメヤママユ (10下)

スズメガ科

- 530.メンガタスズメ (9上)
 531.エビガラスズメ (9下)
 532.シモフリスズメ (6上、7下、8上、9上)
 533.エゾシモフリスズメ (6中)
 534.サザナミスズメ (6上、8上)
 535.ホソバスズメ (6上、7下、8上)
 536.アジアホソバスズメ (6上・中、8上) 多数飛来したホソバスズメから、証拠品として1♂だけ採集しておいたものが、帰宅してからアジアホソバスズメであることが分った。以後注意しているが、時にはアジアのみしか飛来しなかった夜もある。
 537.トビイロスズメ (7下、8上)
 538.クチバスズメ (6上・中、7下、8上)
 539.モモスズメ (6上・中、7上・下、8上)
 540.コウチスズメ (5上) 1984年5月9日1♂。
 541.ウンモンズズメ (5上、6上、7下、8上)
 542.エゾスズメ (6上・中、7上)
 543.クルマスズメ (6上・中、8上、9上)
 544.ブドウスズメ (6中)
 545.クロホウジャク (6上・中)
 546.コスズメ (6上・中、7下)
 547.ベニスズメ (6上、9上)
 548.ピロウドスズメ (6上・中、7下、9上)
 549.ミスジピロウドスズメ (6上) これも6月5日に多数飛来したピロウドスズメの中から偶々採集しておいた1頭が帰宅後ミスジと判明した。以後気をつけているが、それきりまだとれない。
 550.ハネナガブドウスズメ (4下)
 551.キイロスズメ (9下)

スズメガ科では飛来しても無視することが多いので、なお2-3種の洩れがあるかも知れないし、飛来時期ももっと多かったと思う。なお、本年(1985)は西日本のあちこちで久しぶりにオオシモフリスズメが多数発生し、聞くところによるの能勢のさる駐車場の水銀灯下で100頭も拾ったという話があり、現に私も道路傍の水銀灯下で車の下敷になった多数の死骸を目にした。四国でも今年は随分多かったということである。残念ながら三日月では今年も遂に姿を見ずじまいであった。

以上約550種は、研究に必要な雌だけを見分けながら採るわけにはいかぬのでこれと思った飛来個体を一応生かしたままプラスチックケースに入れて持帰り、あとで雌を選り分けるときに、序でにメモしておいた種名をまとめたものである。目ぼしい種は展翅してあるが大部分は学生の解剖用や外国送りなど、他の用に廻してしまう。抱卵した雌は産卵するまで生かしておくので、最後にはすっかり鱗粉が剥げ落ちたり、翅がすり切れてしまったりする。私にとって三日月はいつでも採集に行けるところなので、却って一通りの標本が仲々揃えられない。しかし、分布を調べている人達にとっては少しでも情報が欲しいものだということは私自身よく承知しているので、標本を揃えてはいないが敢てまとめてみた次第である。

参考までに、高蔵寺で徹宵して採集した日時は次の通りである。

1983年：6月=6-7日, 7月=9-10日, 8月=1-2日,
8-9日, 9月=6-7日。

1984年：3月=29-30日, 4月=28-29日, 5月=9-
10日, 6月=5-6日, 27-28日, 7月=24-25
日, 9月=1-2日, 29-30日, 10月=27-28日,
11月=24-25日。

1985年：4月=25-26日, 6月=19-20日。

(S.24: Akito Kawazoe 豊中市)

県下の蝶数種の新産地

広畑政己

1. ミスジチョウ

本種は県下では採集記録の少ない種の1つでもあったが、越冬幼虫の調査によって近年数多くの産地が発見されている。特に播磨地域では僅かながら採集されているという程度だったが、調査の結果、北部には広く分布していることが判明している。最近では安富町の南部や相生市の三濃山で採集されたようで、ホシミスジが庭のユキヤナギで分布を都市部にまで広げているように、本種も庭のモミジをたよりに今後次第に分布を南部にまで拡大していくものと推測できる。新しく発見した産地は下記の通りである。また、浅田・徳岡の両氏より水上郡の記録を御提供いただいたので併せて報告しておきたい。

<採集記録>

宍粟郡山崎町土万	幼虫2頭	4-III-1984	広畑政己
飾磨郡夢前町寺河内	幼虫2頭	11-III-1984	"
水上郡春日町舟木	幼虫5頭	2-IV-1983	徳岡正己
" " 国領	幼虫1頭	2-IV-1983	"
" 市島町北奥	幼虫4頭	12-I-1984	浅田 卓

2. ヤマキマダラヒカゲ

一宮町福知溪谷にて本種を採集している。一宮町では小原、富士野に記録があるが、よく調査がされていないので、概知産地は極めて少ない。福知の記録は播磨地域では峰山につぐ南の記録である。

<採集記録>

宍粟郡一宮町福知溪谷	1♂	1-VII-1984	広畑政己
------------	----	------------	------

3. メスアカミドリシジミ

本種は県下中西部の山地に広く分布している。南部で低標高地にいくほど産地も少なくなり、その記録としては夢前町雪彦山、佐用町上石井などが南限の記録となっている。この度福崎町田口にて本種の卵を採集したので南限付近の記録として報告しておく。

採集したのは七種山山麓の田口で、七種川沿に残った一本の山桜(種不明)から3卵得ている。その近辺はほとんど植林されているか、雑木が伐採され、本種が生息するには好ましい環境ではないが、川沿に残された僅かな緑をたよりに、かろうじて生きながらえているという感じである。この記録は県下での南限の記録である姫路市林田町六九谷には及ばないが、それに継ぐ南の記録である。

また、千種町天児産に於ても4卵採集しているので併せて報告しておく。千種町の山林は伐採、植林がすすみ、林が残っているところが極めて少なくなっている。この天児屋でも、谷川沿にぼつんと残った数本のサクラで発生している。

調査に御協力いただいた近藤伸一、森下泰治、石井為久の諸氏にお礼申し上げる。

<採集記録>

神崎郡福崎町田口	3卵	4-X-1984	広畑政己
宍粟郡千種町天児屋	4卵	28-XI-1984	広畑政己

(S28: Masami Hirohata 〒671-22 姫路市)

兵庫県産蝶類分布資料 (4)

—— タテハチョウ科 シジミチョウ科 11種の記録 ——

広畑 政 己

はじめに

歳月の過ぎるのは早いもので、山本広一、吉阪道雄氏によって県下のほぼ全種に亘っての分布が発表されてから、かれこれ20数年が過ぎようとしている。その間県下にもいくつもの同好会が発足し、会員諸氏のたゆまぬ努力によって数多くの新産地や新知見が得られた。それらは、それぞれの同好会誌に報告され、年ごとにその資料は充実したものとなっている。しかし、それらをまとめた資料がなく、調査をする上で不自由を来たしていた。

そこで、これまでに比較的珍しい種について広畑(1979, 1980, 1981a, 1981b, 1982, 1983, 1984a, 1984b)にその分布の概要を報告してきたが、この度は、タテハチョウ科5種とシジミチョウ科6種についての分布をまとめて報告した次第である。

本稿を草するに当り、多くの方々から採集記録の御提供をいただき、筆者も微力ながら調査を行ってきたが、なにしろ兵庫県といえは筆者の地元である播磨地域をはじめ、但馬、丹波、阪神地域と広範囲に及ぶため調査も記録の収集も不十分で、残念ながらも単にこれまでの記録を羅列したにとどまった。従って、この小文は、ここに述べる種の基礎資料として御活用いただき、不備を補うことによって、一層充実した資料としていただくことを期待するものである。

列記した産地の中には現在すでに絶滅したところもあるが、参考記録としてそのまま文献を引用している。また、分布図を作成するに当っては、産地の詳細がわからないものもあったが、それらの一部は、市町村の中心地にプロットしている。

北部の状況については木下賢司氏から多くの御教示をいただき、採集記録の御提供を願った。また、次の方々にも何かと御協力いただいた。ここに記して感謝の意を申し上げる。

木村三郎、近藤伸一、米村和繁、鎌田邦彦、石井為久、高嶋明、高島昭、相坂耕作、岩村巖、川崎悟良、田中蕃、黒田収、徳岡正己、松尾隆人、森下泰治、佐々木薫、入江照夫、尾崎勇、稲田和久、上田倫範、平尾栄治、内海功一、吉田豊、西隆広、勝屋潤、松本勝由、坂志郎、花岡正、法西定雄、高橋寿郎、高田忠彦、大前晋(順不同)。

1. オオウラギンヒョウモン *Fabriciana nerippe*

草原性の蝶で近年極めて少なくなったものの筆頭が本種である。県下では1978年ごろまでは、関宮町の杉ヶ沢高原や同町葛畑などの高原で多数の個体が見られたが、同地に於てもほとんどその姿を見ることができなくなった。

これまでに判明している産地は約20ヶ所あるが、確実に見られるところは皆無に等しいといっても過言ではない。しかし、ここに上げた以外の所で少いながらも産地が確認されているようで、格好の草原を探せばまだまだ生息地は発見できるものと思われる。

既知産地の中で、低標高地の記録としては、小野市、川西市の東谷周辺、尼崎市の武庫川堤防、洲本市安平町、三原町賀集などがあるが、その後採集記録も聞かないので、おそらくこれらの産地についても絶滅したものと思われる。

また、高標高地では主として標高600m~800mの草原が生息地となっているが、以前と比較すると、これらの高原にあるススキ草原は、我々人類の生活様式の変化によってかなりの変貌をきたしている。

その一つには、農業の機械化によって牛馬を飼う必要がなくなったことや、わらぶき屋根がなくなり、草の刈り取りをしなくなったということがある。そのため、草木が繁茂し、ススキ草原が維持できなくなり、草原に生えている本種の食草であるスマレが絶えるというパターンとなっている。その代表的なものが栃原の南にあるかつての産地である。その他、ゴルフ場としての開発なども悪影響を及ぼしていることは言うまでもない。

また、低地の生息地である河川の土手も、改修によってその姿を変え、草が復元しても今やもう本種がいけないという状態になっている。

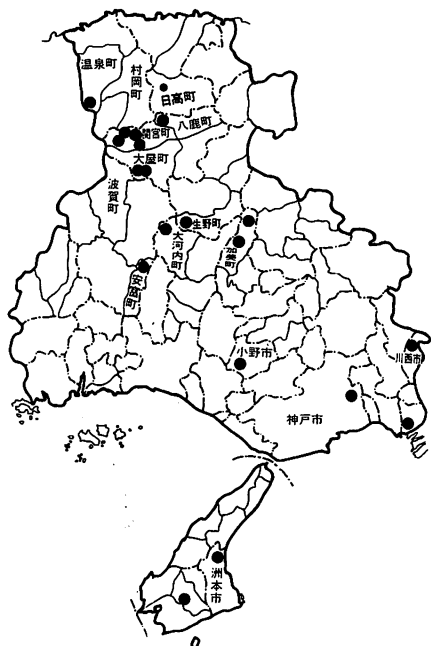
一方、環境の変化とともに大きな要因として上げられるものに乱獲がある。本種は低地では6月中旬に発生し、高標高地では7月中旬から発生するが、発生後すぐ産卵するという習性であればまだしも、9月に入ってから産卵するので、美しい雌はその間採集的になり、産卵する前に簡単に採集されてしまうということである。このことが、環境破壊とともに本種の個体数激減の大きな要因となっているようである。これ

までの採集記録を1例づつ上げると次の通りである。

〈採集記録〉

関宮町杉ヶ沢	3♂	24-VII-1977	広畑政己
〃 葛畑	5♂2♀	24-VII-1977	〃
〃 鉢伏山	1♂	10-VII-1955	吉阪道雄 ³⁾
〃 東鉢伏山	1♂1♀	23-VII-1978	米村和繁
〃 福定	1♂11	13-VII-1954	吉阪道雄 ⁶⁾
日高町神鍋山	1♂1♀	16-VIII-1986	木村三郎
温泉町扇ノ山	—	—	14)
大屋町若杉峠	—	—	14)
生野町段ヶ峰	1♀	8-VII-1956	山本広一 ³⁾
大河内町砥ノ峰	2♂1♀	9-VIII-1981	広畑政己
安富町関	1♀	16-VII-1961	平尾栄治
加美町鳥羽上	2♂	21-VI-1964	山本俊良 ³⁶⁾
〃 千ヶ峰	—	—	36)
小野市片山町	1♂	13-VI-1932	山本広一 ³⁾
川西市東谷	1♂	11-VI-1948	吉阪道雄 ³⁾
〃 山下~大路次川原	1♂	11-VII-1956	松本健嗣 ²¹⁾
〃 山下~一庫	1♂	11-VII-1956	〃 21)
尼崎市武庫川堤防	—	—	35
洲本市安乎町	1♂	23-VI-1946	堀田 久 ²⁴⁾
三原町賀集	1♂	— VI-1967	南 37)
神戸市六甲山	2♂	20-VII-1975	加藤昌宏 ³⁰⁾

図1. 兵庫県に於けるオオウラギンヒョウモンの分布



2. ウスイロヒョウモンモドキ *Melitaea diamina*

本種は中国地方の特産で本県が分布の東限となっている。以前には佐用町を中心とした低地や大河内町、関宮町、村岡町、温泉町などの山地において、最盛期には数多くの個体が見られた。しかし、近年その数は激減し、珍しい種の仲間入りをするようになってきている。

垂直分布は上月町下秋里の標高100数十メートルを下限に温泉町畑ヶ平高原など1000m付近にまで達している。その中でも図3の通り、佐用町のような標高200m~300mの山地の林縁や、中北部の標高500m~800mの草原に産地が多く見られる。

本種は低標高地の佐用町ではカノコソウを食し⁵⁰⁾、関宮町杉ヶ沢や村岡町大笹ではオミナエシを食草としている。オミナエシやカノコソウはいたるところに生育しているが、本種の生息条件が整わないのか新産地発見のニュースは期待に反して聞かない。しかし、有望な草原は北部を中心にまだまだ残されているので、今後の調査を待ちたい。

図2-1 兵庫県に於けるウスイロヒョウモンモドキの分布

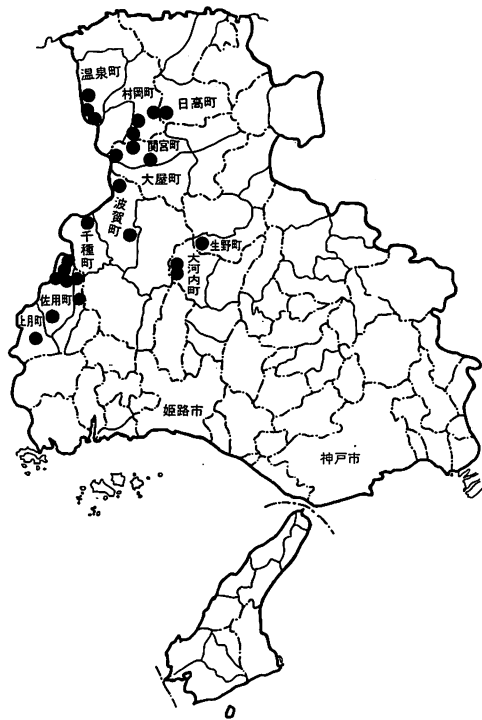
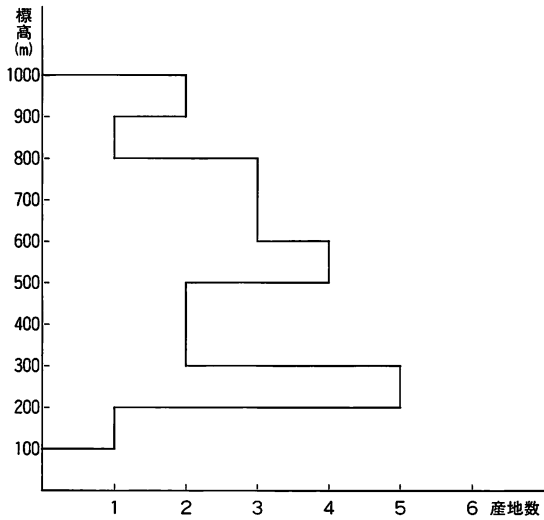


図2-2 兵庫県に於けるウスイロヒョウモンモドキの垂直分布



<採集記録>

大河内町峰山	20♂13♀	23-VII-1962	岩村 巖 ⁴⁹⁾
〃 砥ノ峰	1♂ 1♀	10-VII-1975	森下泰治
佐用町福沢	—	—	50)
〃 海内	1♂	23-VI-1973	尾崎 勇 ⁵¹⁾
〃 上石井	1♂	11-VI-1961	岩村 巖 ⁴⁹⁾
〃 奥海	1♀	17-VI-1962	岩村 巖 ⁴⁹⁾
〃 日名倉山	16♂12♀	14-VII-1972	尾崎 勇 ⁵¹⁾
〃 若洲	7♂ 1♀	12-VI-1977	尾崎 勇 ⁵¹⁾
〃 水根	1♀	14-VI-1959	中谷貴寿 ⁵²⁾
千種町三室山	3♀	10-VII-1973	尾崎 勇 ¹⁾
南光町船越山	—	—	3)
〃 三河村	1♂	13-VI-1959	中谷貴寿 ⁵²⁾
波賀町戸倉峠付近	—	—	宇野正紘 ⁵⁷⁾
上月町下秋里	1♀	—	田中 蕃 ³⁾
生野町段ヶ峰	幼虫1頭	18-X-1959	西村公夫 ⁵³⁾
温泉町上山高原	—	—	56)
〃 畑ヶ平	—	—	56)
〃 石橋地区	—	—	56)
関宮町氷ノ山	—	— VII-1949	守本陸也 ⁵⁴⁾
〃 鉢伏山	1♂	10-VII-1955	吉阪道雄 ⁵⁴⁾
〃 杉ヶ沢高原	—	15-VII-1973	谷角素彦 ⁵²⁾
大屋町	1♀	5-VII-1959	中尾淳三 ³⁾
日高町金山	2♂	8-VII-1978	足立・木下 ⁵⁵⁾
村岡町大笹	幼虫多数	28-VIII-1983	広畑政己
〃 耀山	—	—	56)
〃 兔和野	—	13-VII-1980	56)

3. ヒョウモンモドキ *Melitaea scotosia*

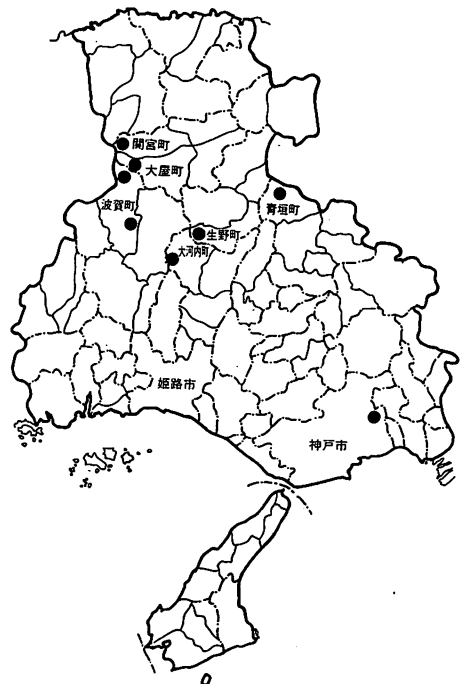
県下中部の湿性草地に生息している。前種ウスイロヒョウモンモドキよりもまだ少なく、近年も生息が確認されたという波賀町の東山と1981年に高嶋明氏によって再発見された生野町栃原以外の採集記録はその後見当たらない。

これまでに報告されている記録の中で、環境庁(1980)の粟鹿峯山麓の記録は青垣町稲土と思われるので粟鹿峯とはしていない。中国地方では休耕田のアザミにも発生しているが、本県ではその生態すら観察できないほど珍しい種となってしまった。

<採集記録>

生野町栃原	1♀	17-VI-1981	高嶋 明
波賀町東山	2♂	27-VI-1976	岩村 巖
関宮町氷ノ山	—	—	54)
大屋町横行付近	—	—	54)
六甲山山麓	1♂	— VI-1936	加地 早苗 ⁶⁴⁾
大河内町峰山	1♂	14-VII-1957	西村 公夫 ²⁾
青垣町稲土	1ex	29-VI-1952	甚田竜太郎 ³⁹⁾
波賀町戸倉高原	—	—	1)

図3. 兵庫県に於けるヒョウモンモドキの分布



4. シータテハ *Polygonia C-album*

古い記録としては、1901年の樽谷明吉氏による神戸市御影の記録がある⁸⁾。また、1909年には西播の地に於て井口宗平氏が夏型と秋型をそれぞれ1頭得たことが山本(1971)に報告されている。この他に、神戸市烏原貯水池付近に於て田中靖也氏により採集されたことが高橋(1941)にあり、その標本を確認されたことも高橋(1940)に記されている。

その後、1952年に西村公夫氏によって、生野町栃原にて2頭の夏型が採集され、1954年には吉阪道雄氏が養父郡の水ノ山で1頭の雌を採集されている。この水ノ山産の標本は、大阪市立自然史博物館にあるようで、日浦(1969)の資料の中に採集記録が明記されている。吉阪氏はこの他に水ノ山では福定で1♂を採集し、地蔵堂で1頭を目撃されている。これらは鳥取県側の春米の記録とともに本種の採集記録として吉阪(1955)に報告されている。

さらに、1955年には水ノ山山麓の能次よりの登山口に於て山本広一氏が採集し、翌年の1956年には養父郡大屋町筏に於て中尾淳三氏が、また氷上郡下からも採集されたことが山本(1960)にある。同文献には扇ノ山や雪彦山麓でも発見されたとあるが詳しいことはわからない。

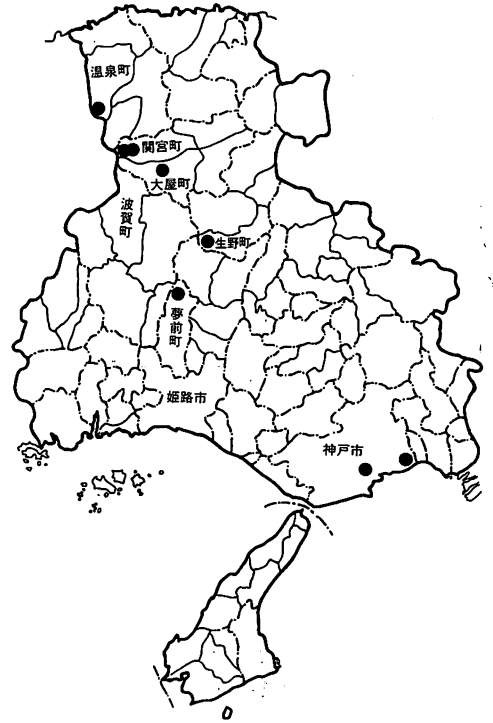
以上が県下で本種が発見されてから現在までの経過であるが、最近では採集者が以前と比較にならないほど多くなっているにもかかわらず、1956年以降30年間というものは採集記録を聞かない。

近隣地域の岡山県、鳥取県などに於ても同じ傾向なのか、同好会誌の「すずむし」「すかしぼ」「ゆらぎあ」等を見る限りでは1960年代とそれ以前の記録は散見するが最近の記録は見当たらない。

〈採集記録〉

神戸市御影	—	—	1901	樽谷明吉 ⁸⁾
〃 烏原貯水池付近	—	—	—	田中靖也 ⁶⁵⁾
生野町栃原	2exs	13-VII-1952	—	西村公夫 ³⁾
大屋町筏	1♂	—	VII-1956	中尾淳三 ³⁾
関宮町氷ノ山福定	1♂	—	VII-1954	吉阪道雄 ⁶³⁾
〃 〃 能次	—	—	—	山本広一 ³⁾
夢前町雪彦山	—	—	—	〃 ³⁾
扇ノ山	—	—	—	〃 ³⁾
氷上郡下	—	—	—	〃 ³⁾
西播	—	—	1909	〃 ³⁾

図4. 兵庫県に於けるシータテハの分布



5. オオムラサキ *Sasakia charonda*

県下一円に広く分布するが、一部の地域を除いては数は少ない。最近では越冬幼虫での調査を行うので、新しい産地もかなり見つかっている。しかし、地図上にプロットしてみると、産地の多い地域でありながら、南西部の山崎町や千種町では記録がなく、一宮町、波賀町に於ても予想外に産地が少ない。また、朝来郡、出石郡、美方郡、氷上郡、多紀郡も調査が行き届いていないのか極僅かしか記録がない。

県下での垂直分布を見ると、100m~200mの標高に産地が多く、100m以下がそれに続き、700m以上では記録がない。分布の南限は神戸市の多井畑になるが、宅地の造成が進み、今はもう当時の面影はない。しかし、神戸市中央区の諏訪山では近藤伸一氏によって1985年まで生息が確認されており、都市部での貴重な生息地となっている。

本種は落葉広葉樹の生える人里周辺の山麓や食草のエノキが生える山間の川沿に生息しているが、エノキの伐採や植林によって数が減少しているようである。しかし、周辺にめぼしい雑木林もないのに残された僅かな環境にかろうじて残っているという例もあるので

よく調査を行えば各地でまだまだ新しい産地が見つかるものと思われる。これまでに明らかになっている産地は次の通りである。

〈採集記録〉

- 佐用町奥村¹⁾、海内、上石井、日名倉山、福沢、上町、佐用坂、桑村、平福、長谷、若州
- 上郡町大富、野桑¹¹⁾、黒石、金出地¹⁾、白旗山、佐用谷、鯉ヶ谷、岩木
- 上月町西新宿、下秋里、岡坂、円光寺⁸⁾、空山
- 南光町船越¹⁾、東徳久¹⁾、上三河¹⁾
- 三日月町三日月⁹⁾
- 新宮町千本、善定
- 相生市爪生、小河、能下、椿峠、川原町
- 赤穂市尾崎¹⁾、有根横尾
- 姫路市林田町山田¹²⁾、書写山、砥堀
- 夢前町小畑、文殿、前之庄、蒔野、新庄、雪彦山
- 大河内町上小田、長谷
- 福崎町七種山
- 一宮町黒原、井内¹⁾、福中、草木
- 波賀町引原ダム¹⁶⁾、赤西溪谷
- 加古川市一乗寺¹⁷⁾、高畑¹⁷⁾
- 中町中村¹⁾
- 生野町柄原²⁾
- 安富町三坂
- 大屋町明延¹⁾、筏¹³⁾、天滝¹⁴⁾、横行
- 関宮町福定⁶⁾、鉢伏山¹⁹⁾、八井谷峠¹⁾、杉ヶ沢高原⁷⁾
- 日高町岩中、金山⁵⁵⁾、栃本¹⁾、名色⁹⁰⁾、稲葉⁹⁰⁾
- 香住町土生¹⁾
- 村岡町糞山⁹⁰⁾
- 温泉町菅原¹⁾、扇ノ山⁸⁾、三原高原、上山⁹⁰⁾
- 豊岡市三坂⁷⁾、大篠岡、妙楽寺¹⁰⁾、下鶴井¹⁰⁾、中ノ谷¹⁰⁾
- 金山¹⁰⁾、神武山¹⁰⁾、三開山⁹⁰⁾
- 八鹿町妙見山¹⁰⁾
- 出石町⁷⁾
- 美方町美方高原
- 春日町黒井⁵⁾
- 篠山町篠見¹⁾、王子山¹⁾
- 川西市笹部⁴⁾、西多田¹⁸⁾、多田²¹⁾、一の鳥居⁴⁾、山下⁴⁾、大和⁴⁾
- 猪名川町上阿古谷²¹⁾、仁部、木間生⁴⁾、六瀬³⁾槻並
- 三田市大原¹⁾、乙原¹⁾、八景中学校付近¹⁾
- 三木市戸田¹⁾、上の丸公園¹⁾
- 神戸市多井畑³⁾、小部³⁾、箕谷¹⁵⁾、鳥原貯水池⁷⁹⁾、有馬³⁾、北区山の街⁵⁾、布引貯水池、中央区諏訪山

西脇市童子山、堀町¹⁾
 滝野町光明寺
 尼崎市猪名寺付近¹⁾

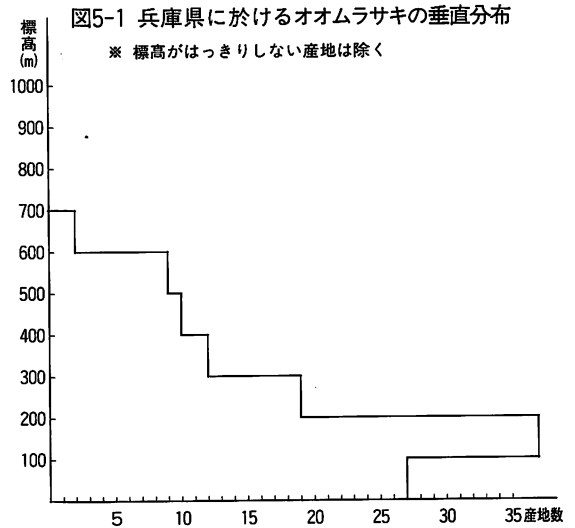
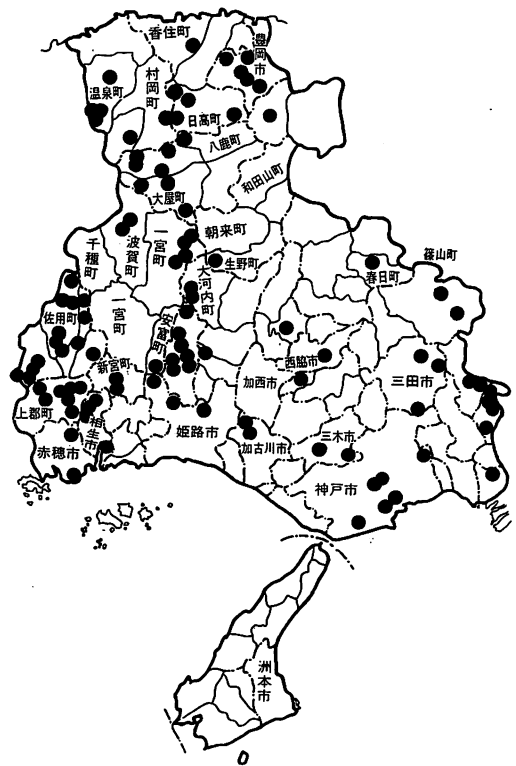


図5-2 兵庫県に於けるオオムラサキの分布



7. ムラサキツバメ *Narathura bazalus*

<採集記録>

近畿地方では和歌山県をはじめ、京都、滋賀、奈良、大阪の各県でも記録があるが、和歌山以外は極めて少ない種で、当地域が分布の北限域となっている。

本県では1953年の篠山町の記録が最も古く、その後明石、神戸、宝塚等の各地でも採集されているが、これらの地域からはそれ以降記録はない。比較的採集例の多いのは相生市三濃山麓と赤穂市の周世で、ここでは本種の食樹であるシリブカガシも多く、1980年代に入っても何年か続けて採集されているので、土着しているものと思われる。

篠山町の記録以外は県下でもその産地は南部の温暖な地域に限られていたが、1983年には、内陸部の波賀町小野にて成虫とシリブカガシより幼虫が採集され⁴³⁾、シリブカガシの分布とともに本種の分布を考える上での興味ある存在となっている。

これまでに県下で判明している産地は12ヶ所になる。この他に松浦俊児氏の記録が甚田(1953)にあるが、当村でとれたとなっており、篠山町(旧岡野村)と思われるので甚田氏の記録を使っている。また、西田史郎氏が1943年7月3日に妙見山で採集されたことが小佐々(1947)に報告されているようであるが、大阪か兵庫かわからないので県下の記録としていない。これが川西市であれば、最も古い記録となる。

明石市北王子町	—	—	VIII-1959	小林 進 ³⁸⁾
” 大久保町江井が島	1♀	4-X-1959		竹内崇郎 ³⁸⁾
篠山町	—	—	—1957	甚田竜太郎 ³⁹⁾
宝塚市	—	—	—	— ³⁸⁾
神戸市ジェームス山	1♂	14-X-1979		加藤昌宏 ³⁰⁾
” 鉢伏山	—	—	—	— ³⁰⁾
” 多井畑	—	—	—	— ³⁰⁾
川西市妙見山	1♀	29-VII-1964		渡辺康之 ⁴²⁾
相生市三濃山	1♀	1-IX-1966		米村和繁 ⁴¹⁾
” 小河	1♀	29-VII-1982		入江智朗
赤穂市周世	1♀	5-IX-1981		唐土洋一 ⁴⁰⁾
波賀町小野	1♀	18-IX-1983		勝屋 潤 ⁴³⁾

8. クロシジミ *Niphanda fusca*

青森県から九州の鹿児島県まで分布するが、いずれの地域も局所的で、近年絶滅した産地も多くなっているようである。県下ではこれまでに40数ヶ所の産地が知られているが、分布図を見てもわかるように、中南部の生野、加美、西脇、小野、姫路などの地域を除けば、産地は4地域にかたまっている。1つは関宮町、美方町、温泉町等北部の山地草原、もう1つは相生市、赤穂市、上郡町など南西部低山地、あと2つは神戸、芦屋、西宮の各市と淡路島である。

広く分布しながら空白地域が多い要因については不明であるが、宍粟郡周辺、但馬の東半分、丹波などではこれまで記録がない。既知産地をみると、ススキ草原であったり、カシワなどの疎林であったり、田畑や荒地の周辺などに生息しているので、もっと広く分布していてもよいようには感じるが、本種の宿主役になるクロオオアリとアブラムシとの関連が微妙に影響し合っ、このような分布になっているようである。しかし、十分な分布調査もできていないことは事実で今後これら空白地域の調査が望まれる。

40数ヶ所の産地の内、標高がわかっているものだけをまとめて垂直分布図に表すと図8-1のようになる。南部の低山地では標高50m~300mの所が多く、北部になるに従って標高が上り、400m~1,000mが生息地となっており、低標高地での記録はない。県下全般的には50m~500mが垂直分布の中心となる。

福崎町の田口では10年程前まで、また、関宮町葛畑では5年程前までかなりの個体が見られたが、近年では散見する程度になってしまった。その他の産地につ

図7 兵庫県に於けるムラサキツバメの分布



いても同じことが言えるのではないだろうか。これまでの記録を産地ごとに1例づつ上げると次の通りになる。この中には地名が違うだけで同一産地かもしれないが、そのまま列記している。

〈採集記録〉

津名町妙見山	1♀	14-VIII-1951	堀田 久 ²⁴⁾
〃 志筑明神	—	—	— ²⁴⁾
神戸市神戸森林植物園	2♂10♀	—VII-1964	三木 進 ²³⁾
〃 六甲山タコジャレ	1♀	28-VII-1952	溝口 修 ²⁸⁾
〃 御影町	1♀	4-VIII-1949	吉阪道雄 ²⁸⁾
〃 山の街	2♂1♀	23-VII-1967	相坂耕作
〃 再度山	—	—	— ³⁰⁾
〃 北区山田町箕谷	1♂4♀	19-VII-1959	尾崎 勇
〃 鷹取山	—	—	— ³⁰⁾
〃 布引	—	—	— ³⁰⁾
〃 有野町逢山狭	3♀	26-VII-1959	尾崎 勇
〃 六甲山上	1♀	7-VII-1960	〃
三田市母子	1♀	3-IX-1965	矢田 修 ²⁹⁾
西宮市甲山神呪寺	—	—	— ³¹⁾
芦屋市芦屋川上流	1♀	2-VIII-1981	西 隆広 ³⁴⁾
川西市西多田	—	25-VII-1966	小坂利明 ⁴⁾
小野市阿形町	—	—	— ²⁷⁾
西脇市和田町	—	—	— ³³⁾
〃 岡ノ山	—	—VII-1979	徳岡正己
社町三草	5♂	8-VII-1978	〃
姫路市増位山	1♂	—VIII-1960	木村三郎
〃 山田町多田	13exs	上旬-VII-1983	上田倫範
福崎町田口	2♂2♀	19-VII-1975	広畑政己
相生市爪生	1♀	21-VII-1962	米村和繁
〃 三濃山	1♂	19-VII-1962	〃 ²⁶⁾
〃 能下	1♂	17-VII-1966	中浜 潔 ²⁶⁾
〃 山手町	—	—	川崎悟良
赤穂市有年	2exs	8-VII-1956	橋本— ²⁶⁾
上郡町大山寺	1♀	4-VIII-1957	唐士洋— ²⁶⁾
〃 富満	1♀	2-VIII-1966	米村和繁 ²⁶⁾
〃 黒石	3♂1♀	13-VII-1974	佐々木薫
〃 市原	1♂5♀	8-VII-1978	石井為久
上月町櫛田	1♂1♀	—VIII-1960	木村三郎
生野町栃原	3♂	13-VII-1952	吉阪道雄 ²⁸⁾
朝来町段ヶ峯	—	—	— ²⁷⁾
加美町市原千ヶ峰	—	4-VII-1959	— ³³⁾
村岡町兔和野	—	—	高島 昭
八鹿町妙見山	—	—	— ⁷⁾
関宮町氷ノ山福定	1♂	27-VII-1954	吉阪道雄 ⁶⁾
〃 葛畑	3♂1♀	27-VII-1979	広畑政己
〃 杉ヶ沢	1♂2♀	9-VII-1978	〃
〃 別宮	8♂6♀	15-VII-1980	福井丈嗣 ⁹⁰⁾

温泉町上山高原	—	19-VIII-1973	中野 真 ⁷⁾
〃 春木	2♀	16-VIII-1980	広畑政己
〃 肥前畑	1♂1♀	4-VII-1982	黒井和之 ⁹⁰⁾
三川山	—	1-VIII-1974	遠藤知二 ²²⁾
美方町三方高原	—	17-VII-1981	谷色素彦 ³²⁾
〃 熱田	—	18-VII-1981	加野・島田 ³²⁾
日高町稲葉	1♂1♀	2-VIII-1963	小崎茂樹 ⁹⁰⁾

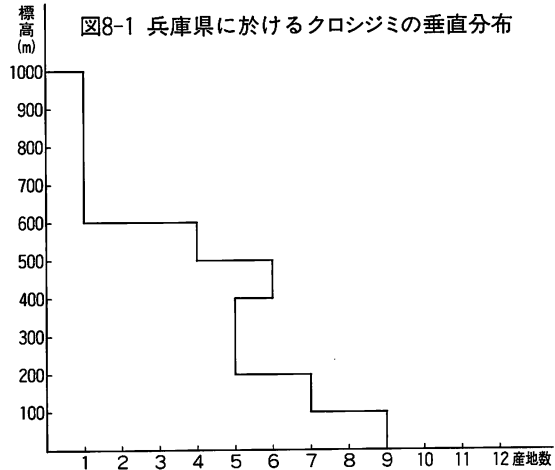
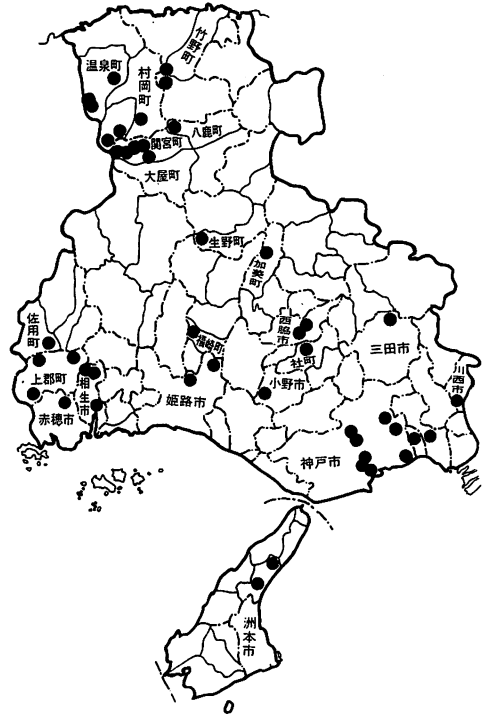


図8-2 兵庫県に於けるクロシジミの分布



9. スギタニルリシジミ *Celastrina sugitanii*

本県では中西部から北部にかけて20数ヶ所の産地があり、トチノキの分布とほぼ一致している。

しかし、採集記録をまとめてみると、トチノキが分布するにもかかわらず本種の記録のない所もあり、産地の数も思いのほか少ない。

県下に於ける南限の記録は雪彦山で、ここではトチノキを食樹としており、個体数も多い。南部ではこの雪彦山が唯一の産地であったが、近年南光町の船越山や一宮町の福知、深河谷などからも本種が見つかる。

垂直分布は標高400m~500mに産地が多く、トチノキの分布が低標高地にまである浜坂町、香住町、城崎町では300m前後にまで本種が生息している。また、上限は坂ノ谷林道、戸倉峠など800m前後と思われるが、氷ノ山という記録もあり定かではない。

本種はトチノキの他にミズキやキハダも他の地域では食樹としているが、紅谷(1971)によると本種の既知産地以外ではミズキは七種山、段ヶ峰、朝来町田路、瀬川山その他数ヶ所に記録があり、キハダも生野町黒川、朝来町佐中、平野、老波などで確認されており、トチノキの分布する丹波の神楽、後川と共に調査が望まれる。

波賀町坂ノ谷林道	2♂	28-IV-1985	高島 昭
一宮町深河谷	1♀	11-V-1974	尾崎 勇
〃 福知	—	— V-1981	高嶋 明
〃 溝谷	1♂	8-V-1983	佐々木 薫
〃 樅ノ木林道	2♂	28-IV-1985	高島 昭
南光町船越山	—	— V-1981	高嶋 明
夢前町雪彦山	1♂	13-IV-1958	中谷貴寿 ⁴⁷⁾

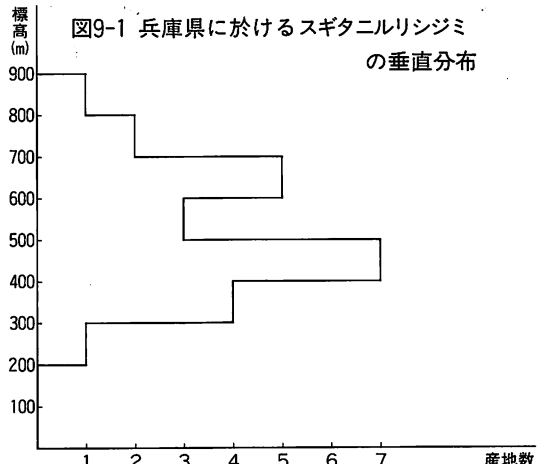
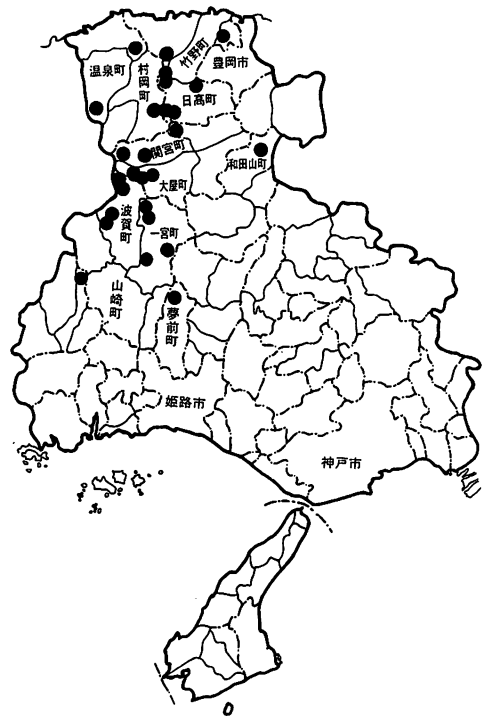


図9-2 兵庫県に於けるスギタニルリシジミの分布

〈採集記録〉

浜坂町久斗山	2♂	7-V-1980	福井丈嗣 ⁹⁰⁾
香住町三川	1♀	24-IV-1979	木下賢司 ⁹⁰⁾
城崎町来日岳	1♀	10-V-1975	〃 90)
日高町大岡山	2♂	5-V-1984	〃 90)
〃 稲葉	6♂1♀	24-IV-1985	〃 90)
〃 金山	1♂1♀	25-IV-1982	広畑政己
八鹿町妙見山	—	—	— 45)
村岡町耀山	2♂3♀	12-V-1978	木下賢司 ⁹⁰⁾
温泉町霧滝	4♀	11-V-1979	〃 90)
関宮町氷ノ山	—	—	— 14)
〃 安井	3♂	2-V-1979	木下賢司 ⁹⁰⁾
大屋町若杉	2♂	29-IV-1957	中尾淳三 ¹³⁾
〃 筏	2♂	27-IV-1957	〃 13)
〃 西谷	—	—	— 27)
〃 横行	1♀	1-V-1974	尾崎 勇
和田山町糸井谷	1♂	21-IV-1977	木下賢司 ⁴⁴⁾
波賀町戸倉峠	20exs	3-V-1952	松井俊公 ⁴⁶⁾
〃 赤西溪谷	1♂	5-V-1981	広畑政己
〃 音水	37♂1♀	24-IV-1968	尾崎 勇



10. カラスシジミ *Strymonidia w-album*

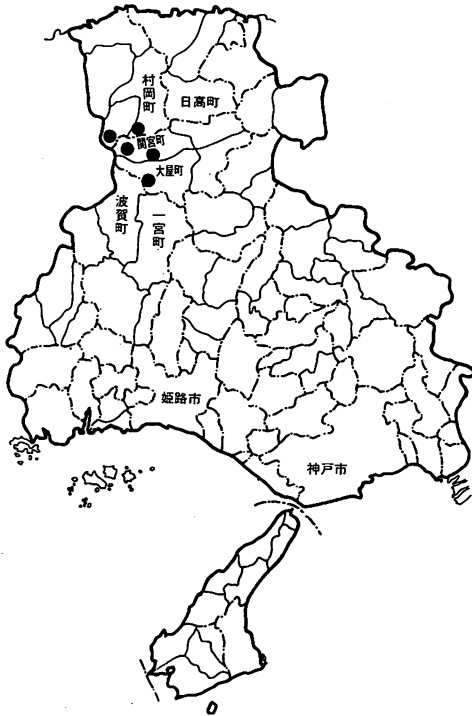
県下では極めて希な種で、これまで6ヶ所の産地が知られているにすぎない。西宮市甲東園の記録は疑問が残るが、他の産地についてはそのほとんどが近年発見されており、村岡町大笹にある鉢北高原ではその後も生息が確認されている。

本種はハルニレ、オヒョウを食樹としているが、この食樹は鉢北では標高800m~900mにかなりの数が見られる。紅谷(1971)には、これらの食樹が音水、赤西、峰山、妙見、段ヶ峯、栗賀山、扇ノ山、多良木などにあることが記されているので、既知産地周辺とも併せて今後調査を進めたい。

<採集記録>

西宮市甲東園	——	VI-1932	加地早苗 ⁸⁸⁾
大屋町若杉峠	1♂	VI-1958	譲尾 勲 ¹³⁾
氷ノ山布滝	2exs	19-VII-1971	辻 啓介 ⁵⁹⁾
美方町小代溪谷	1♀	6-VII-1982	山本 勝 ⁶⁰⁾
関宮町杉ヶ沢	1ex	29-VI-1975	足立義弘 ⁶¹⁾
村岡町鉢北高原	2exs	30-VI-1984	福井丈嗣 ⁶²⁾

図10 兵庫県に於けるカラスシジミの分布



11. ベニモンカラスシジミ *Strymonidia iyonis*

隣の岡山県では数多くの産地があるが、兵庫県では波賀町原と川副・若林(1976)の兵庫県西北部という記録しかない。西北部の記録は採集者が明らかにされないようので詳しい産地は判らない。

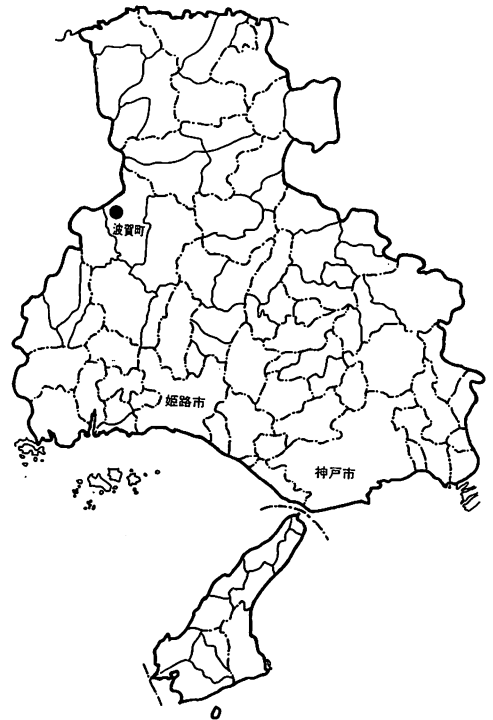
原の記録は1979年2月6日に木村三郎氏によって12卵が採集され、その内8頭が5月中旬に羽化している。原の赤西溪谷の入り口付近帯では少ないながら食樹のクロウメモドキが見られるが、その後再三調査を行ったが発見されていない。また、佐用郡下の各地にもかなり調査に入っているが朗報を聞かない。

しかし、聞くところによると、1985年に一宮町にて卵を採集したとの情報が入っているので、今後新しい産地が発見される可能性は大きい。

<採集記録>

波賀町原	12卵	6-II-1979	木村三郎
兵庫県西北部	——	——	—— ⁸⁹⁾

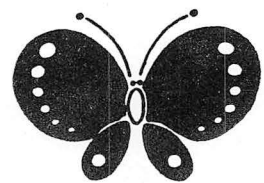
図11 兵庫県に於けるベニモンカラスシジミの分布



〈参考文献〉

- 1環境庁 (1980)日本の重要な昆虫類 東京
- 2西村公夫(1967)播州高原の蝶類について 兵庫生物 5 (3/4) : 222-229
- 3山本広一・吉阪道雄(1960)兵庫県産蝶類目録(3) 兵庫生物 4 (1)
- 4仲田元亮(1984)能勢の昆虫(蝶の部) 自刊
- 5日浦 勇(1969)日本列島の蝶(I)大阪市立自然科学博物館収蔵資料目録第1集 大阪
- 6吉阪道雄(1956)氷ノ山の蝶類(II)兵庫生物 3(3) : 124-125
- 7高橋 匡(1975)豊岡高等学校昆虫標本目録(1・2) 県立豊岡高等学校生物教室 豊岡
- 8山本広一(1971)兵庫県の蝶相 月刊むし(3)
- 9広利雅美(1977)三日月町の蝶 てんとうむし (4):5
- 10遠藤知二他(1975)豊岡市周辺の蝶 兵庫県自然保護協会但馬支部研究紀要 1(1)
- 11唐士洋一(1981)赤穂郡産オオムラサキスギタニ型の記録 てんとうむし (7) : 43
- 12相坂耕作(1980)姫路市の昆虫 てんとうむし (6) : 10-20
- 13中尾淳三(1959)氷ノ山付近の蝶相 Naturs (16) : 15-23
- 14高橋 匡(1979)但馬地方昆虫目録 IRATSUME (3) : 40-58
- 15田中 梓(1981)こうべ自然誌 神戸新聞出版センター兵庫
- 16相坂耕作(1980)夜間灯火に飛来した蝶14種 てんとうむし(6) : 36
- 17高嶋 明(1984)加古川の蝶 てんとうむし(9):46-49
- 18浜 祥明(1970)兵庫県川西市多田のゼフィルス類 Crude (5) : 15
- 19山本広一(1955)但馬氷ノ山夏の蝶 兵庫生物3(1/2) : 22-26
- 20谷角素彦(1978)日高町金山の蝶 IRATSUME (2) : 11-21
- 21大阪昆虫同好会(1981)北摂の昆虫 尼崎
- 22遠藤知二(1976)妙見・蘇武・三川および神鍋周辺の蝶類 兵庫県自然保護協会但馬支部研究紀要 2(3) : 1-11
- 23三木 進(1979)六甲山系(西部)の蝶 きべりはむし 7(1) : 2-7
- 24登日邦明(1974)淡路島の蝶相(II) 佳香蝶26(9) : 25-32
- 25広畑政己(1984)兵庫県に於ける蝶数種の記録 てんとうむし (9) : 45
- 26岩村 巖(1967)西播の蝶分布資料(5) 兵庫生物 5(5) : 386-387
- 27山本広一・吉阪道雄(1959)兵庫県産蝶類目録(2) 兵庫生物 3(5) : 358-364
- 28日浦 勇(1970)日本列島の蝶(II) 大阪市立自然科学博物館収蔵資料目録第2集 大阪
- 29辻 啓介他(1970)多紀郡蝶類目録 兵庫生物 6(2) : 158
- 30加藤昌宏・武衛晴雄(1981)神戸の蝶 神戸市立教育研究所 神戸
- 31柳沢俊二(1968)甲山周辺の蝶 甲陵生物(3) : 17
- 32島田真輔(1982)美方町の蝶 IRATSUME (6) : 27
- 33猪股涼一・岡本 清(1960)多可西脇地方の昆虫 兵庫生物 4(1) : 23-28
- 34西 隆広(1984)芦屋市の蝶 てんとうむし (9):28-38
- 35吉阪道雄(1954)武庫川堤防のオオウラギンヒョウモン Saphirinus 2(4) : 76-77
- 36山本俊良(1981)オオウラギンヒョウモンの古い発生地を尋ねて てんとうむし (7) : 38
- 37堀田 久(1983)淡路島の蝶の変遷 Parnassius (27) : 14
- 38山本広一・吉阪道雄(1965)兵庫県産蝶類目録(4) 兵庫生物 5(1) : 52-55
- 39丹波昆虫研究会(1957)丹波の蝶 丹波昆虫(3) : 1-15
- 40唐士洋一(1981)西播におけるムラサキツバメの新産地 てんとうむし (7) : 19
- 41米村和繁(1966)相生市におけるムラサキツバメの採集例 昆虫と自然 1(8) : 12
- 42渡辺康之(1978)ムラサキツバメの能勢妙見山での記録 Crude (17) : 14
- 43勝屋 潤(1985)宍粟郡波賀町のムラサキツバメの記録 きべりはむし 13(1) : 13-16
- 44木下賢司(1979)床ノ尾山の蝶 IRATSUME (3):20-32
- 45山本広一(1974)東中国山脈東端の昆虫相・チョウ類 東中国山地自然環境調査報告 兵庫県岡山県鳥取県 190-193
- 46松井俊公(1955)兵庫県宍粟郡の蝶類 兵庫生物 3 (1/2) : 33-35
- 47吉阪道雄・中谷貴寿(1959)県下に於けるスギタニルリシジミの新産地 兵庫生物3(5):400
- 48上田尚志(1970)夏の金山 但馬の生物 17(8) : 11
- 49岩村 巖・中谷貴寿(1964)兵庫県に於ける蝶類分布資料(3) 兵庫生物 4(5) : 242-243, 238
- 50福田晴夫他(1983)原色日本蝶類生態図鑑III 保育社
- 51尾崎 勇(1980)兵庫県の蝶(1) 千種川水系の蝶相 ひろおび (5) : 24-30
- 52岩村 巖・中谷貴寿(1960)佐用郡北部に蝶を採集し

- 兵庫生物 4(1): 36
- 53西村公夫(1954)ウスイロヒョウモンモドキ MDK-NEWS 別冊
- 54山本広一(1955)兵庫県氷ノ山夏の蝶 虫同友会研究報告 I : 49-54
- 55谷角素彦・足立義弘(1979)金山・蘇武山系の蝶類 IRATSUME (3): 8-18
- 56谷角素彦(1981)但馬におけるウスイロヒョウモンモドキの分布について IRATSUME (5): 25-27
- 57宇野正紘(1982)関西の蝶思いつくまま 多摩虫 5(12): 1-3
- 58川副昭人・若林守男(1976)原色日本蝶類図鑑 保育社 大阪
- 59辻 啓介(1972)氷の山の蝶 2種 月刊むし (11): 39
- 60吉富章雄(1983)小代溪谷にてカラスシジミを採集 IRATSUME (7): 25
- 61足立義弘(1983)幻のカラスシジミ IRATSUME (7): 26
- 62但馬むしの会(1984)鉢北でカラスシジミを多数採集される 混蟲ずかん (7): 1
- 63吉阪道雄(1955)氷ノ山の蝶類(I) 兵庫生物 3(1/2): 27-29
- 64加地早苗(1940)最近の六甲連山の蝶類目録 昆虫界 8(77): 442-452
- 65高橋寿郎(1941)神戸産数種の蝶類に就いて 昆虫世界 45(521): 28
- 66福田[卓](1902)きまだらるりつばめ 1産地 博物之友 2(14): 22
- 67山本広一(1968)県内採集地今昔譚(2) MDKNEWS 20(1): 2-5
- 68山本広一(1965)1964年夏の理科作品展に拾った2~3の蝶とその分布について 兵庫生物 5(1): 48-49
- 69広畑政己(1979)美方高原 7月上旬の蝶 IRATSUME (3): 38
- 70広畑政己(1979)兵庫県のクロツバメシジミ ひろおび (4): 10-14
- 71広畑政己(1980)兵庫県のシルビアシジミ てんとうむし (6): 5-9
- 72広畑政己(1981a)兵庫県に於けるウラナミジャノメの分布と生活史 てんとうむし (7): 1-5
- 73広畑政己(1981b) 兵庫県産蝶類分布資料(1) てんとうむし (7): 30-34
- 74広畑政己(1982)兵庫県産蝶類分布資料 (2) てんとうむし (8): 30-40
- 75広畑政己(1982)兵庫県に於けるヒメキマグラヒカゲの分布と化性について ひろおび (6): 31-34
- 76広畑政己(1983)兵庫県に於けるナガサキアゲハの分布の変遷について 昆虫と自然 18(5): 18-22
- 77広畑政己(1984a) 兵庫県産蝶類分布資料 (3) てんとうむし (9): 18-24
- 78広畑政己(1984b) 兵庫県に於けるウスイロコノマチョウの採集記録 ひろおび (7): 41
- 79高橋寿郎(1940)神戸烏原貯水池附近産蝶類目録(其の1) 昆虫世界 8(7)5: 365-367
- 80福田晴夫他(1983)原色日本蝶類生態図鑑(II) 保育社 大阪
- 81青木陽一(1970)キマダラルリツバメ 兵庫県生野町で採集 Crude (5): 17
- 82谷角素彦(1978)シーズン到来の前に考えたこと IRATSUME (2): 1
- 83黒井和之(1985)美原高原でキマダラルリツバメを採集 IRATSUME (8/9): 139
- 84神戸新聞社学芸部(1974)兵庫探検自然編 神戸新聞社 神戸
- 85甚田竜太郎(1953)兵庫県多紀郡岡野村蝶類目録 MDK NEWS 6(2): 5
- 86小佐々茂(1947)昆虫相解明調査報告(2) 研究報告 1(2): 3
- 87紅谷進二(1971)兵庫県植物目録 六月社 神戸
- 88加地早苗(1940)最近六甲連山の蝶類目録 昆虫世界 8(77): 17
- 89川副昭人・若林守男(1976)原色日本蝶類図鑑 保育社 大阪
- 90木下賢司他(1986)但馬地域の蝶類目録 IRATSUME (10): 55-95
- (S28: Masami Hirohata 姫路市)



兵庫県のダイコクコガネ

(兵庫県甲虫相資料. 158)

高橋 寿郎

自然, 2巻, 1~5号, 1967.

兵庫県産糞虫類研究史

概略的に兵庫県産の糞虫類の研究史を眺めて見たい。糞虫類全部(コブスジコガネ, センチコガネ科, コガネムシ科, アカマダラセンチコガネ, ダイコクコガネ, マグソコガネ亜科)をふくんだものである。

1875. Waterhouse, C. O. On the Lamellicorn Coleoptera of Japan.

Trans. Ent. Soc. London, Part.1: 71-116, pl. III.

G. Lewisの採集品に基いて発表された日本産鯰角類に関しての論文である。記録された種は1新属, 55新種, 1新変種をふくむ114種である。兵庫・神戸産の糞虫類は8新種をふくむ11種が記録されている。勿論この論文が兵庫県産糞虫に関する一番古い文献になる。同時に兵庫県産の糞虫類のほとんどの種が神戸から記録され、如何に当時の神戸市内に糞虫類が多かったかがうかがえる。8新種の内現在シノニムで消える種が1種と他種の亜種と扱われる種が1つある。その他は現在でも有効である。一応種名のみ記しておくp.73,

Caccobius brevis ヒメコエンマコガネ. p.78,
Onthophagus nitidus ツヤマルエンマコガネ. p.79,
O. ocellato-punctatus アラメエンマコガネ. p.80,
Aphodius major= *A. (Otophorus) brachysomus* Sol-sky セマルオオマグソコガネ. p.89, *A. rufangulus* = *A. (Orodalus) pusillus rufangulus* コマグソコガネ. p.91-92, *A. atratus* クロツヤマグソコガネ. p.92, *A. rugosostriatus* スジマグソコガネ. p.94-95, *Psammodyius convexus* セマルケシマグソコガネ。

1875. E. v. Harold. Verzeichniss der von Herrn T. Lenz in Japanese gesammelte Coleoptera. Abhandl. Nat. Ver. Bremen, IV: 283-296.

兵庫県下に産する糞虫類について可成り長期間にわたり調査を続けて来たがその間にも環境の変化は著しく戦前調査をしていた頃には農耕に牛・馬と言うものは欠くことの出来ないものであり筆者等の周辺にも牛・馬は大変多くいた。牧場もあれば神戸市内でも舗装されない道路を牛・馬車が往来しこれらの排泄物はいくらかでもあった。肥料にも獣糞・人糞の使用があった時代であるからこれをとりまく糞虫類に接することは大変楽であり身近な虫として考えていた。この様な状況は次第に変化して現在ではその当時が想像出来ないようになっていることは確である。従って糞虫に接することも次第に限定されて来たし困難にもなって来ている。棲息していると言うことは比較的楽に証明出来るが絶滅したとか、いなくなったと言い切ることは非常に困難である。このあたりで兵庫県下での糞虫類の分布状況をまとめておき度いと思うが、何分にも以上述べた様な状況下では可成り難しい点が多くあり大変不十分なものになったことは残念である。

一応本報では糞虫類の内ダイコクコガネ亜科(Scarabaeinae)に就いてのみまとめた。マグソコガネ亜科(Aphodiinae)に属するものに就いては稿を改めたいと思う。

センチコガネ類(Geotrupes)に就いては最近筆者がまとめているのでそれを参照して頂きたい(1979)。またアカマダラセンチコガネ亜科(Ochobaeinae)のものは兵庫県には1種しかいないのでこちらは今回の報文に含ませて頂いた。

現在の日本産のダイコクコガネ亜科は7属, 42種, 3亜種でその内本州にのみ産するのは5属, 24種である。兵庫県下には5属, 16種を産することがわかっている。

尚日本産の糞虫類に就いての同定は可成り十分な文献があるのでそれ程困難ではないと思うが特に次の文献は重要である。

中根猛彦, 塚本珪一. 日本のダイコクコガネ. あきつ, 4巻, 2号, p. 44-50 1955. 中根猛彦. 日本のこがねむし III, IV. 昆虫学評論, 1,2号, p. 23-27, 53-57, 1956. 原色昆虫大図鑑, II, 甲虫篇, 1963. 益本仁雄, 日本産コガネムシ類解説, I-V. 昆虫と

1874~1880年間商人として神戸に滞在したLenz, Tuison が神戸で採集した甲虫をHarold が研究して2篇の論文を発表しておりその第1報である。3新種の糞虫が記載されている。いずれもその学名は現在も有効である。新種は次のとおりである。p.290, *Onthophagus japonicus* ヤマトエンマコガネ, *O. lenzii* カドマルエンマコガネ, p.291, *O. viduus* マルエンマコガネ。

1876. E. v. Harold. Bericht über eine Sendung Coleopteren aus Hiogo. Abhandl. Nat. Ver. Bremen, V : 115-135.

前回の論文に続いての第2報である。この論文では1975年 Waterhouse が日本産で新種記載したコブマルエンマコガネを兵庫より記録している。

1879. Heyden, L. Die Coleopterologische Ausbeute des Prof. Dr. Rein in Japan 1874-1875. Deut. Ent. Zeit., X X III, Heft. II : 321-365.

本報文はProf. Dr. Rein Johan, J.の日本での採集品の中甲虫類のみを同定したものである。この中で兵庫県産糞虫類3種を記録しているがいずれも新種ではない。

1887. Schönfeldt, H.v. Catalog der Coleoptern von Japan mit Angabe der bezüglichen Beschreibungen und der sicher bekannten Fundorte. Jahrb. d. nass. Ver. f. Naturkunde 40 : 31-204.

Hiogo, Kobe から14種の糞虫が記録されている。勿論新種記載の種はない。

1895. Lewis, G. On the Lamellicorn Coleoptera of Japan, and Notices of others. Ann. Mag. Nat. Hist. Ser. 6, XVI : 371-408.

日本産鯉角類23新種をふくむ75種の記録があるが兵庫県産糞虫類は2種が記録されているだけである。

1897. Schönfeldt, H.v. Catalog der Coleoptera Japan. Dritter Nachtrag. Jahrb. d. nass. Ver. Nat. 50:99-144.

兵庫・神戸から7種の糞虫を記録している。

1901 大上宇一. 播磨産金亀子科. 動物学雑誌 13(156) : 321-323.

日本人によって兵庫県産糞虫類の初めての記録がこの報文である。当時はまだ十分な文献が無い時代であるから大上氏による一連の播磨産甲虫類の報告種は学名の無いものもあつたり現在使用されていない和名で書いてあつたりしてその標本が現存していない状況下判定が出来難い種もふくまれている。筆者はこの報文と同一著者が1907年に発表した播磨産金亀子虫について検討をしたことがある (MDK NEWS, Vol.25, No. 2, p.17-21, 1973)。

本報文では7種の糞虫が記録されている。ダイコクコガネの記録がある。この報文で取扱れた播磨産とあるのは著者の住所からして揖保郡を中心としたものであると考えられる。このあたりのコガネムシ相の報告はその後出ていないのでその意味からも二重に重要な報文と言えらると思う。

1907. 大上宇一. 播磨産甲虫類. 昆虫世界, 11(116) : 159-161.

糞虫類は5種が記録されている。今回の報告には一応全部学名がついている (現在では訂正しなくてはならないものが多いが—)。G. Lewisの“日本甲虫目録”(1879)の番号も各種についている。前回記録されたダイコクコガネがこの報文では入っていない。ツノコガネとダイコクコガネのこの地域での分布は余り良くわからない。

1933. 関 公一. 御影町附近産の甲虫目録 (其の一). 昆虫界, 1(3) : 251-253.

御影町即ち東部神戸市を中心に摩耶山、六甲山産をふくむ地域での甲虫目録なのである。糞虫は11種が記録されている。この中ではツノコガネが目される。たゞ惜まれるのはデータが全く無いので当時の状況をうかがい知ることが出来ないのが淋しい。

1934. 関 公一. 大阪・神戸附近の金亀子虫.
昆虫界, 2(9): 308-313.
- データが充分でないので糞虫は15種記録されているがこの内神戸産がどれどれかはっきりしない。たゞ箕面山に産するとしてある種が6種ある。現在の知見で学名の変るものもある。
1936. 戸沢信義. 紫水遺稿, 別巻.
芝川家所蔵昆虫標本目録 A,333p.
- 芝川又之助氏の採集された標本目録であるが須磨で採集された2種の糞虫の記録がある。
1937. 城崎 誠. 厳寒中にセマダラマグソコガネを採集す.
昆虫界, 5(40): 429.
- 武庫郡魚崎町の人糞の肥料から1937年1月20日 150 exs. 採集と言う記録である。もっともこの種は冬の季節に採集出来る種である。
1937. 北村達明. 兵庫県出石郡神美村で採集した蝶とコガネムシ
昆虫界, 5(43): 634-636.
- 6種の糞虫の記録あるも和名のみでありデータも無い。
1937. 北村達明. 須磨附近産金亀子科目録.
昆虫界, 5(44): 717-721.
- 10種の糞虫の記録がある。
1938. 谷口和義. 近畿地方から新たに記録さるべきマグソコガネ属5種に就いて.
博物研究, III: 5-6.
- 5種共sp. でその形態が紹介されている。2種が神戸多井畑, 武庫川産である。これだけで種名の判定は若干無理のように思われる。
1939. 高橋寿郎. 神戸産甲虫雑記.
兵庫県博物学会々誌, (18): 51-53.
- その当時舞子に産じたダイコクコガネに就いて説明をした。
1940. 高橋寿郎. 神戸再度山附近産の甲虫目録(五).
昆虫世界, 44(514): 169-172.
- 9種の糞虫類を記録した。
1941. 高橋寿郎. 神戸附近の金亀子虫に就いて.
昆虫界, 9(86): 217-241.
- 13種の糞虫を記録している。若干同定間違もある。加藤正世博士に同定してもらったユミガタエンマコガネはマルエンマコガネに変わる。
1941. 高橋寿郎. ユミガタエンマコガネ(*Onthophagus yumigatanus* Matsumura) の畸型に就いて.
虫の世界, 4(3/4): 25.
- 神戸市鶴越産1♂で紹介。当時牧場があったが現在高速道路になっている。O. viduus マルエンマコガネの間違いである。
1941. 増田 猛, 橋本直也. 一中附近の昆虫, A5,39p
- 12種の糞虫が記録されている。
1943. 高橋寿郎. 神有沿線甲虫相(六).
昆虫世界, 47(548): 102-104.
- 14種の糞虫を記録している。
1943. 高橋寿郎. 神戸産糞虫類に就いて.
昆虫界, 11(112): 301-304.
- 21種記録しているが同定の間違い、学名の訂正を要するものがある。
- 以上古い所の研究に就いては局所的な報文でも一応代表的なものは説明してきたが所謂県下全般を眺めた糞虫に関する報文と言うものは残念ながらあられなかった。終戦後になって筆者は兵庫県全般を対象とした報告を次のように発表した。
"兵庫県産糞虫類に就いて(第1報)"(兵庫生物, Vol.2, No.6, p.232-236, 1954)(24種を記録)。"兵庫県

産金亀子虫科雑記”(兵庫生物, Vol. 3, No.3, p.119-120, 1956) (5種の糞虫の記録)。“兵庫県のコガネムシ”(兵庫生物, Vol.5, No.4, p.252-259, 1967) (42種の糞虫を記録)。“兵庫県のコガネムシ訂正並びに追加”(兵庫生物, Vol.5, No.5, p.414, 1968)。

これらの報告以外県下産糞虫類全般を取扱った報告と言うものは全く見出すことは出来ない。一方部分的なファウナの中にも含まれたものは可成りある。今それらの内代表的なものを若干地名と報告者名と発表年代を記しておく(詳しい表題は拙著“兵庫県産甲虫類に関する文献目録, 改定版, 1981”を参照して頂きたい)。

淡路島(堀田, 1959, 1974, 久松, 1973, 1974, 高橋, 1976, 1979)。川西市能勢, 川辺郡猪名川町(仲田, 1970, 1978, 1982)。出石郡(高橋, 1963)。水上郡(山本, 1954, 1958, 足立, 畑中, 1955)。城崎郡(春沢, 1968)。多可郡(猪股, 1960, 西脇, 1965, 奥谷, 1976)。神崎郡(西村, 1954, 勝屋, 1971, 高橋, 1978)。相生市三濃山(高橋, 1977)。但馬地域(高橋, 1975, 1976, 1978, 1981, 谷角, 1982)。氷の山(中根, 1953, 高橋, 1966)。扇ノ山(湯浅, 1960, 1963, 辻, 岸田, 1972)。氷の山, 扇ノ山, 三室山一音水, 赤西(奥谷, 高橋, 1974)。

兵庫県産糞虫類の現在までの研究の概略を説明して見た。このあたりで県下の総括的なまとめをしておく意義はあると考えている。

尚余談ではあるが日本産の糞虫の研究を眺めて見ると2つのブームがあったように思われる。即ち第1番目のブームは松村松年博士が多くの日本産糞虫の新種をインセクタマツムラナに発表になられた(1934, 1936, 1937) ことが火付けになり多くの若い研究者が糞虫の採集, 調査, 研究を始められた。例えば饒平名智郎, 野村 鎮, 松岡勝輝, 中根猛彦の諸氏の活躍ははなばなしかった。そして終戦後になって中根博士, 野村 鎮氏が再び研究を始められたのが第2回目のブームにつながったと思われる。後藤光男, 塚本珪一, 益本仁雄氏も加わり生態方面では水田国康, 三宅義一, 谷幸三氏等の研究報告は貴重であった。そして調査の範囲が沖縄諸島, 南西諸島, 台湾に及んだ。現在の日本産の糞虫と言うものはほぼその全貌を現わしたと見ることが出来るのではないだろうか。

本亜科の日本産は1属2種2亜種が知られている。本州産はこの内1種のみであり兵庫県にも産す。

Waterhouseにより“Shimabara. One specimen from a dead dog, May; a second from Tagami, in a bottle set with meat”と記され図を入れて記載されている(Trans. Ent. Soc. London, p.95-96, pl.III, f.1, 1875)。Lewisも“Kiushu”を産地に記録された(Ann. Mag. Nat. Hist., xvi, p.385, 1895)。

加藤正世博士は原色で図説をされ(分類原色日本昆虫図鑑, 第八輯, pl.41, f.1, 1933), また詳しい図入りで紹介をされた(昆虫界, Vol.5, No.45, p.782-783, 1937。武蔵野昆虫誌, p.173-174, 1938。共に命名者名をどうしたわけかWestwoodと間違っておられる。図鑑の方は正しい)。当時この虫を採集したいものだと大いに刺戟を受けた印象深い図であった。分布は本州, 台湾となっているが恐らく本州, 四国, 九州に分布しているだろうとされ——この点原記載をよく見ておられないのかとも思われるが。春と秋に採集出来るので多分年2回の発生ではないかとのべられ, 飛翔は地上すれすれに蠅のようであるとも書いておられる。よく飛ぶ種であることは野村 鎮氏も大図鑑の中でのべられている(1963)。林 長閑博士は成虫は6月ごろから出現し, 夕方によく飛ぶ。幼虫は腐植物か腐肉を食べるものと思われると記しておられる(学研中高生図鑑, 昆虫II, 1975)。尚黒沢良彦博士は本亜科並びに2つの属Codocera, Ochodaesusに属する日本, 台湾産を主体とした5種2亜種の分類学的論文を発表しておられる(Bull. Nat. Sci. Mus. Tokyo Vol. 11, No.3, p.235-243, 1968)。

現在の分布地としては本州, 佐渡島, 四国, 九州であるがいつれの地でもそれ程多くいる種ではないようである。

兵庫県下からは猪股涼一, 岡本 清両氏の採集された3頭が知られているだけで筆者は御両者の好意で全部を見せて頂くと共に岡本氏が笠形山で採集された1♀を頂いて現在保管している。それ以後県下で採集された記録を知らない。調べなくてはいけない種である。

産地: 多可郡笠形山 [1ex., 26-IX-1965, K. Okamoto leg., in his coll.] (1♀, 27-IX-1970, K. Okamoto leg., in T. Takahashis coll.), 加美町三国岳 [1ex., 31-V-1959, R. Inomata leg. in his coll.].*

Subfamily Ochodaeinae アカマダラセンチコガネ亜科
Genus *Ochodaesus* Serville アカマダラセンチコガネ属

1. *Ochodaesus maculatus* Waterhouse, 1875

アカマダラセンチコガネ(図1, 9)

*産地の所で〔 〕の中のものには記録の引用。()の中のものには筆者標本所有のもの。

Subfamily Scarabaeinae **ダイコクコガネ亜科**Genus **Panelus** Lewis **マメダルマコガネ属****1. Panelus parvulus** (Waterhouse, 1874)**マメダルマコガネ**

(図 2, 9)

Waterhouseにより南日本(産地名なし)から *Temnoplectron parvulum* として記載された (Ent. Montl. Mag., X: 175-176, 1874), 翌年産地を "Fukuoka: Nagasaki, in cow-dung. March and April" として記録された (I. C., p. 72-73, 1875)。

1895年に G. Lewis はこの *T. parvulum* をタイプとして新属 *Panelus* 属を創設 *Panelus parvulus* とされた (Ann. Mag. Nat. Hist., 6, xvi, p. 375-376, fig. 1, 2, 1895), 図を入れて記載されると共に産地に就いては "Nagasaki and its neighbourhood. Occurs under dead leaves in the early days of April, and its not uncommon" と報じておられる。

1956年には中根猛彦, 塚本珪一両氏による詳しい解説が発表され (Entom. Rev. Japan, 7巻, 1号, p. 24-25), 中根博士は原色で図説された(原色昆虫大図鑑, II, 甲虫篇, 1963)。

大変小さい種であり(体長 2.5~3mm), 主として森林中の落葉下や朽木樹皮下から採集されるので一般には目につく機会が大変少いので従来から県下からの記録はほとんど無かった。

最近神戸市内でもピットホールトラップで結構採集出来ることがわかった。恐らく市内の雑木林あたりには多くいることであろうし県下全般にも広く分布しているように考えられる。

分布は本州, 御蔵島, 冠島, 四国, 九州, 台湾である。

産地: 三原郡諭鶴羽山〔久松, 1973〕, 川西市笹部〔仲田, 1979〕, 神戸市須磨・妙法寺 (2cxs., 11-XI-1978, 6exs., VIII-1979), 加東郡東条町森 (2exs., 7-VI-1984)。

○ *Gymnopleurus (Paragymnopleurus) stipes japonicus* Balthasar, 1955 に就いて。

Tribus *Scarabaeini*, Genus *Gymnopleurus* Illig に属する上記学名の亜種が Balthasar 博士によって兵庫県の武庫川産で記載されている (Mitt.-Münch. Ent. Ges. 44-45: 395, 1955, Japan, Mukogawa Landbezirk Hyogo-ken), そして同博士の大著 Monog. Scarab. u. Aphod. (1): 217, 1963 にも収録されている。原亜種は Philippinen 産である。このグループの糞虫は日本

では今迄に1種も分布していることがわかっていないものである。詳しい採集データもついていないし, 採集者もわからない。またその後の記録も全く無い。どの様なものかわからないので一応現在の日本のコガネムシの仲間からは省いておいた方が良いと考えるし, 兵庫県のコガネムシとしても保留種としておく。

Genus **Copris** Geoffroy **ダイコクコガネ属****2. Copris acutides** Motschulsky, 1860**ゴホンダイコクコガネ** (図 4, 10)

Motschulskyにより Japan より記載された種である (Etud. Ent. tome, 9, p. 13, 1860)。

Waterhouse は "Hiogo, Osaka; usually abundant in Sandy places where it occurs" として記録しておられる (I. C., p. 75, 1875)。Lewis も "Abundant in all the islands in sandy places" と記録された (I. C., p. 377, 1895)。

比較的学名にも問題も無く現在に至っている。たゞ Balthasar 博士が日本から記載された2種即ち *C. frankenbergeri* (Entom. Blätter, xxx, 1934, p. 146), *C. mulleri* (Folia Entom. ii, 1939, p. 42) は共に本種のシノニムであろうとのこと(中根, 1955)。後, 命名者 Balthasar 博士自身の著書でもそのように扱っておられる (I. C., 1963, p. 356-357, Tf. xxii, fig. 1)。

本種の幼虫は林 長閑博士が "ダイコクコガネ属の幼虫" として図説しておられる (日本幼虫図鑑, p. 538, f. 1017, 1959)。その生活史に就いては水田国康, 三宅義一氏の "ゴホンダイコクの飼育。(北九州の昆虫, 5巻, 2号, p. 23-29, pl., 1958) の中に詳しくまた水田国康氏は講談社版, 日本昆虫記 IV (1959) の中で "クソムシの巢" p. 147-181 と題する糞虫類の生活史の中の大部分を占める報文としてまとめられている(この報文は同社版全集日本動物誌, 第28巻, 1984の中にもふくまれている)。

兵庫県下には広く分布している種である。最近では採集出来る場所が仲々見つけにくくなっている。特に都市周辺では採集が困難でありどの様な生活をしているのかわかりにくい(かつての神戸市内にはいたようであるが)。多可郡, 美方郡下では結構多くいる種である。

産地: 津名郡岩屋 (1♂, 1♀, 24-V-1942)。洲本市中津川, 相川, 由良日の出〔登日, 1983〕。三原郡諭鶴羽山〔堀田, 1974〕。Hiogo〔Waterhouse, 1875〕。神崎郡大山村 (2♂♂, 3♀♀, 23-IX-1952, 9♂♂, 10♀♀, 4-IX-1955)〔西村, 1954〕。大河内町川上 (1♂, 17-IX-1977)。多可郡三谷 (12♂♂, 7♀♀, 15-IX-1944, 1♂, 2-VIII-1975, 16♂♂, 10♀♀, 26-

VII-1975, 19♂♂, 11♀♀, 13-IX-1975, 16♂♂, 3♀♀, 4-IX-1976), 三国岳 (1♂, 1♀, 22-VIII-1955, K. Okamoto leg.). 氷上郡神楽(山本, 1958) [1♂, 13-VIII-1950, Y. Yamamoto leg.), 葛野(足立, 畑中, 1955)。出石郡出石町福見(高橋, 1963, 1981)。美方郡扇ノ山(湯浅, 1964., 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1981), 村岡町耀山, 美方高原〔谷角, 1982〕。

3. *Copris ochus* (Motschulsky, 1860) *ダイコクコガネ* (図4, 10)

MotschulskyによりJapanより*Cantharsius ochus*として記載された (I.C., p.13, 1860)。

Waterhouseは“Simabara and Hiogo, and other sandy districts in Kiushiu and Nipon. Very abundant”として記録された (*Copris*属) (I.C., p.74, 1875)。

Heydenは*Cantharsius*属で“*Insel Kiushiu*”より1♂を記録 (Deut. Ent. Zeit., XXIII, p.339, 1879)。

Lewisは1879年に「日本の甲虫目録」を発行されその中で本種を*Cantharsius*属で収録されたのを1893年の報文で*Copris*属に変えておられる (Ento. 26:150)。そして1895年には*Copris*と*Cantharsius*属の違いを述べた上で*Copris*の種として“Simabara, Kobe, Nikko and Hakodate. Abundant on sandy areas”を記録された (I. C., p.377)。

ReitterのBest. - Tab. (24), 1892, p.216には“Suifun, Mongolei, China, Japan”が産地に挙げられている。新島, 木下両博士は満州産を図説された (Rep. First. Sci. Exp. Manchu., XI, 55, p.8-9, pl. 1, f.4, 1937)。

比較的一般に良く知られた種でありほとんどの図鑑類に図説されている種で分布も可成り広く北海道、本州、佐渡島、三宅島、奄岐、九州に産するが四国での記録が無いようである。国外では朝鮮、済州島、満州、北支、蒙古となっている。

兵庫県下の記録は古くからあり、戦前は神戸市内並びに周辺でも稀に採集出来たが戦後の開発でさっぱり姿を消してしまった。

恐らく県の中央部から北には分布していると考えられるが本種も採集地点の発見が難しいのでその分布状況とか生態状況がつかめない現状である。生活史に就いては同属のゴホンダイコクと似ていると推察される。

尚生野よりミヤマダイコクコガネ *Copris pecuari* Lewis (2exs., 26-VIII-1971, 井上, 1972) の記録がある。標本が見られないので何んとも言えないがダイコクコガネとの区別は必ずしも容易でないのでは本種のこともわからない。一応本報文では保留しておいた。

産地：兵庫〔Waterhouse, 1875〕。神戸〔Lewis,

1895〕, 舞子 (1♂, VIII-1938, Furukawa leg.). 神崎郡大山村 (4♂♂, 2♀♀, 23-IX-1952, 17♂♂, 14♀♀, 4-IX-1955) (畑中, 1954), 神崎町〔石飛, 1971〕。多可郡三谷 (1♂, 1♀, 15-IX-1974, 1♀, 29-IX-1974, 3♂♂, 2-VIII-1975, 7♂♂, 8♀♀, 26-VIII-1975, 2♂♂, 3♀♀, 13-IX-1975, 6♂♂, 3♀♀, 4-IX-1976), 三国岳 (1♂, 1♀, 22-VII-1959, K. Okamoto leg.). 揖保郡〔大上, 1901〕。氷上郡神楽, 久下〔山本, 1958〕, 遠阪, 葛野〔足立, 畑中, 1955〕。出石郡正法寺〔高橋, 1963, 1981〕。養父郡鉢伏山麓高原〔T. Yamaguchi leg., 1973〕, 鉢伏山〔高橋, 1981〕, 関宮町葛畑〔谷角, 1982〕。

Genus *Caccobius* Thomson *コエンマコガネ*属 4. *Caccobius brevis* Waterhouse, 1875

ヒメコエンマコガネ (図, 11)

Waterhouseにより“Hiogo: Osaka. In sandy places.”として記載された (I.C., p.73, 1875)。

中根猛彦, 塚本圭一両氏の図説 (1956), 中根博士の図説 (1963)がある。分布は本州, 九州, 対馬が知られている。

兵庫県下での記録は余りない。現在の県下での分布状況がよくわからない種である。

産地：川辺郡猪名川町民田〔仲田, 1978〕。兵庫〔Waterhouse, 1875〕。美方郡扇ノ山〔湯浅, 1963, 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1981〕。

5. *Caccobius jessoensis* Harold, 1867

マヘカドコエンマコガネ
(図, 11)

Haroldにより“Japan”を産地に記載された (Coleop. Heft, ii, p.100, 1867)。WaterhouseはHakodateから記録 (I. C., p.73, 1875)。

HaroldがTokio産で記載した*C. microcephalus*は本種のシノニムである (Deut. Ent. Zeit., xxi. 2:349, 1877)。

また松村博士の記載された次の種が全部本種のシノニムである。

C. koichi (Ins. Mats., 9巻, ½号, p.67, 1934), *C. sapporoensis* (I.C., 11巻, ½号, p. 64, 1936), *C. yubariensis* (I.c., p.65, 1936), *C. amagisanus* (I.c., 11巻, 3号, p.121, 1937), *C. hirayamai* (I.c., 11巻, ½号, p.62, 1936)。

分布としては北海道, 本州, 佐渡島, 四国, 九州で山地の日なたの牛・馬・羊糞に集り、人糞でも採集されると。

兵庫県下での産出状況は余りよくわからないが北部

山岳地帯に広くいる種ではないかと思われる。淡路島での産は注目されるべきではないだろうか。

産地：三原郡諭鶴羽山〔堀田，1974〕。神崎郡大山村〔西村，1974〕。多可郡三国岳〔lex., 13-VI-1950 K. Okamoto leg.〕。水上郡神楽村〔lex., 9-VIII-1950, Y. Yamamoto leg.〕〔山本，1958〕。豊岡市妙楽寺〔高橋，1975 1981〕。美方町扇ノ山〔湯浅，1960，辻，岸田，1972，高橋，1981，谷角，1982〕。美方町熱田，美方田〔谷角，1982〕。

6. *Caccobius unicornis* (Fabricius, 1798)

チビコエンマコガネ

(図, 3, 12)

Fabriciusにより *Copris* 属で記載された種 (Tranguebar in the Copenhagen Museum, Ent.Syst. Suppl. 1798, p.33) であるが1801年には *C. unicornis* として記載されている (Syst. Eleut. i, 1801, p.52)。W. Junk Coleop. Pars. 90, p.149, 1927では産地はIndienだけである。Arrowは *Caccobius* 属で図入りで記載されている (Fauna British India, Coleop. Lamell. III, p.145, f.9, 1931)。この時点では日本の分布は入っていない。尚その時 *Onthophagus unicornis* Boucomont, 1914, *O. nitidiceps* Fairm. 1893も共にシノニムとされて分布はCeylon, Assam, E. Bengal, Tonkin, China, Java, Borneo, Philippine Is. Malay Pens. となっている。

Boucomontが発表した Faune l'Empire Fran. III, Colop. Scarab. l'Indochine に図入りで説明しているが分布には日本が入っていない (p.83-84, fig.53, 1945)。

日本からの記録は中根博士が“本邦産ダイコココガネ群の種名の検討”の中で松村松年博士が九州，台湾産で記載された *C. yamauchii* (Ins. Mats., 11巻, 1/2号, 1936) が実はこの *unicornis* のシノニムで日本では未記録の種として和名もチビコエンマコガネと名付けられたものによる (動物学雑誌, 57巻, 4号, p.56, 1947)。

本州からの記録は中根，塚本両氏の解説の中に於いてあり (昆虫学評論, 7巻, 1号, 1956)，同じく後藤氏が南大阪における産地を詳しく報告されたのによる (l. c.)。その後加治木氏も大阪の北部から記録され (l. c., 7巻, 2号, 1956)，筆者も神戸市から記録した (l. c., 18巻, 2号, 1966)。

Balthasar博士の Monog. Scarab. u Aphod. 2, 1963にも日本の分布は *C. yamauchii* の産を掲げられているだけであった。

分布は始めに記した様に広いが日本では九州以外本州では神戸・大阪・生駒山付近が北限であろうとのことである (益本, 1967)。

♂には頭部に1本のツノがあり uni-cornis の名がつ

けられている。♀では横の隆起が2本ある。犬糞を特に好み、人・馬糞さらに鶏糞にも来るようである。南方系の種と言える。特に盛夏の7-9月が割合多く見られる。たゞし現在兵庫県下でも神戸市、明石市の南側海岸線ぞいだけにしか見られないがどのあたりまで分布しているのかも少々詳しく調べて見ないとわからない。とにかく神戸市内では大変多く見られる。

原色による図説が後藤氏 (1955)，中根博士 (1963) とある。

産地：神戸市摩耶山 (1♀, 20-V-1964)，夢野大師参道 (2♂♂, 1♀, 24-VII-1966)，鳥原 (1♂, 4-IX-1966, 3♂♂, 17-VIII-1969, 3♂♂, 2♀♀, 23-V-1971, 1♂, 1♀, 8-VIII-1976, 1♀, 14-IX-1983, 3♂♂, 9♀♀, 23-V-1983, 2♂♂, 1♀, 25-V-1983)。明石市明石公園 (1♀, 3-VII-1976)。

7. *Onthophagus ater* Waterhouse, 1875

クロマルエンマコガネ (図, 5, 12)

Waterhouseにより“Nipon and Kiushiu. Abundant everywhere”として記載された種である (I.C., p.76, 1875)。

普通に産する種で獣・人糞を食べるほか腐肉にも来る。出現期は3-12月と可成り長い。場合によっては2月にも見られる。幼虫に就いては山下・小島・三宅氏等の詳しい報文がある (げんせい No.35, 1978, No.38, 1980)。

分布としては北海道，本州，佐渡，八丈島，四国，九州，台湾，朝鮮，支那，東シベリヤと大変広い。

松村博士の命名された *O. chuzenjanus*, *O. kawarianus* (Ins. Mats., 11巻, 4号, 1937)。Balthasar博士の命名された *O. cernyi* (Folia Zool. et Hydrobiol. 8, 2: 312, 1935) のいずれも本種のシノニムである。

兵庫県下にも広く産する種である。

産地：津名郡岩屋 (1♂, 26-IV-1959)。川辺郡猪名川町杉生新田〔仲田，1982〕。川西市笹部〔仲田，1978, 1982〕，西畦部能勢川々原〔仲田，1982〕。神戸市御影〔関，1933〕，六甲山 (2♂♂, 1♀, 8-V-1955, 1♂, 2♀♀, 21-VIII-1958, 1♂, 2♀♀, 20-VIII-1961)，摩耶山〔増田，橋本，1941〕，保久良山 (2exs., 1-V-1975)，教育植物園 (1♀, 9-VII-1961)，鳥原 (1♂, 5-IV-1938, 4♂♂, 23-III-1939, 3♂♂, 2♀♀, 24-III-1939, 1♂, 24-VII-1939, 1♂, 15-II-1952, 1ex., 2-VII-1972, 1ex., 23-VII-1972, 1ex., 6-VII-1972, 1♀, 5-V-1974, 1♂, 25-VI-1982)，鈴蘭台 (1♂, 22-X-1939)，山の街 (1♂, 3-V-1950, 1♂, 15-VI-1951)，丹生山 (9♂♂, 12♀♀, 5-V-1956, 3♂♂, 1♀, 10-V-1959)，

金剛童子山 (1♀, 24-VI-1956), 有馬 (1♂, 21-VIII-1958), 妙法寺 (lex., 9-X-1978)。多可郡鳥羽 (lex., 29-IV-1972, lex., 19-VII-1975), 三谷 (lex., 13-IX-1975)。神崎郡大山村〔西村, 1954〕, 大河内町川上 (3♂♂, 2♀♀, 14-V-1977, 2♂♂, 2♀♀, 21-V-1977, 1♀, 3-IX-1977)。揖保郡〔大上, 1901〕, 鷓鴣山 (2♂♂, 1♀, 27-V-1970)。宍粟郡音水 (3♂♂, 2♀♀, 31-V-1970)。水上郡〔山本, 1958〕, 神楽〔山本, 1958〕, 春日部村, 柏原村, 黒井町、生郷村、新井村、芦田村〔足立, 畑中, 1955〕。出石郡神美村〔北村, 1957〕。城崎郡城崎 (lex., 7-V-1970), 香住町山田溪谷〔谷角 1982〕。養父郡氷の山 (5♀♀, 21-VII-1958)。美方郡美方町久須部〔谷角, 1982〕, 蘇武岳〔村上, 1958〕, 鉢高原〔高橋, 1975, 1981〕, 扇ノ山〔湯浅, 1960, 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1981〕。

8. *Onthophagus atripennis* Waterhouse, 1875

コブマルエンマコガネ (図, 6, 13)

本種も Waterhouse により "Kiushiu and Nipon; in woods and shady places under trees" として記載されている (I.C., p.77, 1875)。

Harold は Hiogo から記録された (Abhandl. Ver. Bremen, V:124, 1876), Heyden も Hiogo から記録されている (Deut. Ent. Zeit., xxiii, Heft. II : 339, 1879)。

本種も普通に見られる種で糞とか腐肉にやってくる。松村博士が記載された *O. akirai*, *O. ibonus*, *O. kogatanus*, *O. shigeoi* (Ins. Mats., 11巻, 4号, 1937) は共に本種のシノニムである。上翅基部及翅端前に黄赤紋を具える個体を *abb. apicetinctus* D' Orbigny, *rubrotinctus* D' Orbigny, 1898 と言われているが兵庫県下ではそのような個体には出会っていない。また石垣島にはや・小型で前胸背のクボミが前によった *subsp. yaeyamanus* Nomura, 1964 を産する。

分布は本州, 佐渡, 四国, 九州, 対馬, 朝鮮, 満州と可成り広く産する。

兵庫県下では個体数の多い種である。

幼虫の形態に就いては山下, 小島, 三宅氏等の報告がある (I.C., p.4, 1978)。

産地: 津名郡岩屋 (1♂, 26-IV-1959)。洲本市三熊山〔久松, 1973, H. Hirochi etc. 1977〕。川辺郡猪名川町上阿古谷〔仲田, 1978〕。川西市笹部〔仲田, 1982〕。Hiogo〔Heyden, 1879〕。神戸市御影〔関, 1933〕, 摩耶山〔増田, 橋本, 1941〕。鳥原 (2♂♂, 1-IX-1937, 2♀♀, 27-VII-1951, 1♂, 2♀♀, 4-VII-1971, 1♂, 1♀, 22-VIII-1971, 1♂, 2-VIII-1972, 1♂, 6-VIII-1973, 1♀, 27-VII-1973, 3♂♂, 2♀♀, 10-VIII-1974, 4♂♂, 2♀♀, 10-VII-1976,

3♂♂, 2♀♀, 14-VII-1976, 3♀♀, 2-IX-1980, 2♂♂, 3♀♀, 4-IX-1980, 4♂♂, 1♀, 16-VII-1981, 2♀♀, 9-VI-1982, 1♂, 24-VI-1982, 1♀, 9-VIII-1982, 1♂, 30-VIII-1982, 1♀, 23-V-1983), 鈴蘭台 (1♀, 22-XI-1939), 山の街 (1♀, 23-X-1954), 有馬 (2♂♂, 5♀♀, 21-VIII-1958), 多井畑 (1♂, 1♀, 2-VII-1941), 板宿, 妙法寺〔北村, 1937〕, 藍那 (7♂♂, 9♀♀, 30-VIII-1978), 下谷上 (2♂♂, 1♀, 17-IX-1979), 芦谷溪谷 (3♂♂, 4♀♀, 11-VI-1982), 押部谷木見 (1♂, 5-X-1980), 須磨〔戸沢, 1936〕, 妙法寺 (1♀, 23-IV-1979, 2♂♂, 25-VII-1979, 1♂, 1♀, 30-VIII-1979)。明石公園 (4♀♀, 3-VII-1976)。飾磨郡雪彦山 (1♂, 1♀, 14-VII-1957), 家島〔上田, 1981〕。姫路市白浜ノ宮 (2♂♂, 1♀, 20-IX-1979)。多可郡白山 (1♂, 2♀♀, 27-V-1973), 神崎郡大山村〔西村, 1954〕, 大河内町砥ノ峯 (4exs., 23-VII-1977, 1♂, 22-X-1977)。揖保郡〔大上, 1901, 1907〕。赤穂郡上郡 (1♂, 20-XII-1975)。宍粟郡音水 (1♂, 1♀, 11-VI-1972)。水上郡〔山本, 1958〕, 黒井 (2♂♂, 28-VIII-1950, Y. Yamamoto leg.)。出石郡神美村〔北村, 1937〕。城崎郡神鍋山〔原, 1938〕, 出石町魚屋〔高橋, 1963, 1981〕。豊岡市山王町〔高橋, 1976, 1981〕。養父郡氷の山 (1♂, 1♀, 21-VII-1958)。美浜郡浜坂諸寄〔高橋, 1976, 1981〕, 美方高原, 村岡町耀山〔谷角, 1982〕, 扇ノ山〔湯浅, 1960, 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1981〕。

9. *Onthophagus fodiens* Waterhouse, 1875

フトカドエンマコガネ (図, 13)

本種も Waterhouse により "Onaura. Rare" として記載された種である (I.C., p.75-76, 1875)。

本種はクロマルエンマコガネ *O. ater* と大変良く似ていることから同定がはっきりしなかったのか記録が割合と少い種である。

関東地方では少いようであるが中部とか近畿にかけては普通にいる種である。クロマルエンマコガネとは慣れ・ばそれ程区別がむづかしくはなく、また最近では多くの図説があるのでそれ程同定に苦労はないと考えられる。松村博士によって命名された *O. hikusanus*, *O. shurianus*, *O. ushiodai*, *O. yugianus*, *O. sobosanus*, (Ins. Mats., 11巻, 4号, 1937) は総て本種のシノニムである。分布としては本州, 佐渡島, 四国, 九州, 濟州島, 朝鮮, 満洲, 支那である。

兵庫県下にもクロマルエンマコガネより個体数は少いようだが広く分布しているようである。幼虫に就いては山下, 小島, 三宅氏の報文がある (1980)。

産地: 川西市一の鳥居 (1♂, 22-VI-1952), 笹部〔仲田, 1982〕。神戸市鳥原 (1♀, 10-VI-1956), 山の街 (2♂♂, 30-IV-1950, 1♂, 17-V-1953, 1♂, 16-V-1954), 丹

生山(1♂, 5-V-1956)。神崎郡大山村〔西村, 1954〕。多可郡三谷(1♂, 1♀, 15-IX-1974, 1♂, 2♀♀, 29-IX-1974)。相生市三濃山(1♂, 6-V-1973)。水上郡〔山本, 1958〕。出石郡出石町相野〔高橋, 1963, 1981〕。豊岡市妙楽寺〔谷角, 1982〕。養父郡関町葛畑〔谷角, 1982〕。美方郡蘇武岳〔村上, 1959〕, 村岡町耀山〔谷角, 1982〕, 扇ノ山〔湯浅, 1960, 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1981〕。

10. *Onthophagus japonicus* Harold, 1874

ヤマトエンマコガネ

HaroldによりLenz, Tuisonの採集品で記載された種である。産地をはっきりと書いてないがLenzは1874~1880年の間神戸に在留しその間甲虫類を採集した人であるから当然この産地は神戸と言うことになる(Abhandl. Nat. Ver. Bremen, iv, 1874, p. 290)。その翌年Waterhouseは“Hiogo and Osaka. At the foot of Maiyasan it has occurred in great plenty”として本種を記録している(I.C., p.76-77, 1875)。

Waterhouseの記録はG. Lewisの採集品によるわけで兵庫にしろ大阪にしろ多くいると言う記録は注目しなくてはならない。両地共この記録以外現在に至るまでほとんど採集されていないと考えられる。本種が分布しているのは本州では奈良の春日山と佐渡島が知られていた。奈良の春日山では戦前可成りたくさんいた様である(故米谷正司氏が採集された本種の標本を頂いて現在も保管している)。戦後、後藤光男, 土井仲治郎両氏のまとめられた“奈良県の糞虫”(大和の昆虫, No.3/4, p.36-47, 1966)の中でも“奈良公園, 春日山, 高円山等比較的広く分布する”とされ当時はまだいたように思われるが最近是非常に少なくなったことは古くから奈良の糞虫に詳しい河野伊三郎氏も述べられていたが後藤光男氏も最近手紙でやはり可成り少なくなっていることを御教示下さった(減少の理由はよくわからない)。佐渡島での産出状況に就いては全く知らない。石田正明氏は秋田県の本種に就いて大変興味のある報告をしておられる(昆虫と自然, 3巻, 11号, p.4, 1968, 4巻, 9号, p.16, 1969)。1978年実施された環境庁の第2回自然環境保全基礎調査昆虫類の中で岩手県でや、いると言う報告が出ていた。大体以上が筆者が知り得た本種の日本での産地である。

分布は国外で朝鮮、支那が知られている。ところで神戸市での本種であるが摩耶山麓に多産したと言う記録は大変うれいしのだがはたしていたのかどうか大変疑わしく少くとも記録が間違いないとすれば戦前のある時期追加記録が出ていても不思議ではなく全く無いこ

とは残念ながらどうも産地を間違っていたのではないかと言う気がしていた。ところが最近神戸の英字新聞ジャパニクロニクル社が大正7年(1918)に“Jubilee Number 1868-1918”を編集・発行したのを訳したものを“のじぎく文庫”で“神戸外国人居留地”と題して出版された(1980)。その中で兵庫開港(1968年)当時の神戸の様子が説明してあるが摩耶山と神戸(現在の生田神社付近)の間には非常にたくさんの野生の鹿がいたと(摩耶山上にも)。また摩耶山には野猿も多くいたとある。こうなってくると奈良での本種が鹿の糞に多くやってくることから摩耶山麓に多産したと言う記録は事実なのかもしれない。現在の状況からは神戸市内での糞虫類の採集は大変困難になって来ているが日本鹿は県の中央部あたりではまだ割合いることだし(1982年神戸市内の烏原貯水池畔で鹿が出没して新聞ダネになった。筆者も目撃したがどうも之は飼育されたものが逃れていたもの、ようである。また1983年2月26日神戸新聞紙上では但馬, 丹波, 播州でニホンジカによる林業被害が著しいのでその対策をたてるため59年度から3ヶ年計画で猟友会の援助を受けて前記3地域の生息調査を行うことが大きく報じられている。同時に毎年県下で狩猟により約2700頭のおスジカが捕獲されている。シカの肉も売っているし、シカ肉のサシミも結構おいしい)。またこのヤマトエンマコガネ石田氏によると馬糞にも来ているようだし、三宅義一氏によると人糞にもくるようで(昆虫と自然, 5巻, 1号, p.9-15, 1970), そういった意味合からすれば県下の何処かで棲息している可能性もあるわけで大変興味のある種と言える。

産地: 神戸〔Harold, 1874〕, 摩耶山麓〔Waterhouse, 1875〕。

11. *Onthophagus lenzi* Harold, 1874

カドマルエンマコガネ (図, 7, 14)

Haroldが記載した種である。種名にあるLenz, Tuisonが採集した甲虫類を研究して発表した論文の中において、ありLenzは神戸に在留して採集をした人であるからはっきりと基本産地の明記は無いが神戸での採集品であることは間違いない(Abhandl. Nat. Ver. Bremen, IV: 290, 1874)。Waterhouseは翌年“Nippon, Yesso. Abundant”と記録している(I.C., p.75, 1875)。

本種の幼虫の図説とか生態に就いての報告は多くある(芳賀昭治, 新昆虫, 6巻, 2号, p.15-18, 1953。水田国康, あきつ, 7巻, 1号, p.9-12, 1958。林長閑, 1959)。

分布は広く北海道から九州まで対馬, トカラ中之島

あたりまでに産し台湾、朝鮮、満洲、支那に及ぶ。

兵庫県下でも広く普通に産する種である。

産地：津名郡岩屋(1♂, 26-IV-1959), 津名町大町〔堀田, 1974〕。洲本市〔堀田, 1959〕, 安乎町〔堀田, 1974〕, 山武牧場〔堀田, 1979〕。川西市大和, 見野〔仲田 1978, 1982〕。Hiogo〔Harold, 1874〕。神戸市御影〔関, 1933〕, 摩耶山〔増田, 橋本, 1941〕, 烏原(1♀, 1-IX-1937, 3♂♂, 4-VI-1938, 1♀, 9-VII-1939, 2♂♂, 1♀, 26-VII-1938), 板宿, 妙法寺, 多井畑〔北村, 1937〕, 広野(1ex., 25-VII-1955, 5♂♂, 7♀♀, 25-IX-1955), 押部谷町木見(1♂, 16-VII-1980, 1♂, 5-X-1980)。加古川市加古川町原(5exs., 1-VI-1954)。加西市畑(1♂, 13-VII-1974)。加東郡社町(1♂, 8-X-1972)。神崎郡大山村(7♂♂, 1♀, 23-IX-1952)〔西村, 1954, 高橋, 1981〕。多可郡三谷(11♂♂, 4♀♀, 15-IX-1974, 2♂♂, 19-IV-1975, 4♂♂, 4♀♀, 3-V-1975, 14♂♂, 1♀, 13-IX-1975)。佐用郡上月(1♀, 3-V-1952), 大撫山(3♂♂, 1♀, 15-IX-1971)。氷上郡〔山本, 1952, 1958〕, 春日部村, 黒井町, 生郷村, 新井町, 芦田町, 神楽村〔足立, 畑中, 1955〕。出石郡神美村〔北村, 1937〕, 出石町宮内〔高橋, 1963, 1981〕。豊岡市内寿〔高橋, 1975, 1981〕。養父郡氷の山(4♀♀, 27-VI-1956, 3♂♂, 6♀♀, 21-V-1958)〔高橋, 1959〕, 関宮町葛畑〔谷角, 1982〕。美方郡湯村(4♂♂, 1♀, 22-VII-1952)〔高橋, 1981〕, 村岡町耀山, 美方高原〔谷角, 1982〕, 扇ノ山〔湯浅, 1960, 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1981〕。

12. *Onthophagus nitidus* Waterhouse, 1875

ツヤマルエンマコガネ (図, 14)

Waterhouseにより "Hiogo and Nagasaki. In carriage and in bottles set with meat" として記載された種である (G. Lewis leg., I. C., p.78-79, 1875)。

黒色で光沢ある種で原記載にもあるように腐肉に由来する性質をもっているため腐肉トラップを装置すると採集し易い。分布は広く本州、佐渡島、伊豆諸島、四国、九州、隠岐島、奄岐に産し、屋久島には *subsp. yakushimanus* Nomura, 1976 を産する。兵庫県下にも個体数はそれ程多くないが広く分布している種と考えられる。

産地：川辺郡猪名川町内馬場〔仲田, 1982〕。川西市笹部〔仲田, 1982〕, 一庫〔柴内, 1950〕。Hiogo〔Waterhouse, 1875〕。神戸市六甲山〔柴内, 1950〕, 摩耶山〔増田, 橋本, 1941〕, 烏原(1ex., 4-XI-1974, 1♀, 27-VI-1976, 4exs., 8-VIII-1976, 1ex., 13-VI-1980, 1ex., 9-VIII-1980, 1♀, 29-VI-1981), 有馬(1ex., 21-VIII-1978)。明石市明石公園(1ex., 12-VIII-1978)。多可郡加美町三谷(1ex., 29

-IX-1974, 1ex., 13-VII-1974)。神崎郡大河内町川上(1ex., 14-V-1977, 4exs., 21-V-1977)。佐用郡大撫山(1ex., 15-IX-1971)。宍粟郡音水(1ex., 20-VI-1959), 三室山〔野村, 1976〕。氷上郡〔山本, 1958〕, 黒井(1♂, 28-VIII-1950, Y. Yamamoto leg.)。城崎郡神鍋山〔原, 1938〕。養父郡氷の山(3exs., 21-VIII-1958)〔奥谷, 1953, 野村, 1976, 高橋, 1981〕。

13. *Onthophagus ocellatopunctatus* Waterhouse, 1875 アラメ エンマコガネ

Waterhouseにより "Hiogo. Sea beach." を産地に記載された種である(1875)。Lewisも "Hiogo in August 1871, and on the sandhills at Hakodate" と記録している。それ以外に兵庫県下での記録は残念ながら無い。瀬戸内側の海岸線が全く海浜と言う状況の所が皆無となってしまった現在はたして本種がいるのだろうか? いるとすれば戦前まだ海浜の残っていた状況下での上記記録以外の記録があってもと考えられるが——。

淡路島とか県の日本海側の海浜あたりを探せばあるいはと言う期待はあるがどうも良くわからない種である。

分布は本州、北海道となっている。本州の東北地方の海岸の牛糞に由来すると言う記録がある。全国的に海岸線の破壊は著しく、また牛・馬の特定の場所にしかいない状況下でこの種がどの様に分布しているのか大変興味があると思う。

産地：Hiogo〔Waterhouse, 1875, Lewis, 1895〕

14. *Onthophagus ohbayashi* Nomura, 1939

ナガスネエンマコガネ

野村 鎮氏が大林一夫氏採集の広島県尾道産1♂2♀♀を図入りで記載された種である (Nippon no Kōchu, 3巻, 1号, p.35-37, 1939)。

♂の前脛節が長く発達していることが和名の由来である。分布は本州と中支になっている。奈良では鹿の糞の中に普通に見られると言われていて、人糞にもくと記録されている〔後藤, 土井, 1966, 三宅, 1970〕。

兵庫県下では記録が大変少いが調査が不十分の種のようなのである。図説は原記載以外後藤氏(1955), 中根博士(1963)のものがある。

産地：川西市一庫〔仲田, 1978, 1982〕。氷上郡〔山本, 1958〕, 神楽村〔山本, 1952〕, 柏原(1♂, 25-VIII-1954, Y. Yamamoto leg.)。

15. *Onthophagus viduus* Harold, 1874

マルエンマコガネ (図, 15)

Haroldにより T. Lenz 採集によるもので記載された種であるから当然 Kobe 産であると考えられる (I. C., p. 291, 1874)。

Waterhouse は "Kiushiu and Nippon Generally distributed in open places, heaths, & C." と記録されている (1875)。

本種は松村博士によって命名された *Caccobius* 属 2 種, *Onthophagus* 属 17 種の多くの種が本種のシノニムとなっている。一々ここに種名を挙げることは省略させて頂いた。

上翅に赤褐色の紋の出る個体が見つかりそれらに次のような名をつけられている。

ab. rubromaculatus Kolbe, 1686. 上翅基部と翅端近くに紋が出る。

ab. flavonotatus d'Orbigny, 1898. 尾節板と腹節側縁に紋がある。

分布は大変広い。日本全土ならびに朝鮮, 満洲, 支那に及ぶ。コブマルエンマコガネ *O. atripennis* に良く似ているし, 個体数も兵庫県下では本種の方が少ない。

本種の卵。幼虫の図説は芳賀昭治氏のものがある (新昆虫, 6巻, 2号, p. 15-18, 1953)。

産地: 津名郡岩屋 (1♂, 1♀, 26-IV-1959)。川辺郡猪名川町民田 (仲田, 1978, 1982)。神戸市 (柴内, 1950), 六甲山 (1♀, 29-IV-1956, Tsukaguchi leg.), 鳥原 (1♂, 1-IX-1937, 1♂, 26-VI-1938, 1♂, 24-VII-1939, 9♂♂, 7♀♀, 26-VII-1958, 6♂♂, 1♀, 27-VII-1951, 1♂, 23-VIII-1952), 鈴蘭台 (2♂♂, 1♀, 22-X-1939), 金剛童子山 (1♀, 24-VI-1958), 多井畑 (3♂♂, 1♀, 22-VII-1941), 藍那 (1♂, 1♀, 27-IX-1978)。飾磨郡家島 (1♀, 26-V-1978)。宍粟郡赤西 (1♀, 9-IX-1978)。氷上郡 (山本, 1958)。出石郡出石町福見 (高橋, 1963, 1981)。豊岡市九日市 (高橋, 1975, 1981)。

Genus *Liatongus* Reitter ツノコガネ属**16. *Liatongus phanaeoides* (Westwood, 1840)**

ツノコガネ (図, 8, 15)

Westwood により *Onthophagus* 属でドイツ産の標本で (in Musie d' Oxford) 記載された種である (Royle's Himalaya, 1840, Entomology, p. 55, pl. 9, fig. 3)。この種をタイプに Reitter は *Liatongus* 属を創設した (Verh. Ver. Brunn, xxi, p. 166, 1893)。

日本からの記録は Motschulsky が *Phanaeus minutus* として記載された種が初めてのものと考えら

れる (Etud. Ent. ix, p. 13, 1860)。Waterhouse は日本から *Oniticellus* 属で記録された (I. C., p. 79-80, 1875)。分布は可成り広い。日本全土 (北海道, 本州, 佐渡島, 九州) から朝鮮, 支那, 台湾, 印度支那, ビルマ, インドに産する。♂のツノの長さによって名前がつけられている。

f. yohennai Matsumura, 1934. 短小の個体。

f. fumiroi Yohena, 1937. 中ぐらいの個体。

山地の牛・馬糞に集るか特に馬糞を好むと。

兵庫県下には南側の海岸線ぞいにはなく (関氏の御影の記録があるがよくわからない)。中央部から北にいて個体数は可成り多いのではないだろうか。

産地: 神戸市御影 [関, 1933]。神崎郡大山村 [西村, 1954] (3♀♀, 8-VII-1956)。多可郡三国岳 (1♂, 1♀, 22-VII-1959, K. Okamoto leg.)。揖保郡 [大上, 1901]。氷上郡神楽 (山本, 足立, 畑中, 1955, 1958), 葛野 [足立, 畑中, 1955]。養父郡水山の山 (2♂♂, 2-VIII-1953, 2♂♂, 2♀♀, 27-VII-1957, 14♂♂, 25♀♀, 21-VII-1958), 関宮 [高橋, 1981], 関宮町葛畑 [谷角, 1982]。美方郡村岡町耀山, 美方高原 [谷角, 1982], 扇の山 [湯浅, 1960, 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1981, 谷角, 1982]。

以上兵庫県産アカマダラセンチコガネ亜科 1 属, 1 種, ダイコクコガネ亜科 4 属, 16 種の県下における分布を中心に記録した。

日本産のこれらの亜科のものからすれば大変少い種しか産しないわけだが本州にのみ分布する種から見るとその約 7 割位を県下に産することになるかと思う。まだまだ調査が足りないようである。

(1984年11月)

(S.45:Tosio Takahashi 神戸市)

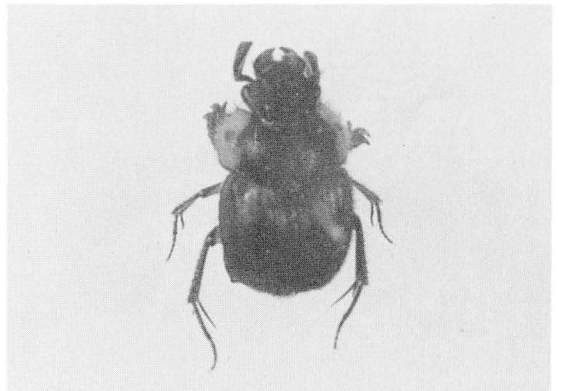


Fig.1. アカマダラセンチコガネ *Ochobaeus maculatus* Waterhouse, 1875 1♀, 27-IX-1970, K. Okamoto leg. (体長 9 mm) 多可郡笠形山産

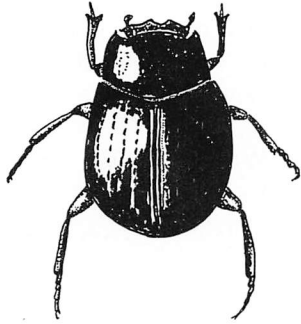


Fig.2. マメダルマコガネ
Panelus parvulus (Waterhouse,1874)

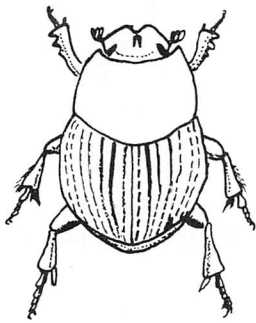


Fig.3. チビコエンマコガネ ♂
Caccobius unicornis (Fabricius,1798)

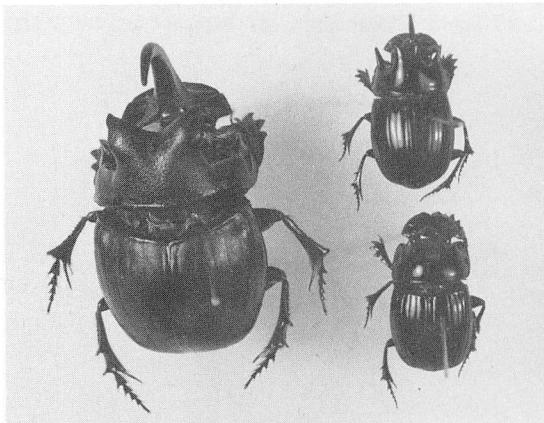


Fig.4. 左. ダイコクコガネ *Copris ochus* (Motschulsky,1860)
♂ 15-IX-1974, 体長25mm 多可郡加美町三谷産
右. ゴホンダイコクコガネ *Copris acutides* Motschulsky,1860
上♂下♀ 13-IX-1975 体長15mm 多可郡加美町三谷産



Fig.5. クロマルエンマコガネ *Onthophagus ater* Waterhouse,1875
10-V-1959, ♂, 体長: 10mm, 神戸市山の街産

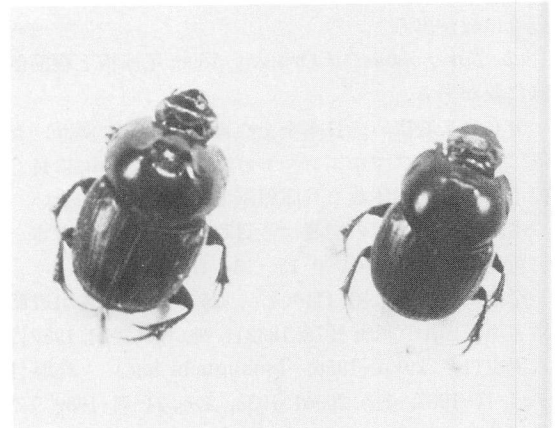


Fig.6. コブマルエンマコガネ *Onthophagus atripennis* Waterhouse,
1875左♂ 10-VII-1969 体長: 9mm, 神戸市鳥原産
右♀ 体長: 8.5mm.

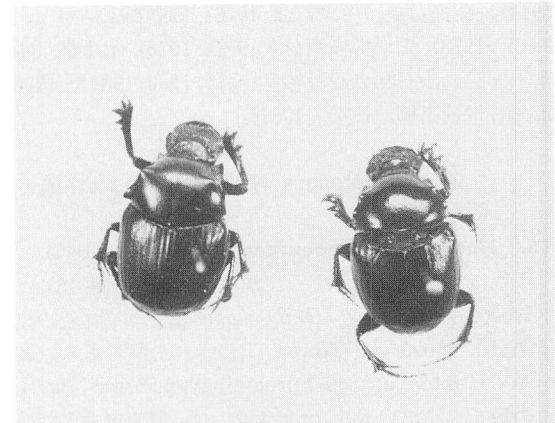


Fig.7. カドマルエンマコガネ *Onthophagus lenzi* Harold,1874
左, ♂ 27-VII-1958, 体長: 11.5mm, 養父郡氷の山産
右, ♂ 15-IX-1974, 体長: 11mm, 多可郡三谷産



Fig.8. ツノコガネ *Liatongus phanaeoides* (Westwood,1840)
 養父郡水ノ山産 左♂, 体長:10mm, 右♀, 体長:9mm,
 27-VII-1958.

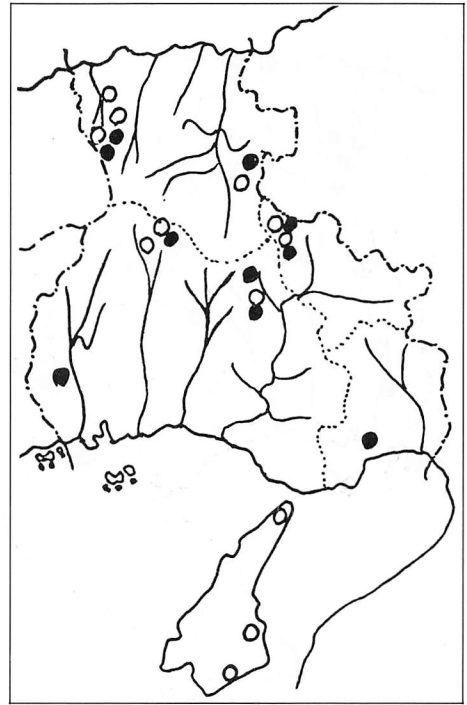


Fig.10. ゴホンダイコクコガネ ○
 ダイコクコガネ ●
 分布概念図

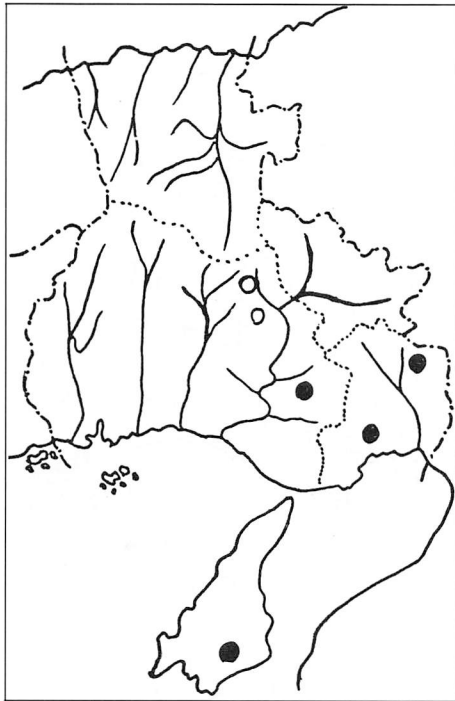


Fig.9. アカマガラセンチコガネ ○
 マメダルマコガネ ●
 分布概念図

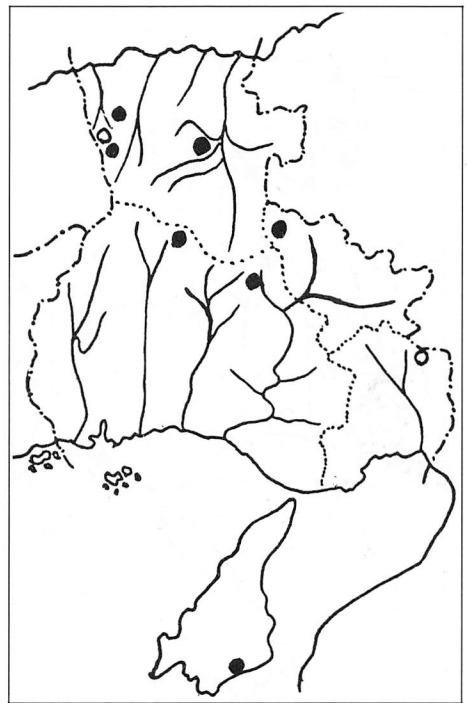


Fig.11. ヒメコエンマコガネ ○
 マヘカドコエンマコガネ ●
 分布概念図

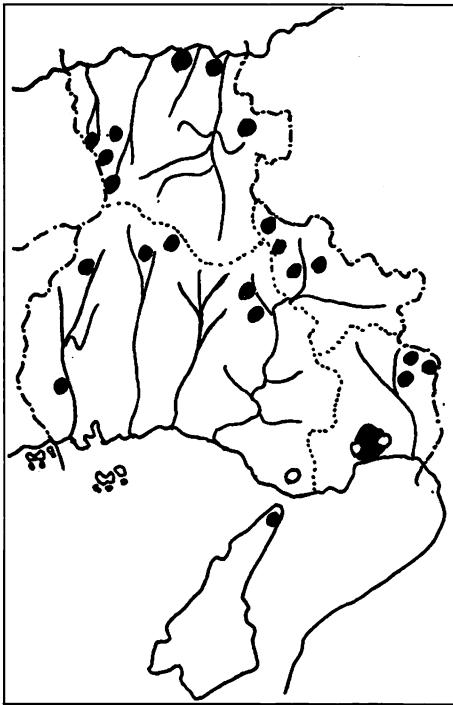


Fig.12. チビコエンマコガネ ○
クロマルエンマコガネ ●
分布概念図

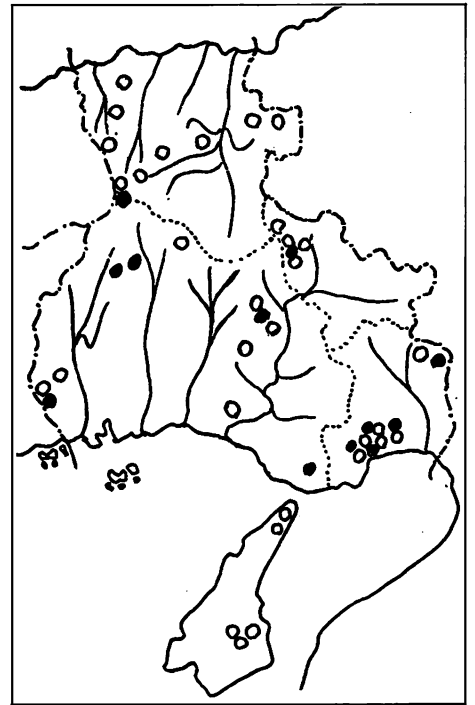


Fig.14. カドマルエンマコガネ ○
ツヤマルエンマコガネ ●
分布概念図

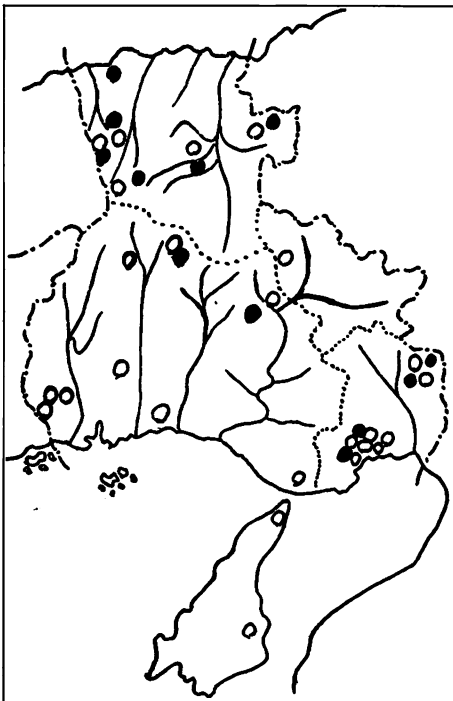


Fig.13. コブマルエンマコガネ ○
フトカドエンマコガネ ●
分布概念図

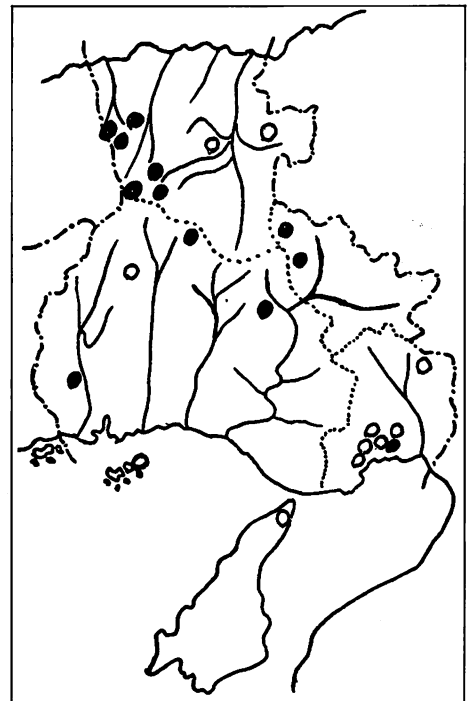


Fig.15. マルエンマコガネ ○
ツノコガネ ●
分布概念図

神戸市摩耶山の蛾類採集目録

岡村 八郎

はじめに、

六甲山の西部に続く摩耶山(標高約700m)は六甲山系の中でも特にシイやアカガシの繁茂した暖温帯極相林に包まれている。

私は1967~1969年の頃、南側にあるケーブル摩耶駅(標高450m)とロープウェー山上駅(標高690m)及び売店にある水銀灯、蛍光灯を拠点として、日没より最終発の21:00まで、それらに飛来する蛾を主に採集した。しかし以後ロープウェーは日没後の運行を中止したので夜の採集を断念した。

1984年、7月20日より8月末までは、ロープウェーが20:30まで運行すると聞き、8月後半から夜の採集を再開した。しかし、9月から11月20日まではロープウェーの運行は19:00までで、9、10の2ヶ月は明かるすぎるので採集をあきらめ、11月は日没がほぼ18:00なので18~19:00の間、数回採集を行った。しかし1985年からはロープウェーの運行は春、秋ともに18:10までになり、冬期は更に早くなった。そのため今年数年は摩耶山頂の夜間採集は夏季8月以外望めなくなった。

摩耶山の蛾類については田中蕃氏が1966年に「神戸市摩耶山に産する若干の蛾類」、1967年に「神戸摩耶山に産する大蛾類」として1961~1963年の立派な採集目録を発表している。(後尾、文献の部参照)。また遊磨正秀氏が1973年に「六甲山地域の蛾類I、II」として摩耶山の蛾類を含めてまとめている。(文献の部参照)。

しかし摩耶山はもとより、六甲山系に関する蛾の目録がこの数年発表されたのを知らないのが不十分なのを承知で、私の現在までの採集標本の記録を簡単な形で列記する。

講談社の「日本産蛾類大図鑑I、解説編」を参考にして、なるべくその目次の順序に従ったが、小型の種で不詳のものはどんどん割愛した。又数回にわけて記載しては同好者をあきさせるので、科、亜科、種については和名を列記し、私が興味を持ったや、珍しい種にのみ学名、データ、説明等をつけた。

なお前述の田中蕃氏の「神戸摩耶山に産する大蛾類」にないものには○印、遊磨正秀氏の「六甲山地域の蛾類I、II」にないものには◎印をつけた。○、◎、又は両印のついたものは両氏の記録をや、補足したもの

と理解されたい。

コウモリガ科

1. コウモリガ

ボクトウガ科

1. ゴマフボクトウ

ハマキガ科

1. ウストビハマキ *Pandermis chlorograpta* Megrik

マダラガ科

ミノウスバ亜科

1. ミノウスバ

ホタルガ亜科

1. ホタルガ
2. シロシタホタルガ
3. ウスバツバメガ

マダラガ亜科

1. キスジホソマダラ

マドガ科

アカジマドガ亜科

1. アカジマドガ

メイガ科

ノメイガ亜科

1. シロオビノメイガ *Hymenia recurvalis* Fabricius
2. オオキノメイガ *Botyodes principalis* Leech
3. クロスジキンノメイガ *pleuroptya balteata* Fabricius
4. ホソミスジノメイガ *Pleuroptya chlorophanta* Butler
5. コブノメイガ *Cnaphalocrocis medinalis* Guenee
6. フチグロノメイガ *Palatalanta ussuralis*

Bremer

7. ウスイロキンノメイガ *Pleuroptya brevipennis*

Inoue

8. クロヘリノメイガ *Sylepta fuscomarginalis*

Leech

9. モンシロルリノメイガ *Uresiphita tricolor*

Butler

10. モンキクロノメイガ *Herpetogramma**luctuosalis* Guenée11. マエアカスカシノメイガ *Palpita nigropunct-**alis* Bremer12. マメノメイガ *Maruca testulatis* Hubner13. クロスジノメイガ *Tyspanodes striata*

Butler

14. モモノゴマグラノメイガ *Conogethes punctif-**eralis* Guenée

フトメイガ亜科

1. オオフトメイガ *Teliphasa amica* Butler2. ナカアオフトメイガ *Teliphasa elegans*

Butler

3. ナカムラサキフトメイガ *Craneophora ficki*

Christoph

シマメイガ亜科

1. ウスオビトガリメイガ (ヘリグロトガリメイガ)

Endotricha consocia Butler

マグラメイガ亜科

1. マツノシンマグラメイガ *Dyoryctria sylvest-**strella* Rotjeburg

カギバガ科

1. スカシカギバ

2. ウスギヌカギバ

3. クロスジカギバ

トガリバガ科

1. アヤトガリバ

2. モントガリバ

3. ホソトガリバ

4. ナカジロトガリバ

5. ムラサキトガリバ

シャクガ科

ホシシャク亜科

1. ウスバフユシャク

アオシャク亜科

1. オオシロアヤシャク

○2. コアヤシャク *Pingasa pseudoterpnaria*

Guenée 27. VIII. 1967.

3. オオアヤシャク

4. ウスアオシャク

○5. アシプトチズモンアオシャク *Agathia curvi-**finiens* Prout

6. カギバアオシャク

○7. ヒメカギバアオシャク *Mixochlora vitata*

Moore 27. VIII. 1967.

○8. キマエアオシャク *Neohipparchus rallata*

Butler 3. VIII. 1968.

○9. ヨツモンマエジロアオシャク *Comibaena**procumbaria* Pryer 18. VIII. 1984.○10. クロモンアオシャク *Comibaena**nigromaculata* Leech 26. VI. 1968.○11. コヨツメアオシャク *Comostola subtiliaria*

Bremer

○12. アカホシヒメアオシャク *Comostola**rubripunctata* Warren

ヒメシャク亜科

1. フタナミトビヒメシャク

○2. ナミスジチビヒメシャク *Scopula personata*

Prout 8. XI. 1984.

○3. モントビヒメシャク *Scopula medicaria*

Leech 5. IX. 1967.

○4. ウスキヒメシャク *Idaea biselata* Butler

1. IX. 1968.

○5. オオウスモンキヒメシャク *Idaea**imbecilla* Inoue

ナミシャク亜科

1. ハコベナミシャク

○2. ウスベニスジナミシャク *Esakiopteryx*21. IV. 1968. *volitans* Butler○3. シロホソスジナミシャク *Microlygris**multistriata* Moore 14. IV. 1968.

4. シロシタトビイロナミシャク

○5. ナカオビアキナミシャク *Nothoporia*

- mediolineata Prout 8. XI. 1984.
- 6. キアミメナミシャク *Eustroma aerosum*
Butler 14. IV. 1968.
7. オオハガタナミシャク
- 8. ホソバナミシャク *Typloptera bella*
Butler
9. ナカジロナミシャク
10. フタテナカヒロナミシャク *Dystroma*
cinereata Moore
- 11. キマダラオオナミシャク *Gandaritis fixseni*
Bremer
12. ビロードナミシャク
13. フトジマナミシャク
14. キガシラオオナミシャク
15. ソトカバナミシャク
- 16. クロテンカバナミシャク *Eupithecia*
18. IV. 1985. *emanata* Dietje
17. モンキキナミシャク
- 18. フタトビスジナミシャク *Xanthorhoe*
hortensiaria Graeser
- エダシャク亜科
1. ユウマダラエダシャク
2. ヒョウモンエダシャク
3. クロフオオシロエダシャク
- 4. オオゴマダラエダシャク *Percnia giraffata*
Guenee
- 5. ゴマダラシロエダシャク *Percnia albimig-*
rata Warren
6. ナカウスエダシャク
7. ウスバミスジエダシャク
8. フトフタオビエダシャク
9. モンシロツマキリエダシャク
10. エグリエダシャク *Fascellina chromataria*
8月下旬多し。 Walker
11. ハスオビエダシャク
12. エグリヅマエダシャク
13. ソトキクロエダシャク
- 14. カバエダシャク *Colotois pennaria*
3 exs. 10. XI. 1984. Linnaeus
15. ウスクモエダシャク
16. スカシエダシャク
17. ツマキエダシャク
- 18. コナフキエダシャク *Plagodis pulveraria*
29. IV. 1968 Linnaeus
19. マエキトビエダシャク
- 20. キバラエダシャク *Garaeus specularis*
Moore
21. トビカギバエダシャク
22. クロクモエダシャク
- 23. ツマジロエダシャク
- 24. ミヤマツバメエダシャク *Thinopteryx*
25. VIII. 1984. *delectans* Butler
- 25. シロツバメエダシャク *Ourapteryx*
maculicaudaria Motschulsky
IX. 1974.
26. コガタツバメエダシャク
- 27. クロミスジシロエダシャク *Myrfeta angelica*
IX. 1974. Butler
28. ウスキツバメエダシャク
29. マエキオエダシャク
- 30. オオノコメエダシャク *Acrodontis fumosa*
29. X. 1974) 1967. Prout
- 31. オオトビエダシャク *Duliophyle majuscul-*
30. VIII. 1984. *aria* Leech
32. オカモトトゲエダシャク
33. モンシロツマキリエダシャク
34. フタテンオエダシャク
35. スジハグルマエダシャク
36. ウストビスジエダシャク
37. ナミスジシロエダシャク
38. クロハグルマエダシャク
- 39. チャエダシャク *Megabiston pulmosaria*
X. 1984. 多し。 Leech
40. ニセオレクギエダシャク
- 41. ウスゴマダラエダシャク *Metabraxas*
paucimaculata Inoue
1 ♀. 17. XI. 1984. ロープウェイ山頂駅にて
- 42. ニトベエダシャク *Wilemania nitobei*
1 ♂. 17. XI. 1984. Nitobe
- 43. シモフリトゲエダシャク *Phigaria*
10. II. 1985. *sinuosaria* Leech
- 44. チャオビフユエダシャク *Phigariohybernia*
14. III. 1985. *fulvinfula* Inoue
45. シロテンエダシャク
- 46. フトオビエダシャク *Hypomecis crasses-*
29. IV. 1968. *trigata* Christoph
- 47. チャマダラエダシャク *Elphos insueta*
1 ♀. 8. VIII. 1985. Butler
ケーブル山上駅にて。
- 48. コヨツメエダシャク *Ophthalmitis*

irrorataria Bremer & Grey

1♂. 20. VII. 1968.

- 49. クロズウスキエダシヤク *Lomographa simplicior* Butler

50. ホシミスジエダシヤク

- 51. ヨモギエダシヤク *Ascotis selenaria*
Denis & Schiffermuller

アゲハモドキ科

1. アゲハモドキ
VIIIに多し。

イカリモンガ科

1. イカリモンガ

カレハガ科

1. クヌギカレハ
2. タケカレハ
3. リンゴカレハ
4. マツカレハ

オビガ科

1. オビガ

ヤママユガ科

ヤママユガ亜科

1. シンジュサン
2. ヤママユ
3. オオミズアオ
4. クスサン
○5. ウスタビガ *Rhodinia fugax* Butler

エゾヨツメ亜科

1. エゾヨツメ

スズメガ科

1. エビガラスズメ
○2. メンガタスズメ *Acherontia styx* West-wood
3. クチバスズメ
4. トビイロスズメ
5. ホソバスズメ
6. モモスズメ
7. サザナミスズメ
8. シモフリスズメ
9. クルマスズメ

10. キイロスズメ

11. ピロードスズメ

12. オオスカシバ

13. ホシヒメホウジャク

シャチホコガ科

1. ハガタエグリチャチホコ
2. クビワシャチホコ
3. ルリモンシャチホコ
4. ホソバシャチホコ
5. タカサゴツマキシヤチホコ
6. モンクロシャチホコ
7. セダカシャチホコ
8. アオセダカシャチホコ
○9. ヘリスジシャチホコ *Neopheosia fasciata*
1 ex. 30. VII. 1969. ケーブル山上駅 Moore
ケーブル山上駅にて
○10. ムラサキシヤチホコ *Uropygia meticulodina*
Oberthur
1 ex. 2. VIII. 1968. ケーブル山上駅にて。
11. モンクロギンシャチホコ
12. ツマアカシャチホコ
13. ウスイロギンモンシャチホコ
14. オオネグロシャチホコ
15. クロシタシャチホコ
16. アオバシャチホコ
17. ギンシャチホコ
18. ヤスジシャチホコ
○19. エゾギンモンシャチホコ *Spatialia jejoensis*
Wileman & South Wileman &
1♂. 18. VIII. 1984. ロープウェー山頂駅にて。
6 km東の六甲山頂附近にはブナ、イヌブナの原生林がある。
○20. オトビモンシャチホコ *Phalerodonta manlegi* Leech
21. ヒメシャチホコ
○22. スズキシヤチホコ *Suzukiana cinerea*
Butler

ドクガ科

- 1. リンゴドクガ
2. ブドウドクガ
3. スカシドクガ
○4. キアシドクガ
5. シロオビドクガ
6. マイマイガ

- 7. ミノモマイマイ
- 8. カシワマイマイ
- 9. キドクガ
- 10. エルモンドクガ *Arctornis I-nigrum*
25. VIII. 1984. Muller
- 11. ドクガ *Euproctis subflava* Bremer

ヒトリガ科

コケガ亜科

- 1. マエグロホソバ *Conilepia nigrocosta*
15. IX. 1967. Leech
- 2. スジベニコケガ
- 3. ヨツボシホソバ
- 4. ベニヘリコケガ

ヒトリガ亜科

- 1. スジモンヒトリ
- 2. クワゴマダラヒトリ
- 3. シロヒトリ
- 4. ベニシタヒトリ

ヤガ科

ウスベリケンモン亜科

- 1. ウスベリケンモン
- 2. キバラケンモン

ケンモンヤガ亜科

- 1. リンゴケンモン
- 2. シマケンモン
- 3. アミメケンモン *Lophonycta confusa*
2. VI. 1968, 25. VIII. 1985. Leech
- 4. シロモンケンモン *Plataplecta*
27. VIII. 1967. albistigma Hampson
- 5. イチモンジキノコヨトウ

タバコガ亜科

- 1. タバコガ
- 2. オオタバコガ *Helicoverpa armigera*
1 ♀. 22. X. 1967. Hubner
- 3. ニセタバコガ *Heliothis fervens* Butler
1 ♂. 5. VIII. 1967.

モンヤガ亜科

- 1. タマナヤガ
- 2. カブラヤガ
- 3. クロクモヤガ

- 4. カバスジャガ
- 5. オオバコヤガ
- 6. ウスイロアカフヤガ
- 7. シロモンヤガ
- 8. ハコベヤガ
- 9. キシタミドリヤガ
- 10. カギモンヤガ
- 11. ウスイロカバスジャガ

ヨトウガ亜科

- 1. シロシタヨトウ
- 2. ヒメムラサキヨトウ
- 3. カバキリガ
- 4. ウスベニキリガ *Orthosia edermarki*
1 ♂. 21. IV. 1968. Bryk
- 5. フタオビキヨトウ
- 6. ウラギンキヨトウ
- 7. スジシロキヨトウ
- 8. ナカスジキヨトウ *Senta flammea* Curtis
1 ♀. 10. IX. 1967.
- 9. アワヨトウ
- 10. ヨトウガ
- 11. キミヤクヨトウ
- 12. クサシロキヨトウ
- 13. ケンモンキリガ
- 14. キンイロキリガ
- 15. オオフタオビキヨトウ *Mythimna grandis*
1 ex. 8. VIII. 1985. ローブウェ Butler
イ山頂駅にて

セダカモクメ亜科

- 1. テンスジキリガ
- 2. キマエキリガ *Hemiglaea costalis*
17. XI. 1984. Butler
- 3. ホシオビキリガ *Conistra unimacula*
2 exs. 17. XI. 1984. Sugi
- 4. キトガリキリガ *Telorta edentata* Leech
1 ♂. 26. XI. 1967.
♂♂. 8. XI. 1984.
- 5. ノコメトガリキリガ *Telorta divergens*
1 ♂. 16. XI. 1967. Butler
- 6. アオバハガタヨトウ *Antivaleria viridimacula* Graeser
1 ♂. 29. IX. 1967.
- 7. ハイイロセダカモクメ *Cucullia maculosa*
1 ♀. 10. IX. 1967. Staudinger
- 8. ケンモンミドリキリガ (ミドリケンモン)

Daseochaeta viridis Leech

2♂. 8. XI. 1984. ロープウェイ山頂駅にて。

- 9. ホソバハガタヨトウ *Magenephria funestra*

1♂. 10. XI. 1984. Leech

ロープウェイ山頂駅にて。

- 10. アヤモクメキリガ *Xylena fumosa* Butler

17. XI. 1984.

- 11. スギタニモンキリガ *Sugitania lepida*

1 ex. 17. XI. 1984. Butler

- 12. ヘーネアオハガタヨトウ *Isopobia hoenei*

4 exs. 8. XI. 1984. Boursin

ロープウェイ山頂駅にて。

- 13. オオハガタヨトウ *Blepharita melanodonta*

1♀. 4. XI. 1985. Hampson

カラスヨトウ亜科

1. シロホシキシタヨトウ
2. ウスキシタヨトウ
3. クロモクメヨトウ
4. シロスジアオヨトウ
5. モクメヨトウ
6. ハスモンヨトウ
7. ヒメサビスジヨトウ
8. シロモンオビヨトウ
9. オオシマカラスヨトウ
10. カラスヨトウ
11. シロスジカラスヨトウ
12. オオウスツマカラスヨトウ
- 13. モンオビヒメヨトウ *Dysmilichia gemella*
1♂. 15. IX. 1967. Leech
- 14. ムラサキツマキリヨトウ *Callopietria juvenina*
1♂. 5. IX. 1967. Stoll
- 15. ヒメツマキリヨトウ *Callostria duplicans*
1♂. 3. VIII. 1968. Walker
16. コマルモンシロガ
- 17. ハジマヨトウ *Bambusiphila vulgaris*
3. VIII. 1968. Butler
- 18. アミメツマキリヨトウ *Callopietria aethiops*
26. V. 1968. Butler
- 19. ハルタギンガ *Chasminodes albonitens*
Bremer
- 20. キスジウスキヨトウ *Archanara sparganii*
Esper

フサヤガ亜科

1. フサヤガ
2. ナンキンキノカワガ

3. リュウキュウキノカワガ

4. キノカワガ

リング亜科

- 1. ミドリリング *Clethrophora distincta*
1♂. 30. VIII. 1984. Leech
- ロープウェイ山頂駅にて。
2. ギンボシリング

コヤガ亜科

1. ウスアオモンコヤガ
2. フタトガリコヤガ
3. ニセシロフコヤガ

キンウワバ亜科

1. ワイギンモンウワバ
2. ギンモンシロウワバ
3. セアカキンウワバ
4. タマナギンウワバ
5. イネキンウワバ
6. キクキンウワバ
7. イチジクキンウワバ

シタバガ亜科

- 1. オニベニシタバ *Catocala dula* Bremer
- 2. シロシタバ *Catocala nivea* Butler
- 3. カバフキシタバ *Catocala mirifica* Butler
1♀. 16. VIII. 1984. 1♀. 18. VIII. 1984.
1♀. 9. VIII. 1985. 3頭ともにロープウェイ山頂駅にて。
4. マメキシタバ
5. アミメキシタバ
6. キシタバ
7. コガタキシタバ
- 8. クロモンシタバ *Ophiusa tirhaca* Cramer
1♀. 10. IX. 1967. ロープウェイ山頂駅にて
- 9. コヘリグロクチバ (コヘリグロシタバ)
Ophiusa olista Swinhoe
10. ムラサキアシプトクチバ
11. オオウンモンクチバ
12. モンムラサキクチバ
13. フクラスズメ
14. ハグルマトモエ
15. カギバトモエ
16. オオトモエ

クチバ亜科

- 1. ヒメクビグロクチバ *Lygephila recta*
Bremer
- 2. カクモンキシタバ *Chrysothrum amatum*
Bremer & Grey
- 3. アカキリバ *Anomis mesogona* Walker
 - 4. オオエグリバ
 - 5. アカエグリバ
- 6. ヒメアケビコノハ *Othreis fullonia* Clerk
 - 1♀. 10. IX. 1967. ローブウェイ山頂駅にて
 - 7. アケビコノハ
 - 8. ルリモンクチバ
 - 9. アカテンクチバ
- 10. ハガタクチバ (オオシラフクチバ)
Deddala lucila Butler
- 11. ナカジロシタバ *Aedia leucomelas* Linnaeus
 - 12. マダラエグリバ
- 13. オビマダラアツバ *Raparna roseata*
Wileman & South
- 14. クロキシタバ
- 15. コウンモンクチバ
- 16. オオアカキリバ *Anomis commoda* Butler

アツバ亜科

- 1. ホシムラサキアツバ *Bomolocha nigrobasalis*
Herz
- 2. ヤマガタアツバ

クルマアツバ亜科

- 1. ハナマガリアツバ *Hadennia incongruens*
Butler
- 2. シロテムラサキアツバ *Paracolax pryeri*
Butler
- 3. トビスジアツバ *Herminia tarsicrinalis*
Knoch
- 4. オビマダラアツバ *Raparna roseata*
Wileman & South

トラガ科

- 1. ベニモントラガ
- 2. ヒメトラガ

おわりに

目録の発表には学名を列記するのが常識であるが、肉体的、時間的な限界を感じたこともあり、まことに雑に和名を並べて汗顔のいたりである。

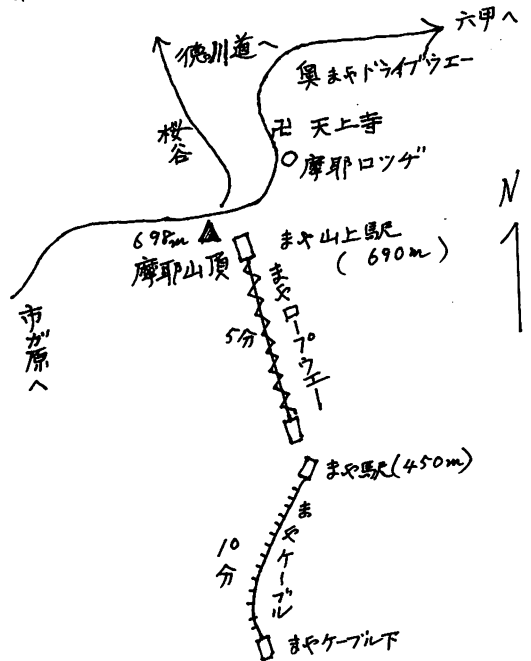
少壮の学者である田中蕃氏、遊磨正秀氏の記録に対し、私が数十種を加えたといさゝか自負はしたが、私の少ない経験から見ても蛾の飛来状況は年毎にかたよりがあり、田中氏が数十種を得られた月、日でも他の年には別のグループの蛾が優勢となり、田中氏の得た蛾が一頭も見られず、彼の見なかった蛾を私ができることも当然である。

又私の標本の大半は十数年以前のものであり、参考とした田中、遊磨氏の目録も古いものであり、その後の私の浅学から知らないのが新人の参考には不十分なので申しわけない。将来時間が許せば1980年以後の六甲、摩耶山の記録を集積したく同好者の御協力を願います。

いろいろ御指導、同定、コピーを頂いた田中蕃氏、遊磨正秀氏、他諸兄に感謝申し上げるとともに、本誌の諸兄からも御叱正、御指導頂くことを希望します。

1985年 12月

摩耶山案内図



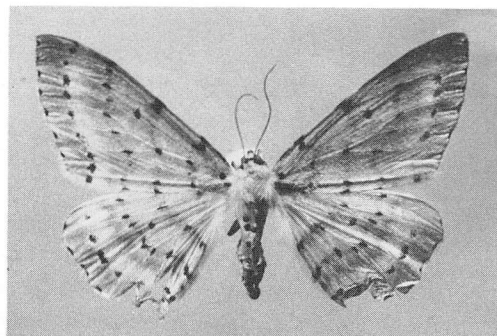


写真1. ウスゴマダラエダシャク, ♀ 開張: 59mm
エダシャク亜科 41

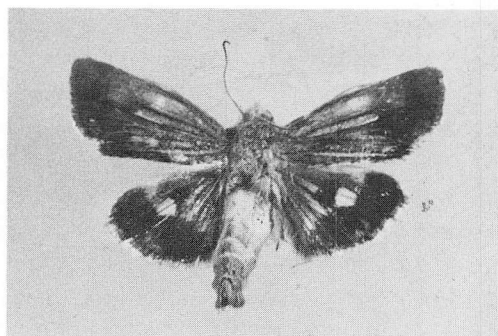


写真5. ニセタバコガ, 開張: 27mm
タバコガ亜科 3

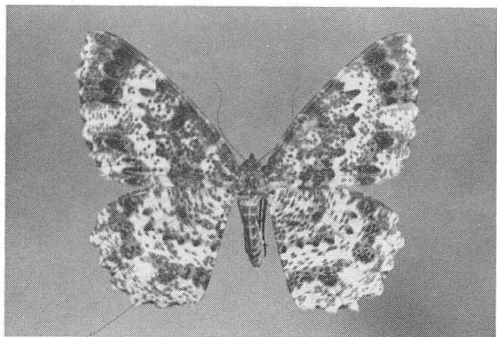


写真2. チャマダラエダシャク, ♀ 開張: 63mm
エダシャク亜科 47

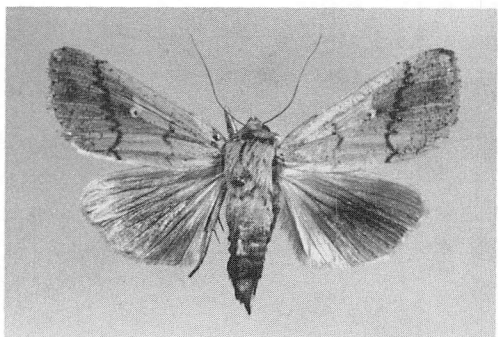


写真6. オオフタオビキヨトウ, 開張: 48mm
ヨトウガ亜科 15

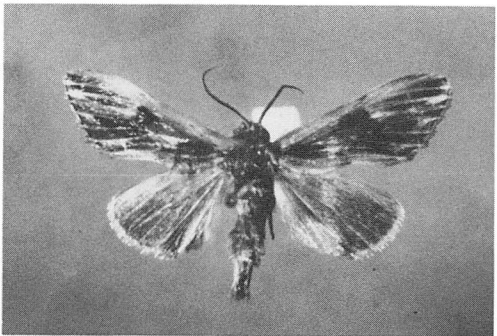


写真3. エゾギンモンシャチホコ, 開張: 32mm
シャチホコガ科 19

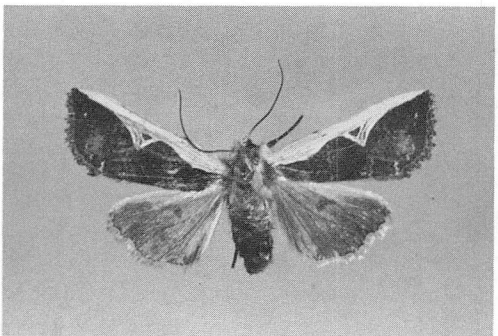


写真7. キマエキリガ, 開張: 30mm
セダカモクメ亜科 2

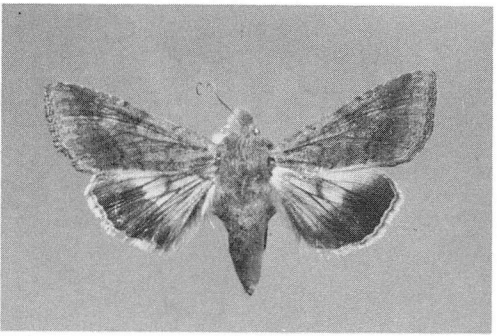


写真4. オオタバコガ, 開張: 36mm
タバコガ亜科 2

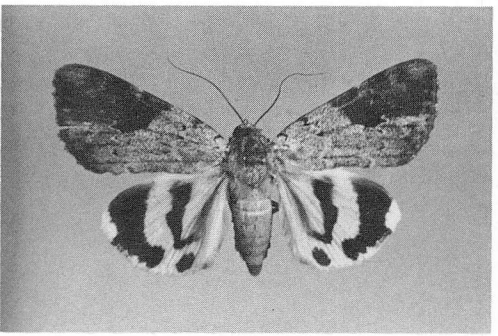


写真8. カバフキシタバ, ♀ 開張: 55mm
キシタバガ亜科 3

参考文献

- 1) 日本産蛾類大図鑑 I、II：講談社
- 2) 原色日本蛾類図鑑上、下：保育社
- 3) 原色昆虫大図鑑 I（蝶蛾篇）：北隆館
- 4) 六甲の自然：神戸新聞出版センター。
10. IX. 1982発行
- 5) 田中蕃：神戸摩耶山に産する大蛾類、佳香蝶
(KAKOCHO) Vol. 19 No.71. Nov. 1967.
- 6) 田中蕃：神戸市摩耶山に産する若干の蛾類、蛾類
通信No.45. 1966.
- 7) 遊磨正秀：六甲山地の蛾類 I、II、きべりはむ
し、1973.
- 8) 遠山雅夫、遊磨正秀、松本健嗣：兵庫県の蛾 (I)
、(II)、きべりはむし、1975.
- 9) 新家勝：宝塚大橋の照明燈で採集した蛾(その1、
その2、その3、続報その1、続報その2) き
べりはむし、1981~1983.
- 10) 松本健嗣：神戸市山田町の蛾数種、その続報 I、
続報 II、きべりはむし、1981~1983.
- 11) 松本健嗣：神戸・明石近海地域の主な蛾(その1)、
きべりはむし、1983.
- 12) 芦田久、佐藤彦：西宮市角石町で採集した蛾類数
種の記録、きべりはむし、1981. 他数篇の採集
御報告例、
- 13) レクリエーションマップ：神戸市市民局生活部市民生
活課市民レクリエーション係。

(〒658 神戸市

岡村八郎 ☎神戸(078)851-

Hachiro Okamura

アブラムシの分泌物を吸う蝶2例

広畑政己

幼虫がアブラムシの分泌物を食べて成長する種には
ゴイシジミやクロシジミなど数種が知られているが、
成虫がアブラムシの分泌物を吸う行動については報告
を聞かないので記録として書き留めておきたい。

分泌物を吸っていたのは、キタテハとサトキマダラ
ヒカゲの2種で、1983年5月29日に神崎郡市川町上牛
尾にてウメのアブラムシの分泌物を吸っているのを目
撃した。両種は吸汁をする習性を持っている種なので、
珍しくはないのかもしれないが、これまでに観察をし
たことがないので報告をした次第である。

(S28: Masami Hirohata 〒671-22 姫路市)

昆虫館だより ⑧

千種川グリーンライン昆虫館

館長 内海 功一

'84年の夏から秋にかけて近辺の直翅類の一部
に関心を寄せてみた。宍粟郡の高地路辺の陽光
地ではハネナガフキバッタがよく目につくが、
ほかに、ミヤマフキバッタも山地では特に多い
ものである。ところが、後者をさらに翅のよう
すなどの外観上から調べてみると、やはり、場
所により変異のあるものが見つかった。

ところで、『信州の秋に鳴く虫とそのなかま』
を参考書としてみると、普通種としてはヤマト
フキバッタといわれるものであり、ほかに、ミ
カド・コンゴウといったものがいた。

これらの食草はヤマトの場合は案外多食性で、
当地の庭でもキク・ノコンギク・ギボウシなど
を食べており、館内飼育ではヨモギで時期外れ
をつくったこともあるが、ミカドやコンゴウ、
それにヤマトを含めてクズ・タニウツギが好物
のようで、特にコンゴウの場合はタニウツギ専
食といってもよいぐらいである。以前に同地で
幼虫がタニウツギの葉上に群がっていたのを見
たが、今度のことで、ヤマトでなかったことが
納得できた。

タニウツギは分布上から日本海側に多いもの
の、播磨では相当南部まで見られる特異分布と
なっているが、やはり、宍粟の奥地の谷程多く
て、これを食草とする虫達もそれに相まったの
分布と思われる。ちなみに、これらは、おおか
たのバッタと違いイネ科の方は好まないようで
ある。

つぎに、山地のツユムシはエゾが主であるこ
と、千種町でコバネヒメギスを見たこと、小さ
くは、船越山中でコバネヒシバッタを見たこと
など、これからの課題が多くできた。

(60. 6. 15)

(S08: Kōichi Utsumi 佐用郡南光町船越)

兵庫県の山地性オオウラギンヒョウモンについて(Ⅲ)

幼虫の食草嗜好と行動についての観察

近藤伸一

はじめに

オオウラギンヒョウモンの幼虫に、数種類のスマレ類を同時に与えて、食草嗜好性について比較調査した実験に用いたスマレ類のうち無茎種(5種)については好みの差はあるもののすべてを食べ、有茎種(3種)ではニョイスミレは好んで食べたが、残りの2種は他のスマレ類と同時に与えるとほとんど食べないことが判明した。また幼虫の飼育の過程で、注目すべき行動について知ることが出来た。

この観察にあたり、スマレ類を同定していただいた三木順一氏、文献等ご教示下さり、有益な助言をいただいた広畑政己氏に厚く御礼申し上げます。

I. 採卵

観察に用いた幼虫は、1983年9月23日兵庫県養父郡関宮町東鉢伏で採集したオオウラギンヒョウモンから採卵し、孵化したものである。母蝶は、1983年9月24日から、11月9日にかけて、最高1日159卵、総計1,776卵産卵した。

II. 越冬

上記の卵の一部を、スマレ、アリアケスマレ、パンジーを混植した植木鉢に入れ、上部をネットで覆い、翌春まで屋外の日陰で管理した。卵は11月から孵化をはじめた。越冬幼虫は4月末になるとスマレの食痕が目立つほど活動をはじめた。

III. 食草嗜好調査

1. 観察方法

観察方法は次の通りである。植木鉢を用いた実験では、直径29cm深さ25cmの素焼の植木鉢に土を上部5cm残して入れ、数種類のスマレを植え、上部に10cmの空間を作るようにネットで覆う。この鉢に幼虫を放し、どのスマレが先に食べられるか、先に食べつくされる

のはどのスマレか、又は残ったスマレだけで順調に成長するのか等を観察した。

飼育箱を用いた実験では縦37cm、横32cm、深さ27cmの段ボール箱に土を2cmの厚さに入れ、箱の四方にそれぞれ10cm×15cmの窓をあけてネットでふさぎ、明りとりと通気孔とし、上部もネットで覆った。

箱の中には数種類のスマレの葉を各10枚ずつ、水を入れたフィルムケースにさしこみ、並べ、幼虫を放した。スマレの葉が食べつくされないよう定期的に葉を補充し、幼虫が食べた葉の枚数を数え、どの種類のスマレを好んで食べるか観察した。

食べた量は枚数で表わしたが、スマレの種類によって葉の大きさが異なり、また食べられ方も1枚食べつくされるとは限らないため、約6cm²を1枚に換算した。

調査に使用したスマレは兵庫県内に特に多く分布している次のものを使用した。

無茎種

- スマレ (*Viola mandshurica*)
- アリアケスマレ (*V. betonicifolia*)
- ノジスマレ (*V. yedoensis*)
- シハイスミレ (*V. violacea*)
- コスミレ (*V. japonica*)

有茎種

- タチツボスマレ (*V. grypoceras*)
- ニオイタチツボスマレ (*V. obtusa*)
- ニョイスミレ (*V. verecunda*)

2. 観察

植木鉢、飼育箱は午前中日光が差し込み、午後は日陰となる自宅(神戸市西区岩岡町)裏庭におき、観察は1984年5月20日から1984年8月5日まで行った。

観察A

1984年5月20日 若~中令幼虫15匹 垂終令幼虫1匹 計16匹を図(A)のように6種のスマレ類を植えた鉢に放

した。

5月27日 スミレ(M)3株のうち2株の新芽はすべて食べられ、残った株も食痕が多い。ニョイスミレ(V)、ノジスミレ(Y)、アリアケスミレ(B)も食痕はかなりあり、ニオイタチツボスミレ(O)には食痕が少しあり、タチツボスミレ(G)は食痕なし。

6月1日 スミレ、ニョイスミレ、ノジスミレ、アリアケスミレは葉も残り少なくなったが、ニオイタチツボスミレ、タチツボスミレには新たな食痕なし。

6月2日 エサが不足しはじめたのか、タチツボスミレに5ヶ所食痕があらわれるが、ニオイタチツボスミレは新たな食痕なし。1匹が終令幼虫となり、亜終令幼虫もあらわれる。

6月6日 タチツボスミレの株は約半分が食されているがニオイタチツボスミレを食べた形跡なし。その他のスミレ類はすべて食べつくされた。

6月30日 タチツボスミレの株はほとんど食べられて、古い葉が3枚残り、ニオイタチツボスミレの株は $\frac{1}{2}$ ほどが食べられ、残った葉は10枚。亜終令幼虫1匹死亡、3匹がかなり衰弱していた。

中令幼虫が過密の状態、食草の量が少ないと、スミレ、ニョイスミレ、アリアケスミレ、ノジスミレは一樣によく食べるが、これらのスミレがある間はタチツボスミレ、ニオイタチツボスミレを食べず、なくなるとタチツボスミレから食べ始め、ニオイタチツボスミレを最も好まなかった。タチツボスミレ、ニオイタチツボスミレだけになると幼虫の成長は悪くなった。

観察B

1984年5月26日 中令幼虫5匹亜終令幼虫8匹計13匹の幼虫を図Bのように6種のスミレ類を植栽した鉢に放した。

6月3日 スミレ(M)が一番多く食され、次いでニョイスミレ(V)、シハイスミレ(Vi)、アリアケスミレ(B)、ノジスミレ(Y)の順に食痕が多い。タチツボスミレ(G)は4枚の葉に僅かに食痕が認められた。

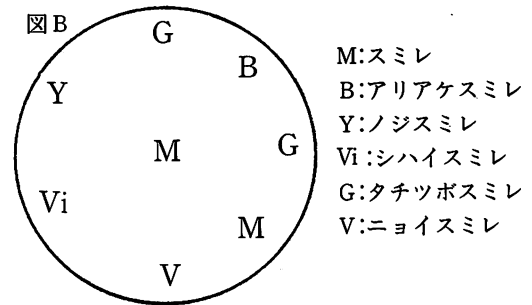
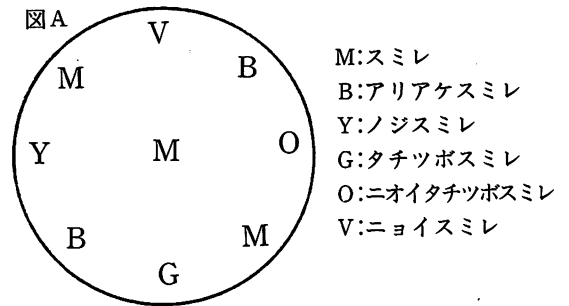
6月7日 スミレは1株が食べつくされ、残りの1株のスミレとシハイスミレ、アリアケスミレ、ノジスミレもよく食べられ、葉は残り少なくなった。タチツボスミレの食痕が1ヶ所ふえる。

6月10日 タチツボスミレ以外のスミレ類は食べつくされる。終令幼虫があらわれた。

6月30日 タチツボスミレの株も約 $\frac{1}{2}$ ほど食べられ、

約40枚の葉が残っている。終令幼虫2匹、亜終令幼虫3匹が生存していた。

中令、亜終令幼虫が過密な状態で、食草の量が少ないと、まずスミレを好み、ニョイスミレ、シハイスミレ、アリアケスミレ、ノジスミレもよく食べた。これらのスミレがなくなってからタチツボスミレを食べ始めたが、タチツボスミレを食べる量は少なかった。



観察C

6月30日 観察Bのタチツボスミレを食べていた終令幼虫2匹を(図C)の飼育箱に放す。地面には(図C)のように5種類のスミレ類の葉を各10枚ずつ並べ、毎夜食された葉の枚数を数えた。

7月1日 スミレ5、アリアケスミレ3、ニョイスミレ1、タチツボスミレ $\frac{1}{2}$ 、ニオイタチツボスミレ0。

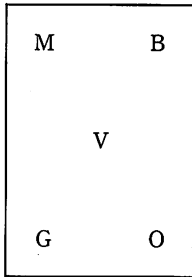
7月2日 スミレ4、アリアケスミレ2 $\frac{1}{2}$ 、ニョイスミレ1、タチツボスミレ0、ニオイタチツボスミレ0。

7月3日 スミレ4、アリアケスミレ4、ニョイスミレ3、タチツボスミレ0、ニオイタチツボスミレ0。

ある期間タチツボスミレだけを食べていた終令幼虫

を広い、常にスマレ類の葉がある状態におくと、スマレ、アリアケスマレ、ニョイスミレ、の順に好み、タチツボスマレは初日 $\frac{1}{2}$ 枚食べただけで、ニオイタチツボスマレは食べなかった。

図C



M:スマレ
B:アリアケスマレ
V:ニョイスミレ
G:タチツボスマレ
O:ニオイタチツボスマレ

観察D

3つの鉢に有茎種のタチツボスマレ、ニオイタチツボスマレ、ニョイスミレの3種をそれぞれ植栽し、若令幼虫をそれぞれの鉢に2匹ずつ放す。(6月3日)

(a)タチツボスマレの鉢

- 7月18日 食痕多く見られ中令幼虫1匹確認
- 7月26日 幼虫の大きさは12mmとほとんど成長しない。
- 8月5日 幼虫死亡確認

(b)ニオイタチツボスマレの鉢

- 7月18日 食痕は認められるが幼虫確認出来ず。その後も幼虫の姿を確認出来なかった。

(c)ニョイスミレの鉢

- 7月14日 1♂羽化(小型前翅長28mm)他の幼虫は確認出来なかった。

1種類のスマレだけで飼育した結果、タチツボスマレだけを食べても約60日間生存したが、終令には至らず、ニオイタチツボスマレでは、早い時期に幼虫が確認出来なくなった。ニョイスミレを食べた幼虫は大変小型ではあったが、1♂羽化し、食草となり得ることがわかった。

観察E

図E1~E3のようにスマレ類を配置した飼育箱に

終令幼虫を放し、毎日食べたスマレの葉の枚数を数えた。6月7日から6月13日までの7日間に幼虫が食べたスマレの葉の枚数は次のとおり。

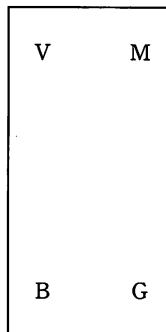
(a)E1 ニョイスミレ10 $\frac{1}{2}$ スマレ6 アリアケスマレ3 タチツボスマレ $\frac{1}{2}$

E2 シハイスミレ10 アリアケスマレ5 $\frac{1}{2}$ タチツボスマレ食痕 ニオイタチツボスマレ0

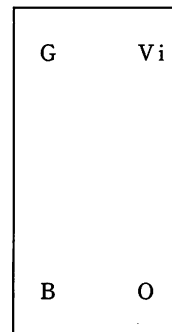
E3 スマレ9 コスマレ9 アリアケスマレ8 $\frac{1}{2}$ ノジスマレ5

ニョイスミレ、スマレ、コスマレ、シハイスミレを好み、次いでアリアケスマレ、ノジスマレを好んだ。タチツボスマレ、ニオイタチツボスマレは好まなかった。

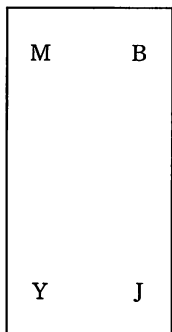
E1



E2



E3



M:スマレ
B:アリアケスマレ
Vi:シハイスミレ
J:コスマレ
V:ニョイスミレ
G:タチツボスマレ
O:ニオイタチツボスマレ
Y:ノジスマレ

観察F

6月29日 図Fのようにスマレ類の葉を配置した飼育箱に終令幼虫を7匹放す。7月5日までに食べたスマレ類の葉の枚数は表Iのとおりであり、スマレを特に好み、ニョイスミレ、アリアケスマレも食べた。ニオイタチツボスマレは好まずタチツボスマレは食べなかった。

観察G

7月8日図Gのようにスマレ類の葉を配置した飼育

箱に終令幼虫3匹放す。7月16日2匹前蛹、7月17日1匹前蛹となったため、終令幼虫を7月16日1匹、7月18日2匹追加して放した。

7月19日まで各時間単位で食べたスマレ類の葉の枚数を示したのが表IIである。スマレを好み次いでノジスマレ、アリアケスマレ、その次にニョイスミレの順に好み、タチツボスマレは好まず、ニオイタチツボスマレは食べなかった。

観察H

7月19日から7月23日にかけて同様の実験を行う。スマレ類の配置は図H、放した終令幼虫は3匹、その結果は表IIIのとおりで、スマレ、ニョイスミレ、アリアケスマレ、ノジスマレ、シハイスミレ、の順に多くの量を食べ、タチツボスマレ、ニオイタチツボスマレは食べなかった。

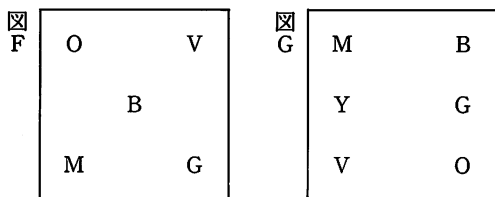


表 I

種類	月日										計 (枚)
	時	8:00	19:00	8:00	14:00	19:00	6:00	6:00	21:00	6:30	
スマレ (M)	8	12	9	9	9	3	23	16	4	18	111
アリアケスマレ (B)	1	2	0	2	1	0	4	1	0	5	16
ニョイスミレ (V)	0	2	1	0	2	0	7	5	0	3	20
タチツボスマレ (G)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ニオイタチツボスマレ (O)	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1

表 II

種類	月日																計 (枚)		
	時	19:30	6:00	24:00	7:00	6:00	7:00	19:00	6:00	19:30	6:30	22:00	5:40	19:30	6:00	23:00		6:00	
スマレ (M)	0	5	1	10	11	8	1	8+	1	9	0	11	1+	7	5+	0	9	88+	
ノジスマレ (V)	0	3	0	1	1	1	1	+	1+	0	4	0	3	0	3	2	0	2	22
ニョイスミレ (V)	0	+	0	2	1	3	0	0	0	1	0	4	0	0	0	0	0	1	12+
アリアケスマレ (B)	0	0	0	3	5	3	0	+	0	1	+	3	0	4	1	0	2	23	
タチツボスマレ (G)	0	0	0	0	+	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	+
ニオイタチツボスマレ (O)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

3. まとめ

- (1)スマレを最も好んで食べた。
- (2)ニョイスミレ、アリアケスマレを第2に好んだ。
- (3)ノジスマレは上記3種よりやや劣る。
- (4)コスミレ、シハイスミレは実験回数が少なかつたがかなり嗜好性は高いようである。
- (5)タチツボスマレは好まれず、ニオイタチツボスマレはほとんど食べなかった。
- (6)母蝶の採集地である東鉢伏には、スマレ、タチツボスマレが特に多く、スマレが食草となっていることは確実であるが、タチツボスマレが二次的食草となっている可能性はほとんどない。
- (7)他の産地では、スマレが一次的食草に、ニョイスミレ、アリアケスマレが二次的食草となっている可能性は高い。
- (8)シハイスミレも好んで食べるが、本種はうす暗い林床に分散して生えており、オオウラギンヒョウモンの生活空間とは異なった環境であるため、食草とはなり得ない。

図H 表III

種類	月日										計 (枚)
	時	7:00	7:00	6:00	8:00	18:00	7:00	9:00	20:00	6:00	
スマレ (M)	4	6	0	2+	0	0	0	3+	0	16	
ノジスマレ (V)	3	1	0	1+	0	+	+	0	6+	6+	
アリアケスマレ (B)	2+	3	0	2	0	0	2	0	9+	9+	
ニョイスミレ (V)	5	2	0	2	2	+	2	0	13+	13+	
シハイスミレ (V)	2	0	0	0	0	+	+	0	3	3	
タチツボスマレ (G)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
ニオイタチツボスマレ (O)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	

IV. 幼虫の行動について

段ボール箱の中での観察ではあったが、オオウラギンヒョウモンの幼虫が食草を食べるのは明るい時間帯に限られていた。表II、表IIIの※欄にもその事実が表れ、夜間はほとんど摂食していない。次に観察G、Hにおける幼虫の行動について記す。

観察

7月8日

20時00分終令幼虫3匹ダンボールの壁の上部で静

止。1匹はふたをしたネットに沿って体の方向は水平、他の2匹は頭部を上には垂直方向。

7月9日

5時30分周囲は明るくなっており、青空もみえる。
幼虫は昨夜の位置と少しずれている。
食草は昨夜のままで、食べられていない。

6時00分上記と同じ位置で静止。

6時30分上記と同じ。

7時00分箱の中に朝日がさし込んでいる。1匹は同じ位置で静止他の2匹は地面におり、1匹はスマレの葉の上、他の1匹はノジスマレを食べだす。

7時40分3匹とも地面、1匹はスマレの葉を食べ1匹はノジスマレの葉上で静止、残りの1匹は地面をはっている。

23時00分2匹はネットのふたにはりついている。他の1匹は壁の上部で静止。

7月10日

7時00分1匹は壁で静止、他の2匹は地面におりている。土の上に1匹、スマレの葉の裏に1匹。

22時00分3匹とも壁の上部、体を垂直方向に向けて静止。

7月11日

6時00分地面に1匹おりている。他の2匹は壁に静止したまま。

7月12日

6時20分地面に1匹、壁に静止2匹。

7時00分地面に1匹、壁に静止2匹。

19時30分雨が降っている。幼虫はネットのふたに3匹とも静止している。

7月15日

5時40分地面に1匹。スマレを食べている。2匹はネットに静止。

7月19日

7時00分地面に2匹。うち1匹はスマレを食べている。1匹は壁に静止。

8時40分3匹とも地面に、うち2匹はスマレの葉上。

7月20日

7時00分地面に1匹。ニョイスミレを食べている。他の2匹は壁に静止。

7月21日

6時00分1匹壁で前蛹となる。2匹は壁で静止。

8時00分2匹壁で静止。

18時00分1匹壁で静止、1匹は地面をはっている。

19時09分1匹はネットに1匹は壁で静止。

20時00分ネットの幼虫の位置は少しずれているが壁の幼虫は同じ位置。

21時00分2匹とも同じ位置。

22時00分2匹とも同じ位置。

7月22日

2時00分ネットの幼虫の位置は少しずれている。壁の幼虫は同じ位置。

4時00分2匹とも同じ位置。

7時00分ネットにいた幼虫が地面に。ニョイスミレをすでに2枚食べている。壁の幼虫は同じ位置で静止。

9時00分2匹とも地面におりている。

20時00分1匹はネットで、他の幼虫は壁で静止。

7月23日

6時00分ネットの幼虫は昨夜と同じ。壁にいた幼虫は地面におり、スマレを食べている。

観察した7月中旬は、日の出が4時50分ごろ、日の入りは19時10分ごろであったが、飼育箱の中は四方に窓があるものの箱の外よりはかなり暗かった。幼虫は明るくなると夜間の休止場所から地面におり、スマレを食べたり休息したりして、ほとんどの時間は地面にいたが、日が暮れると壁に登り頭部を上にし、体を垂直方向にして休止するか又はふたのネットにはりついて休止した。夜間はほとんど活動せず、朝までほぼ同じ場所で静止していた。

野外における幼虫の行動についての考察

自然状態におけるオオウラギンヒョウモンの幼虫の行動は、観察出来なかったが、飼育時に観察したように、終令幼虫は昼間は地面で活動し、夜間は背の高い草やかん木に登って休止しているものと推定出来る。幼虫が壁で静止する姿勢はほとんどの場合頭部を上にして、体を垂直方向に向けていることも、野外における夜間の休止状態を暗示している。

幼虫の夜の天敵は地面をはい回ってエサを求める夜行性の動物や捕食昆虫であろうが、幼虫は地面から離れることにより、これらの敵から身を守ることが出来る。一方昼間は空を飛ぶ鳥や蜂類が敵となろうが、上部を草やかん木で覆われていれば、幼虫は地面にいる方が安全であろう。

今回飼育したオオウラギンヒョウモンの産地は、草

地で日光がよくあたり、食草であるスマレも多く生えているが、幼虫の成長するころは、ワラビやその他の草で地表が覆われ、幼虫の生活にとって理想的な環境となっている。

おわりに

(オオウラギンヒョウモンを絶滅から救うために。)

近年オオウラギンヒョウモンは絶滅寸前の状態まで個体数を減じた。その原因を考えてみる。

まず考えられるのは、ヒョウモン類が生活するのに適した草原が非常に勢いで減少し、生活の場を失ってしまったことであろう。

地型的に準平原等で排水が悪かったり、火山灰土等土質が悪く、樹木が生育出来ない所が、過去には広い面積で草原になっていた。このような所は近年ほとんど開発され、ゴルフ場、別荘地、住宅地等になってしまった。

河川敷や堤防等も昔から定期的に草刈りや火入れが行なわれていたため、樹木は生育出来ず、人工的草原となっていたが、ほとんどの場所は改修され、コンクリート、張ブロック、芝生等で整備され、残された所は人手が入らなくなったため、雑木が密生している。

兵庫県内で現在草原が残されているのはスキー場等何らかの理由で定期的に山焼きや草刈りが行われているごく限られた区域である。オオウラギンヒョウモンもこのような所でほぼそと世代を繰り返している。

近年本種の個体数の減少が採集熱をあおり、7月下旬羽化した早は産卵することなく採集されてしまう。

本種はスマレ類のうち最も広く今布するタチツボスマレ、ニオイタチツボスマレを好まない。幼虫の期間も長い。秋になるまで産卵しない。生態的に不利な条件は多いがこれらを多産で補って来たのであろう。

虫を愛する者が種の絶滅に手を貸すことになっている現状を反省しなければならぬ時期が来ている。

参考文献

- 近藤伸一 (1981) 兵庫県の山地性オオウラギンヒョウモンについて。
(てんとうむしNo.7 102~105)
- 近藤伸一 (1982) 兵庫県の山地性オオウラギンヒョウモンについて(II)
(てんとうむしNo.8 181~185)
- 近藤伸一 (1984) オオウラギンヒョウモン1776卵を

産卵 (ひろおびNo.7 34)

師尾 武 (1981) ウラギンスジヒョウモン幼虫の食草嗜好性について

(インセクト Vol.32 No.1. 10-12)

(S.62: Shinichi Kondo 神戸市)

モンキアゲハの翅脈異常

山本 健一

8月27日に孵化したモンキアゲハの幼虫を飼育した処、羽化した6頭のうち2頭に翅脈異常個体を認めたので報告する。

1頭は後翅両側の第6脈が消失し第5・第6翅室の白斑が癒合している。

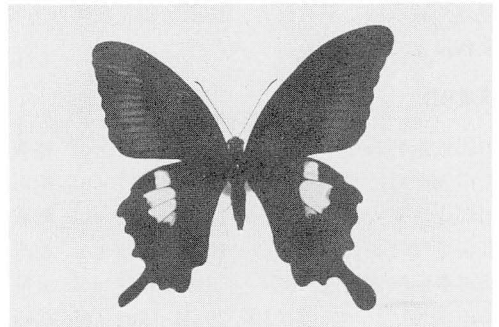
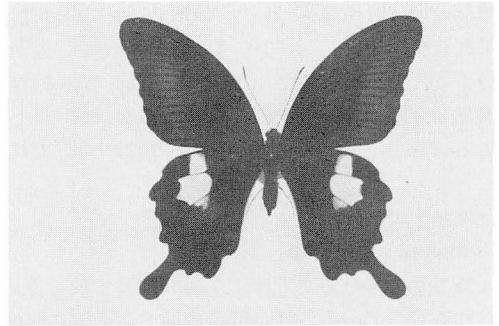
もう1頭は左側のみ同様の異常を認めた。同個体の右側は発育不良或は羽化障害による変形と思われる。

終りに卵を譲って載いた木村三郎氏に心より御礼申し上げる。

写真I. 26. X. 1984 羽化

写真II. 3. XI. 1984 羽化

(S.79: Kenichi Yamamoto 姫路市)



西播磨の蜻蛉 (Ⅳ) サナエトンボ科

相坂耕作

はじめに

兵庫県の南西部に位置する西播磨地方は千種川、揖保川、夢前川、市川など大きな河川が流れ、溜池等も適当にあり、蜻蛉の良い生息地となっている。

しかし最近では都市化の影響により、減少している蜻蛉も少なくない。

筆者は「てんとうむしNo.7~9」でトンボ科及びヤンマ科を記したが、今回はサナエトンボ科の採集例を中心に手持ちのデータで補足し、サナエトンボ科のリストを作成した。

○ミヤマサナエ

Anisogomphus maacki SELYS

西播磨地方に産するサナエトンボ科で最も少ない種類のひとつで、産地は極限されている。6月頃羽化し9月頃まで見られる。羽化した成虫は深山(ミヤマ)に向かって移動し、成熟し9月頃発生地の平地河川部に戻ってくるものと考えられている。

<採集例>

神崎郡大河内町砥峰	1♀	6-VIII-1981	col. 大前
宍粟郡波賀町赤西	1♂1♀	12-VIII-1981	col. 大前
竜野市竜野町	2♂	8-IX-1984	col. 相坂
揖保郡新宮町	1♂	10-IX-1984	col. 東
相生市三濃山	1♂	16-VIII-1981	col. 米村

○ヤマサナエ

Gomphus melaenops SELYS

大型のサナエの仲間では、西播磨地方で最も普通に見られるものである。日本特産の種で、一般に平地や丘陵地の流水域に見られる。幼虫は砂泥底のゆるやかな流れによく見られる。

<採集例>

佐用郡佐用町若州	2♂	12-VI-1977	col. 相坂
相生市矢野町三濃山	1♂1♀	19-VI-1977	col. 相坂
佐用郡佐用町大船	1♂	12-VI-1978	col. 相坂
竜野市竜野町北竜野	1♂	19-VI-1979	col. 相坂
飾磨郡夢前町永室池	1♂	3-VI-1979	col. 大前
姫路市六角	1♂2♀	20-VI-1984	col. 相坂

○キイロサナエ

Gomphus pryeri SELYS

前種同様サナエトンボ科では大型種。外形はヤマサナエに大変似ており、またヤマサナエと混生していることが多いので、同定誤りの可能性もある。

<採集例>

竜野市竜野町北竜野	1♂1♀	27-V-1965	col. 相坂
姫路市六角	1♀	30-V-1980	col. 相坂

○ホンサナエ

Gomphus postocularis SELYS SELYS

流水域の中型サナエトンボで、頑丈な感じのする大身の種類。4月下旬から羽化し、5月初旬最も多く見られる。最近姫路市の六角付近の河川部や西播磨各地で採集されている。しかしこの種は全国的に少なくなっているといわれる。

<採集例>

姫路市六角	4♂	15-V-1982	col. 相坂
佐用郡三日月町本郷	1♂	11-V-1985	col. 相坂
姫路市飾西桜峠	1♂	9-V-1982	col. 上野
姫路市山田町藤の木	1♂	12-V-1984	col. 上田

○フタスジサナエ

Trigomphus interruptus SELYS

最も普通に見られるサナエトンボであり、西播磨地方では4月下旬より羽化し、6月頃まで見られる。

低地の池や溜池に多く見られ、水域からあまり離れないようだ。

<採集例>

飾磨郡夢前町別車	1♀	10-V-1970	col. 相坂
飾磨郡夢前町山の内	1♂	10-V-1970	col. 相坂
竜野市揖西町	1♂	5-V-1973	col. 相坂
揖保郡御津町碓岩	1♂1♀	20-V-1973	col. 相坂

○オグマサナエ

Trigomphus ogumai ASAHINA

日本特産の蜻蛉。少々汚い水でも生息するサナエトンボ。やはり主として低地の池や溜池に産する。西播磨地方でも春一番に出る最も普通のサナエトンボである。成虫は地面の上にベタッと止まったり、池の近くの樹木の葉上に静止した姿をよく見かける。

〈採集地〉

揖保郡御津町碓岩 2♂1♀ 27-IV-1973 col. 相坂
竜野市揖西町 2♂ 20-V-1973 col. 相坂

○タベサナエ

Trigomphus citimus tabei ASAHINA

4月初旬より出現し、6月頃まで見られる春先き最も早く出現するトンボである。幼虫は主に丘陵地や平地の小川、特に灌漑用の溜池等でも見られる。しかし河川改修や埋め立てにより池がなくなり、次第に生息地が減っている。

〈採集地〉

飾磨郡夢前町別車 2♂ 10-V-1970 col. 相坂
姫路市白国増位山 1♂ 10-V-1982 col. 相坂

○ダビドサナエ

Davidius nanus SELYS

山地の溪流沿いに最も多く見られる小型のサナエトンボである。春から初夏にかけて見られ、溪流の樹上で生活している。西播磨各地に最も多く見られ成虫の胸部の斑紋には変異が多く、時には別種と思われる個体も採集できる。

〈採集地〉

相生市矢野町三濃山 2♂ 20-V-1973 col. 相坂
佐用郡佐用町若州 2♂1♀ 19-VI-1977 col. 相坂
飾磨郡夢前町雪彦山 1♂ 26-V-1981 col. 相坂

○ヒラサナエ

Davidius moiwanus taruii ASAHINA et INOUE

モイワサナエの別亜種で滋賀県の比良山にちなむこ

の種は、西播磨地方で最も稀な蜻蛉の一種である。

幼虫はミズゴケの生える細い流れの湿地に住み、西播磨地方では、僅かに砥ノ峯高原でのみ知られている。しかし高地の細流を探すとこれからも発見出来る可能性がある種だ。

〈採集例〉

神崎郡大河内町砥峰 3♂1♀ 12-VI-1986 col. 相坂

○クロサナエ

Davidius fujiama FRASER

ダビドサナエと同じような溪流付近の樹上や草むらにて見られる。個体数は少なく珍しい。西播磨地方では5~7月に出現する。幼虫は流れのゆるやかな溪流の川底に住んでいる。

〈採集例〉

飾磨郡夢前町雪彦山 1♂2♀ 4-VI-1967 col. 相坂
相生市矢野町三濃山 1♂ 27-IV-1973 col. 相坂
佐用郡佐用町若州 1♀ 12-VI-1977 col. 相坂
飾磨郡夢前町馬頭 1♀ 27-IV-1986 col. 相坂

○ヒメクロサナエ

Lanthus fujiacus FRASER

日本特産種で、西播磨地方では山地の溪流沿いに生息する種類で少なく珍しい。成虫は5月頃が一番多くみられる。

〈採集例〉

佐用郡南光町久保田 1♂ 3-V-1986 col. 相坂
飾磨郡夢前町熊部 1♀ 3-V-1985 col. 東

○ヒメサナエ

Sinogomphus flavolimbatus OGUMA

高地性のトンボで、山地の溪流に産する少ないサナエの仲間。成虫は6~8月に出現する。

〈採集例〉

宍粟郡一宮町福知 1♂ 16-VIII-1972 col. 相坂
佐用郡佐用町若州 1♂ 7-VIII-1977 col. 相坂

○オジロサナエ

Stylogomphus sukuzii OGUMA

主に低山地の溪流域に産するが、産地はかなり限定される傾向がある。しかし案外西播磨地方には比較的広範囲に分布するようである。個体数は少ないようだ。

〈採集地〉

飾磨郡夢前町別車	1♀	10-VI-1970	col. 相坂
佐用郡久崎町秋里	1♂	14-VI-1970	col. 相坂
飾磨郡夢前町雪彦山	1♂	21-VI-1970	col. 相坂
姫路市林田町奥佐見	1♂	16-VIII-1975	col. 相坂
佐用郡佐用町若州	1♀	7-VIII-1977	col. 相坂
宍粟郡波賀町水谷	1♀	23-VII-1977	col. 尾崎
赤穂郡上郡町野桑	2♂	17-VII-1981	col. 相坂

○アオサナエ

Nihogomphus viridis OGUMA

中型のサナエトンボで、頑丈な体に全体緑色味の強いトンボで、平地の流水域で初夏に見られる。西播磨地方では産地は極限される。水面上をなわ張り活動をよくするのが目に入ることがある。

〈採集例〉

赤穂郡上郡町金出地	2♂	7-VI-1980	col. 三木
姫路市六角	3♂1♀	27-V-1983	col. 相坂
姫路市林田町八幡	2♂2♀	23-V-1982	col. 上野

○オナガサナエ

Onychogomphus viridicostus OGUMA

西播磨では目によくするサナエの仲間。スマートな体で中型種。夏期に出現して流水域にて生息する。

和名のオナガは雄の尾部上付属器が長大なことになんている。幼虫は平地河川の小石の多い場所にてみられる。

〈採集地〉

竜野市竜野町北竜野	1♂1♀	1-VII-1967	col. 相坂
姫路市林田町奥佐見	1♂1♀	16-VIII-1973	col. 相坂
飾磨郡夢前町糸田	1♀	12-VII-1982	col. 木村
竜野市神岡町東鯨崎	2♂	8-IX-1985	col. 相坂

○コオニヤンマ

名前にはヤンマがついているが、サナエトンボ科に属する。幼虫は低山地の溪流や河川の川底にへばりついていたような生活をおくっている。

我が国に産するサナエトンボ科では最も大型の種であり、西播磨地方では5月下旬～9月末にかけて成虫が見られる。幼虫の形は扁平で特異な型をしているため幼虫採集の際によく目立つ。

〈採集地〉

竜野市竜野町北竜野	1♀	16-VI-1967	col. 相坂
姫路市林田町奥佐見	1♂1♀	25-VII-1976	col. 相坂
佐用郡上月町	1♀	8-VII-1984	col. 相坂
竜野市竜野町	1♀	8-IX-1985	col. 相坂

○ウチワヤンマ

Ictinogomphus clavatus FABRICIUS

5月中旬より9月末頃まで見られる。主に開けた池や、ゆるやかな流れの河川などに生息している。

大きなサナエトンボで、♂♀ともに腹端近くに円形の付属物があるので、すぐ種類が分かる。

〈採集地〉

揖保郡御津町碓岩	2♂1♀	17-VIII-1978	col. 相坂
相生市池の内	1♂	17-VII-1981	col. 米村
姫路市飾西桜峠	1♂	10-VII-1983	col. 大川
〃 飾磨区今在家	1♂	11-VII-1983	col. 大川

以上により西播磨の蜻蛉、サナエトンボ科を修了したことになる。終わりにあたり、西播磨地方にて分布可能なサナエトンボ科として、コサナエおよびタイワンウチワヤンマをあげて本稿を終了したい。尚資料の提供や有益な御助言を賜った東輝弥、上田倫範、上野哲郎、大前晋、木村三郎、三木安貞、米村和繁の諸氏に深くお礼申し上げます。

参考文献

- 関西蜻蛉談話会(1975)近畿地方のトンボ、第1部ムカシトンボ科。ムカシヤンマ科・サナエトンボ科
兵庫県生活部自然課(1974)兵庫県の自然の現状II
大前晋(1979)夢前愛下流周辺の蜻蛉相、姫路市立科学館資料
環境庁(1979)動物分布調査報告書(昆虫類)
相坂耕作(1980)姫路市の昆虫：てんとうむしNo.7
米村和繁・米村和也(1982)相生市の蜻蛉、てんとうむしNo.8。

(S.05:Kousaku Aisaka 姫路市)

梅雨明けの杉ヶ沢

山本健一

例年になく雨が降り続いた梅雨も明けた1986年7月10日、杉ヶ沢を訪れた。湿地周辺で11時から15時の間に、ウスイロヒョウモンモドキの♂2と♀の新鮮個体1を採集した。他に次の5種を採集した。

- ウラムスジジミ
- ジョウザンミドリジミ
- ウラギンヒョウモン
- ヒオドシチョウ
- コキマグラセセリ

(S.79:Kenichi Yamamoto 姫路市)

兵庫県のナガハナノミ・ヒラタドロムシ

(兵庫県甲虫相資料・159)

高橋 寿郎

日本産のナガハナノミ科 (Ptilodactylidae) については戦前、中根猛彦博士が“日本産長花蚤科甲虫類に就いて”(宝塚昆虫館報, No.45, 1948)なる解説文を書かれ戦後になって再び日本産の解説を発表になられた (Sci. Rep. Saikyo Univ. No.1 : 35-41, 1952., 新昆虫, 9巻, 2号, 1956)。そして1963年には原色で9属18種を図説された (原色日本昆虫大図鑑, II巻, 甲虫篇)。その他に宮武陸夫氏の研究 (宝塚昆虫館報, No.56, 1949)があったがほとんどが中根博士の研究があるだけである (1963, 1977) (Kiesenwetter, H., 1874., Lewis, G., 1895の2論文も忘れられないものである)。佐藤正孝氏も研究を発表しておられる (1968)。

一番新しい日本産のこの類の綜説と言うのではないようであるが佐藤正孝氏が発表になった日本産のナガハナノミ科目録 (1983) では9属, 22種, 9亜種が記録されている。

ヒラタドロムシ科 (Psephenidae) の方の日本産に就いての綜説の方も今の所無いようである。たゞ前記中根博士の1948, 1952年の論文の中で Eubrianax 属のものは解説されているし (Lewis の報文にもこの属は出てくる), こちらの方は佐藤正孝氏によって生態を主体にその全体を概説された報文 (インセクトリウム 9巻, 5号, 1972) と日本産の目録が発表されている (日本産甲虫目録, No.6, 1976)。これによると日本産は3属11種3亜種と言うことになる。図説は中根博士によって8種が原色によってされている (1963)。

両科の同定に就いては上記の文献類によればまづ出来るものと考えられる。生態に就いては個々の種に就いての詳しい報告は無いように思われるが中根博士は外国での記録を中心にその生態に就いての解説をされているし (1948), 佐藤氏も水棲のもの、生態の一部を解説しておられる (1972)。この方面は今後の課題であろう。

さて兵庫県下のこの類はどうか。残念ながら今迄これらの両科に就いて兵庫県での分布などに就いての報告は見当たらないようである (部分的な記録はあるが)。

資料が大変少いが現時点での県下の記録をまとめておき度いと思う。

末文ながら本報文を作製するに当って一部の種の同

定を御願ひした中條道夫博士, 久松定成氏に厚く御礼申しあげる。

Family Ptilodactylidae ナガハナノミ科

1. *Epilichas flabellatus* (Kiesenwetter, 1874)

エダヒゲナガハナノミ

Kiesenwetter によって *Octoglossa* 属で Kiushiu, Nipon を産地に記載された種である (Berl. Ent. Zeitschr., X VIII, 1874, p.242)。Lewis は *Epilichas* 属の種で記録されると同時に “Nagasaki (very common in the flowers of the dogrose), Nara and Kobe” を産地に挙げられている (Ann. Mag. Nat. Hist., 6, X VI, 1895, p.100)。

日本の本州, 四国, 九州に分布している比較的多くいる種と言われている。奄美大島には subsp. *amamianus* Nakane, 1952, 青森県に subsp. *mutsuensis* Nakane, 1952 がいる。

頭・前胸が赤褐・腹面が黄褐色となり上翅だけ黒い型を var. *rubicollis* Nakane (Sci. Rep. Saikyo Univ., No.1, p.35, 1952) と言うが兵庫県下ではこの変種がほとんどの様である。もっと個体数を集めて見なくてはわからないが南側の海岸線ぞいでは全く見られなく、山間部の流れのある所にいるようである。図説は中根博士のものがある (日本昆虫図鑑, 1950., 原色日本昆虫大図鑑, II, 甲虫篇, 1963)。

産地: 川辺郡猪名川町槻並 [仲田, 1978, 1982]*。川西市笹部 [仲田, 1978, 1982]。西宮市甲東園, 三田市内 [戸沢, 1936]。Kobe [Lewis, 1895]。神戸市六甲山 (1ex., 4-VI-1966), 芦谷溪谷 (1ex., 5-VI-1982)。多可郡鳥羽 (1ex., 19-VII-1975)。神崎郡笠形山 (1ex., 12-VII-1975)。氷上郡 [山本, 1958]。美方郡扇ノ山 [辻, 1963., 辻, 岸田, 1952, 高橋, 1975]。var. *rubicollis* Nakane, 1952

産地: 多可郡鳥羽 (1ex., 5-VII-1975)。神崎郡笠形山 (1ex., 12-VI-1966), 大河内町川上 (1ex., 18-VI-

*産地で [] 中のものは記録からの引用, () 中のものは筆者採集, 標本所有のもの。

1977, 4exs., 2-VII-1977, 1ex., 23-VII-1977)。相生市三濃山(1ex., 8-VI-1974)。宍粟郡福知溪谷(1ex., 20-VI-1976), 音水(1ex., 25-VI-1972, 2exs., 24-VI-1973)。養父郡氷ノ山(1ex., 27-VII-1954)。

2. *Epilichas monticola brunneipennis* NaKane, 1963
クロツヤヒゲナガハナノミ

原亜種 *E. monticola* は中根博士によって "Kiso-Fukushima, Iwanadome near Kamikochi, Yunoyama Ise, Serio, Mt. Hiura, Bessho near Kyoto, Shima" の各地産で記載された種である(1952)。

この亜種は上翅が褐色を呈するもので同じく中根博士によって "Mt. Hyonosen, Hyogo, Oku-Mino, Mt. Daihi Kyoto" 産で記載された (Fragm. Coleop. Pars. 10, p. 42, 1963)。

図説は中根博士のものがある(1963)。

兵庫県下での記録は次のものを知るだけで余り分布状況がよくわからない。

産地: 養父郡氷ノ山[中根, 1953, 1956, 1963]。美方郡扇の山[辻, 1963., 辻, 岸田, 1972, 高橋, 1975]。

3. *Paralichas pectinatus* (Kiesenwetter, 1874)

ヒゲナガハナノミ

本種も Kiesenwetter が *Odontonyx* 属で "Hiogo, Nipon" を産地に記載された種である(1974)。Lewis は *Paralichas* 属の種に取扱われると共に "Nagasaki, Miyanoshta, Kobe, and Nikko" を産地に挙げられた(1895)。図説は中根博士のものがある(1950, 1963)。

日本の本州, 四国, 九州に分布し、主として水辺に産する種である。兵庫県下でも比較的多いが県北での産地が余り知られていない。

産地: 津名郡[林, 1974]。川西市笹部[仲田, 1978, 1982], 宝塚市北佐曾利(1ex., 13-V-1983, Y. Hachiya-leg.), Hiogo[Kiesenwetter, 1933], Kobe[Lewis, 1895], 神戸市御影[関, 1933], 鳥原(1ex., 7-V-1953, 1ex., 24-V-1953), 山の街(1ex., 30-V-1954, 1ex., 23-IX-1954), 丹生山(6exs., 5-V-1956), 藍那(4exs., 22-V-1978, 1ex., 18-V-1980), 木津(3♂, 1♀, 11-V-1984, 2♂, 1♀, 30-V-1984)。加東郡東条町森(11♂, 18-V-1984, 1♀, 7-VI-1984)。神崎郡大河内町川上(1ex., 7-V-1977)。飾磨郡家島[上田, 1981]。氷上郡[山本, 1958]。養父郡氷ノ山[高橋, 1959]。

4. *Pseudoepilichas niponicus* (Lewis, 1895)

クリイロヒゲナガハナノミ

Lewis によって "Nikko and Miyanoshta. Three males and one female" によって *Epilichas* 属で記載された(1895)。

濃褐色で光沢のある小形種である。

図説は中根博士によってされている(1950, 1963)。

日本の北海道, 本州, 四国, 九州に産する種である。山地の流れの近くに見られる種であり時に燈火にも飛来する。兵庫県下での記録は大変少い。

産地: 宍粟郡音水(1ex., 24-VI-1973)。養父郡氷ノ山(1ex., 21-VII-1958, S. Hisamatsu det.) [高橋, 1976]。

5. *Pseudoepilichas robustior* Nakane, 1963

オオクリイロヒゲナガハナノミ

本種は中根博士によって "Daihizan, Serio, Kurama, Hanase—Kyoto" の産地で記載された種である (Fragm. Coleop. Pars. 10/11, p. 42-43, 1963)。同博士によって図説されている。

兵庫県下での記録は次のものがあるだけである。

産地: 宍粟郡音水(1♀, 11-VI-1972, S. Hisamatsu det., in his coll.)。

6. *Drupeus vittipennis* Lewis, 1895

タテスジヒゲナガハナノミ

Lewis により "Kashiwagi, 15th June 1881, Three males" で記載された種である(1895)。

中根博士によって原色で図説されている(1963)。

北海道, 本州, 四国, 九州に分布している種であるが余り多くいる種ではないようである。兵庫県下からも次のようにしか記録出来ていない。

産地: 養父郡氷ノ山(1ex., 21-VIII-1958, M. Chajo. det.)。

7. *Ptilodactyla ramea* Lewis, 1875

コヒゲナガハナノミ

Lewis により "Nagasaki, Fukushima, Oiwake and Nara. Beaten from the dead branches of trees" の産地で記載された種である(1895)。中根博士による解説(1956), 図説(1963)されている。本州, 四国, 九州に分布し山地で得られ燈火に飛来することが多いと。

兵庫県下では割合いるように思われる。

産地: 川西市山原, 笹部[仲田, 1978, 1982]。神戸市布引(1ex., 17-V-1959), 太山寺(2exs., 6-V-1967)。神崎郡大河内町川上(1ex., 4-VI-1977)。相生市三濃山(1ex., 1-VI-1974)。宍粟郡福知溪谷(1ex.,

20-VI-1976)。水上郡(山本, 1958)。豊岡市妙楽寺(高橋, 1975)。養父郡大屋町田淵山(1ex., 25-VIII-1975, M. Uma leg.)。

8. *Macroebria lewisi* Nakane, 1952

チビマルヒゲナガハナノミ

中根博士によって J. E. A. Lewis が神戸の摩耶山で採集した 1♂(15-VII-1921) とその他に 1♂, Aizu-Wakamatsu., 1♀, Yakushima 産でもって記載された種である (Sci. Rep. Saikyo Univ., No. 1: 37-38, 1952)。同時に同博士による原色図説がある(1963)。

兵庫県下での記録は今の所このタイプ標本以外知られていない。

産地: 神戸市摩耶山(1♂, 15-VII-1921, J.E.A. Lewis leg., Nakane, 1952)。

9. *Grammeubria opaca* Kiesenwetter, 1874

チビヒゲナガハナノミ

Kiesenwetter によって長崎産で記載された(1874)。中根博士は新宮産で図説され(1948), さらに同博士による図説、解説がある(1950, 1956, 1963)。分布は本州, 四国, 九州で割合いるようである。水辺の葉上等にみられる。

兵庫県下でも個体数は多くなさそうだが広く分布しているように思われる。

産地: 川西市山原, 笹部(仲田, 1978, 1982)。神戸市布引(1ex., 17-V-1959), 太山寺(2exs., 6-V-1967), 芦谷溪谷(1ex., 11-VI-1982)。神崎郡大河内町川上(1ex., 4-VI-1977)。相生市三濃山(1ex., 1-VI-1974)。宍粟郡福知溪谷(1ex., 20-VI-1976)。水上郡(山本, 1958)。豊岡市妙楽寺(高橋, 1975)。養父郡大屋町田淵山(1ex., 5-VIII-1975, M. Uma leg.)。

Family Psephenidae ヒラタドロムシ科

1. *Eubrianax granicollis* Lewis, 1895

クシヒゲマルヒラタドロムシ

Lewis により "Nagasaki and Subashiri. Eight examples." として図入りで記載された種である (Ann. Mag. Nat. Hist., vi, 16, p.104, pl.6, fig. 2, 1895)。三輪勇四郎博士が図示され (日本甲虫分類学, p. 133, 1938), 中根博士も図示されている (宝塚昆虫館報, No. 45, p. 13-14, 1948)。尚この中で *E. ramicornis* として図説されたのもこの種のことであり, 中根, 1952)。さらに日本昆虫図鑑 (p. 1108, f. 3176, 1950), 原色日本昆虫大図鑑, II, 甲虫篇 (pl. 72, f. 8, p. 143, 19

63) にも図説されている。

日本の本州, 四国, 九州に産し, 幼虫は水棲で板状。5-6月頃河辺に見られる種である。兵庫県下では余り記録がない。

産地: 川西市笹部(仲田, 1978, 1982)。多可郡鳥羽(1ex., 8-V-1976)。美方郡扇ノ山(辻, 1963., 辻, 岸田, 1972)。

2. *Eubrianax pellucidus* Lewis, 1895

ヒメヒラタドロムシ

本種も Lewis により "Fukushima, 26th July, 1881, Two examples, both males" として記載された種である(1895)。中根博士によって図説されている(1948, 1963)。

前種に良く似た種であるが前胸は背面中央に太い暗色縦帯を残して橙黄色。觸角, 脚は濃褐色で腿節大部分淡色である。♀は大形。分布は本州, 四国。

山地の水流近くでえられると言うが県下での記録は余り無い。

産地: 神戸市五社 (5 exs., 28-VI-1959)。養父郡氷の山 (1ex., 2-VIII-1953, 3exs., 27-VII-1956)。

3. *Eubrianax ramicornis* Kiesenwetter, 1874

マルヒラタドロムシ

Kiesenwetter によって Nagasaki, Kiushiu を産地に記載された種である (Berl. Ent. Zeit., 18, p. 247, 1874)。

図説は中根博士の原色のものがある(1963)。granicollis に似るが脚は黄褐色, 前胸背前縁は弧状をなし, 点刻は細かくて密ではなく, ♀の觸角分枝はより長い。本州, 四国, 九州に分布し, 本州東北部のものは觸角が濃黄褐色を呈し subsp. *brunneicornis* Nakane (Sci. Rep. Saikyo Univ., 1, p. 40, 1952) と別けられている。

兵庫県下では本種の方が *graicollis* より多くいるようである。

産地: 川西市笹部(仲田, 1978, 1982)。神戸市太山寺 (2exs., 6-V-1957)。多可郡三谷 (1ex., 24-V-1975, 4exs., 8-VII-1975)。印南郡法華山一乗寺 (1ex., 23-V-1965)。水上郡(山本, 1958)。養父郡氷の山 (高橋, 1959)。

4. *Mataeosephenus japonicus* (Matsumura, 1916)

ヒラタドロムシ

松村松年博士によって Gifu, Kyoto 産で *Betelmis* 属の種として記載された種 (Ins. World, 20, p. 5, 1916)。河野広道博士の図説 (日本昆虫図鑑, p. 1106, f. 31

69, 1950), 中根博士の図説(1963), その他割合多く図説があるので一般に良く知られている種である。分布は本州, 四国, 九州である。

兵庫県下でも広く分布し割合普通に得られる。幼虫は板状で水棲である。

産地: 三原郡猪ノ鼻川中流域〔久松, 1974〕。川西市見野, 大和〔仲田, 1978, 1982〕。神戸市鳥原 (1ex., 12-VI-1976), 垂水〔竹中, 1935〕。加西市畑 (1ex., 29-VI-1974, 2exs., 13-VIII-1974, 3exs., 27-VII-1974)。三木市内 (1ex., 28-VIII-1978)。加古川流域〔西村, 原, 1974〕。多紀郡篠山〔後藤, 1963〕。氷上郡〔山本, 1952, 1958〕。出石郡出石町暮坂〔高橋, 1963〕。豊岡市堀川橋〔高橋, 1975〕。城崎郡円山川流域〔西村他, 1975〕。

5. *Psephenoides japonicus* Masuda, 1935

マスダチビヒラタドロムシ

Masuda 氏により Kyoto 産で記載された種である (Trans. Kansai Ent. Soc. No.6, p.9, 1935)。

中根博士によって図説されている(1963)が特異な形状をしているので同定には困らないと考えられる。兵庫県下での記録は大変少ない。

産地: 川西市大和〔仲田, 1979, 1982〕。加古川流域〔西村, 東, 1974〕。氷上郡柏原〔山本, 1952, 1958〕。城崎郡円山川水系〔西村他, 1975〕。

以上兵庫県産ナガハナノミ科7属9種, ヒラタドロムシ科3属5種を記録したが始めに記したように全く資料不足で個々の種の県下の分布状況も良くわからないし、全般的にももっと分布種が他にもいそうに思われるが一般に水棲甲虫関係の調査が出来ていないように考えられこの方面での今後の調査の必要性が痛感される。

(1984年11月)

(S.45: Toshio Takahashi 神戸市)



兵庫県に於けるエゾスジグロシロチョウの新しい産地

広畑 政 己

兵庫県に於けるエゾスジグロシロチョウの分布については広畑(1981)にその概要を報告しているが、その後の調査によって4ヶ所の新しい産地を発見したので報告しておきたい。

これまで県下では40数ヶ所の産地が知られているが、本種は近似種のスジグロシロチョウと酷似するので、スジグロシロチョウとして採集された個体の中に本種が混っているケースも多く、もっと多くの産地があるものと思われる。

この度見つかったのは市川流域の大河内町、福崎町、市川町の各町で、市川町小室、大河内町淵では市川の河原がその生息場所となっている。

県下では山地より平地の方が産地が多く、河原というのは上記2産地の他には同じ市川河原の生野町川尻がある。これらの産地では川原に生育するアブラナ科植物(スズシロソウと思われるが未同定)が食草となっている。このアブラナ科の食草は市川上流の生野町から中流の福崎町まで確認しており、たぶん下流までであると思われるので、姫路までの市川の河原をよく調べれば産地も発見できるとと思われる。

新しい産地の内、他の2ヶ所は福崎町の山崎と大倉山で、ここではスジグロシロチョウと混生している。山崎では採集している22頭中ほぼ3分の1の8頭が本種で、大倉山ではそれぞれ1頭づつ採集されている。これらの産地はいずれも標高100m以下の平地である。

1化の発生は早く、上記産地の内福崎町では3月下旬に始まり、4月の中旬まで採集記録がある。市川町小室、大河内町淵では5月上旬にも採集しているのでだらだらと発生するようである。発表に際し、採集記録を御提供いただいた石井為久氏と調査に御協力下さった近藤伸一氏にお礼申し上げる。

〈採集記録〉

神崎郡大河内町淵	2♂	29-IV-1984	広畑政己
市川町小室	1♂1♀	3-V-1984	広畑政己
福崎町山崎	3♂	28-IV-1982	石井為久
大倉山	1♂	6-IV-1975	石井為久

〈参考文献〉

広畑政己(1981)兵庫県産蝶類分布資料(1) てんとうむし(7): 32-33
(S28: Masami Hirohata 〒671-22 姫路市)

相生市で採集したカミキリムシ

米村和繁, 米村和也, 米村理子

相生市内で採集したカミキリ虫と市内であつめた材より羽脱したカミキリ虫の記録を発表いたします。

期間は1984年11月より1985年8月まで、記録(材)1部以前に採集したものも含まれます。

採集者は3人で、期間も短かいので完ぺきとはいえません。今後も採集をつづけますが、期待がもてると思います。100種目標に進めていきたいと思っています。(他の採集者のものは含まれていません)

採集者: 米村和繁, 長男・和也, 長女・理子

1984年11月より1985年8月まで、材より羽脱したカミキリ

- (1) こなら
タカサゴシロカミキリ、ミドリカミキリ、エグリトラカミキリ、ヤツボシハナカミキリ、キイロトラカミキリ
- (2) ひめやしゅぶし
キオビトラカミキリ、エグリトラカミキリ、クモガタケシカミキリ、ヤツボシハナカミキリ、ヒメクロトラカミキリ、タカサゴシロカミキリ、アトモンマルケシカミキリ
- (3) けやき
エグリトラカミキリ、キンケトラカミキリ、ナガゴマフカミキリ、クワサビカミキリ、アメイロカミキリ、キスジトラカミキリ、
- (4) にせあかしや
エグリトラカミキリ、クモガタケシカミキリ、ワモンサビカミキリ、アトジロサビカミキリ、アトモンマルケシカミキリ、シラオビゴマフケシカミキリ
- (4) あかめがしわ
ヒトオビアラゲカミキリ、ミドリカミキリ、キイロトラカミキリ、エグリトラカミキリ、アトモンサビカミキリ、アトモンマルケシカミキリ、ケシカミキリ、ヤハズカミキリ、アメイロカミキリ、クモガタケシカミキリ
- (5) おおばやしゅぶし
ヤツボシハナカミキリ、エグリトラカミキリ、ヤハズカミキリ、カタシロゴマフカミキリ、タカサゴシロカミキリ

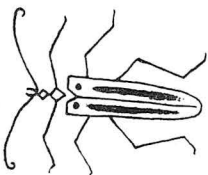
- (6) はんのき
ヨツスジトラカミキリ、ヒメクロトラカミキリ、ナガゴマフカミキリ
- (7) むくげ
アトジロサビカミキリ、ラミーカミキリ
- (8) すぎ
ヒメスギカミキリ
- (9) やなぎ類(生木)及び 枯枝
クワカミキリ
- (10) えのき
アトジロサビカミキリ、キスジトラカミキリ、アトモンサビカミキリ
- (11) かきのき
アトモンケシカミキリ、アトジロサビカミキリ、アトモンマルケシカミキリ、ヨツスジトラカミキリ、ナガゴマフカミキリ
- (12) のぶどう
アカネトラカミキリ、アカネカミキリ、シロオビカミキリ
- (13) くわ
ニイジマチビカミキリ
- (14) くり
ヒメクロトラカミキリ、ヒメヒゲナガカミキリ、アトモンマルケシカミキリ、ミドリカミキリ、ヤツボシハナカミキリ、ケシカミキリ、ヤマトチビコバネ、タカサゴシロカミキリ、エグリトラカミキリ
- (15) くさぎ
アトモンマルケシカミキリ、アトジロサビカミキリ、ケブトハナカミキリ、クモガタケシカミキリ、ヨツスジトラカミキリ、ナガゴマフカミキリ
- (16) のぐるみ
ミドリカミキリ、キイロトラカミキリ、ヨツスジトラカミキリ、ヤツボシハナカミキリ、ピロウドカミキリ、タカサゴシロカミキリ、シラホシカミキリ、エグリトラカミキリ
- (17) やまはぜ
ヨツキボシカミキリ、アトモンマルケシカミキリ、エグリトラカミキリ、ナガゴマフカミキリ、ヒメクロトラカミキリ、キスジトラカミキリ

- (18) やまもも
ヨツスジトラカミキリ
- (19) うめ
アトモンマルケシカミキリ、ヨツスジトラカミキリ
- (20) あべまき
ナガゴマフカミキリ、ヤツボシハナカミキリ、キ
イロトラカミキリ、エグリトラカミキリ、ミドリ
カミキリ、セミスジコブヒゲカミキリ、シラホシ
カミキリ
- (21) かくれみの
アトジロサビカミキリ、ヨツスジトラカミキリ、
- (22) あらかし
ヒメクロトラカミキリ、ズマルトラカミキリ、ミ
ドリカミキリ、ヤハズカミキリ、ケシカミキリ、
エグリトラカミキリ、ナガゴマフカミキリ、アト
モンマルケシカミキリ
- (23) ひめりんご
ルリカミキリ(生木)、エグリトラカミキリ(枯枝)
- (24) ねむのき
ホタルカミキリ、アトジロサビカミキリ
- (25) のぐみ
ヤハズカミキリ
- (26) いぬびわ
トガリシロオビカミキリ、アトジロサビカミキリ、
キボシカミキリ、アトモンマルケシカミキリ、タ
カサゴシロカミキリ、クモガタケシカミキリ
- (27) 山ざくら
カタシロゴマフカミキリ、ナガゴマフカミキリ
- (28) 山ふじ
ワモンサビカミキリ、ケシカミキリ、アトジロサ
ビカミキリ、カッコウメダカカミキリ、トガリシ
ロオビカミキリ、アトモンマルケシカミキリ、ナ
ガゴマフカミキリ
- (29) 山はぎ
エグリトラカミキリ、アトモンマルケシカミキリ
アトジロサビカミキリ、ホソキリングカミキリ?
(さなぎをありによってころされる)
- (30) いろはもみじ
ホタルカミキリ
- (31) にれげやき (室津にて採集)
ズマルトラカミキリ、ケシカミキリ
- (32) やまならし
クワカミキリ
- (33) くず
トガリシロオビカミキリ、ワモンサビカミキリ、
アトジロサビカミキリ
- (34) うるし
タカサゴシロカミキリ、ナガゴマフカミキリ、ヤ
ツボシハナカミキリ、クモガタケシカミキリ、ア
トモンマルケシカミキリ
- (35) 黒まつ
ツヤケシハナカミキリ
- (36) 赤松
ツヤケシハナカミキリ、マツノマダラカミキリ、
セミスジコブヒゲカミキリ、ナカバヤシモモブト
カミキリ
- (37) はちく (竹)
ベニカミキリ、ハイイロヤハズカミキリ
(材で生木と記入していないものは枯れたもの)
- 相生市内で採集したもの
- 1 ○アカネカミキリ
 - 2 アカネトラカミキリ
 - 3 アカハナカミキリ
 - 4 ○アトジロサビカミキリ
 - 5 ○アトモンマルケシカミキリ
 - 6 ○アトモンサビカミキリ
 - 7 ○アメイロカミキリ
 - 8 イタヤカミキリ
 - 9 ○エグリトラカミキリ
 - 10 オオヨツスジハナカミキリ
 - 11 ○カッコウメダカカミキリ
 - 12 ○カタシロゴマフカミキリ
 - 13 ○キイロトラカミキリ
 - 14 キクスイモドクカミキリ
 - 15 キクスイカミキリ
 - 16 ○キボシカミキリ
 - 17 ○キンケトラカミキリ
 - 18 ○クワカミキリ
 - 19 クロカミキリ
 - 20 ○クワサビカミキリ
 - 21 ○ケシカミキリ
 - 22 ○ケプトハナカミキリ
 - 23 ゴマフカミキリ
 - 24 シロスジカミキリ
 - 25 ○シロオビゴマフケシカミキリ
 - 26 ○シロオビカミキリ
 - 27 ○ズマルトラカミキリ
 - 28 センノカミキリ
 - 29 ○セミスジコブヒゲカミキリ
 - 30 ○タカサゴシロカミキリ
 - 31 チャイロホソヒラタカミキリ

- 32○ ツヤケシハナカミキリ
- 33○ シラホシカミキリ
- 34○ トガリシロオビカミキリ
- 35○ クモガタケシカミキリ
- 36 ゴマグラカミキリ
- 37○ ナカバヤシモブトカミキリ
- 38○ ナガゴマフカミキリ
- 39○ ニイジマチビカミキリ
- 40 ニセリングガミキリ
- 41 ニセシラホシカミキリ
- 42 ○ハイイロヤハズカミキリ
- 43 ○ヒメスギカミキリ
- 44 ヒメリングガミキリ
- 45 ○ヒトオビアラゲカミキリ
- 46 ○ヒメクロトラカミキリ
- 47 ヒメコブヤハズカミキリ
- 48 ヘリグロリングガミキリ
- 49○ベニカミキリ
- 50○ホタルカミキリ
- 51 ホソキリングガミキリ
- 52○マツノマグラカミキリ
- 53○ミドリカミキリ
- 54 ムナクボカミキリ
- 55○ヒメヒゲナガカミキリ
- 56○ヨツキボシカミキリ
- 57○ヨツスジトラカミキリ
- 58○ヤツボシハナカミキリ
- 59○ヤハズカミキリ
- 60○ヤマトチビコバナカミキリ
- 61○ラミーカミキリ
- 62 リングガミキリ
- 63○ルリカミキリ
- 64○ワモンサビカミキリ
- 65 ノコギリカミキリ
- 66○ピロウドカミキリ
- 67 ハンノキカミキリ

(○印は材より羽脱した種)

(S.29: Kazushige Yonemura 相生市)

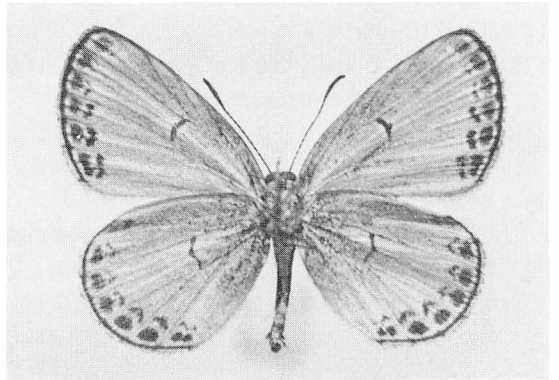


ヤマトシジミ斑紋異常個体を採集

高柳 栄一

1986年9月25日、揖保郡揖保川町馬場において本種のパイパン型1♂を採集したので報告する。当日は当地にて、シルビアシジミの産卵を観察中に採集したもので、飛翔中は白っぽい印象を受けた。なお、写真撮影は木村三郎氏にお世話になった。

(S73: Eiichi Takayanagi 姫路市)



表紙の説明

水草に翅を休めるベッコウトンボ

相坂耕作 文
斉藤和郎 写真

絶滅寸前であり、現在近畿地方では兵庫県下でしか生息していない珍しいトンボ。シオカラトンボくらいの中型トンボで、雄は黒褐色、雌は淡褐色、翅の斑紋がベッコウ色をしている。

本種は、植生の変化、水質の汚濁にも非常に弱く、わが国では最も絶滅の可能性の高い種類とされるため強力な保護対策が必要とされている。

県下でも10年余り前までは、加古川流域などの広い地域で見られたが、開発や農業の影響で、ほぼ全滅状態となった。しかし幸いにも東播磨地方の小野市付近で現在もかなりの飛翔がみられることは喜ばしいことと思う。

小野市付近に生息するベッコウトンボは、4月中、下旬から羽化が始まり、6月中旬頃まで成虫が見られる。最盛期は5月上旬頃。なおこの産地もいずれ埋立て、水質変化またヤゴが生息する特殊な環境（池底の砂や泥が適当にあるかなど）絶滅する可能性に枚挙にいとまがない。

兵庫県に於けるミドリシジミ類3種の 雌の斑紋について

広畑 政 己

はじめに

ミドリシジミ類の♀の前翅表にはいろいろな斑紋が現れる。大きく分けると、無紋のO型、中室端に橙色紋が現れるA型、1b室と中室に青色紋が現れるB型、橙色紋と青色紋が両方に現れるAB型の4つに分けられる。中には橙色紋が白くなるもの(AW型)や淡色のぼやけた紋(OA型)のものもあるので、はっきり4つの型に分けることは困難であるが、このように分けると、その地域での斑紋の傾向がよくわかる。そこで、兵庫県産のアイノミドリシジミ、メスアカミドリシジミ、ミドリシジミの3種についての斑紋の型を前述の通り4つのパターンに分け、まとめてみた。

ただ、この資料は限られた地域の、それも筆者の検視した数少ない個体を集計したもので、傾向として御覧いただき、今後多くの産地の個体の傾向値を加えていただくことにより不備を補いたいと願う次第である。この小文をまとめるに当り木村三郎、岩村巖、佐々木薫、石井為久、相坂耕作、黒田収、徳岡正己、松尾隆人、近藤伸一、高嶋明、森下泰治の諸氏には何かと御協力いただいた。ここに記して感謝の意を申し上げる。

1. ミドリシジミの雌の斑紋

本種の♀は北海道では必ず青色紋が現われ、B型あるいはAB型が多い¹⁾。また、東北でも青色斑が現れる個体が多いがO型がまじり、中部以西の本州ではO型が多く、B型はO型やA型に比較して少なくなる。九州では再び、必ずB型が現れるようである¹⁾²⁾。

県下に於てはこれまでO型が多いことは周知のことであるが、どの地域でどれだけウェートを占めるかということは明らかにされていなかった。そこで、筆者の手の届く限りの産地の個体を検視し、集計する作業に入ったわけであるが、O型にするかA型にするか判断に苦しむような個体もあり、A型に於ても斑紋が1つか2つかははっきりしないもの、また、斑紋がほんの少しある程度のもなど区分するには極めて困難であった。しかし、4つに分けるためには、いずれかに入れなければならないので、OA型はO型に分類し、青色紋がたとえ少しでもあるものはB型として上げた。

従って、明確に基準がないまま、筆者の判断で分類しているので、あいまいな資料となっていることを御了承いただきたい。また、兵庫県でも南西部だけのもので、北部、東部はどのような斑紋の傾向があるのか不明である。

ここでまとめた南西部の傾向としては、O型が約50.3%と一番多く、B型が35.1%とこれに続き、A型とAB型はほぼ同じ比率の7.6%と7.0%となっている。B型AB型については、はっきりと現れた個体もあるが全般的に不鮮明である。また、産地別にながめると際立った差異は認められないが、姫路市砥堀ではAB斑が現われたものは1頭で、夢前町菅生潤ではA斑は31頭中全く現われていない。これらの地域ではO型とB型が主力のようである。また、相生市の光明山、龍泉でAB型がなく、O型、A型、B型の3型となっている。AB型の比較的多い地域は、社町下久米と福崎町東田原で、下久米が14%、東田原が12%の比率で現われている。

いずれの産地も調べた個体数が少なく、この通りではないかもしれないが、さほど違いはないものと思われる。

2. アイノミドリシジミの雌の斑紋

中部地方以北の♀はA型が普通で、稀にAB型、O型が現われる¹⁾。関西以西ではAB型が多く、しかも斑紋が大きく鮮明である³⁾。稀にB型も得られる¹⁾。九州産のB斑、中国、四国産のA斑は特に大きく発達することが知られている³⁾。

前記のごとく、兵庫県に於てはAB型の個体が普通で、調べた個体88頭中93.2%がAB型で残り6.8%がA型となっており、O型、B型はない。A斑は2つ現われた個体が4頭、3つ現れた個体が2頭あるが、1つだけの個体はない。B斑もヒサマツミドリシジミのようにはっきりしたものから1b室に不明瞭に出たものまでいろいろである。おおまかに分けると、はっきりした個体とそうでない個体は半々で、はっきりした個体はA斑も大きく鮮明である。大屋町横行産は検視した個体も少ないが、A型の個体は16頭中発見できなかった。また、88頭中、後翅表後縁角部に橙色斑が現れた個体が関宮町福定と大久保でそれぞれ1頭づつあった。

A斑B斑の出現の状態をもとに小さく分けると10数型になるが、A斑は2型とB斑ははっきりしたものど淡いものの2型に分け表2にしている。検視した産地の数、個体数も少ないので、前述以外にO型、B型があるかもしれないが、傾向としてはAB型が主力となっている。

表1. 兵庫県南西部に於けるミドリシジミ雌の斑紋







産地名	雌前翅斑紋							計
	型	O 型	A 型		B 型	A B 型		
相生市光明山		10	1	1	5			17
〃 龍泉		10	1		8			19
姫路市御立		8	1		4	1	1	15
〃 砥堀		10			8	1		19
福崎町東田原		10		4	9	1	2	26
社町下久米		14	1	4	17	3	3	42
西脇市塚口		2						2
夢前町菅生潤		22			9			31
斑紋別計		86	4	9	60	6	6	171
型別計		86	13		60	12		171
%		50.3	7.6		35.1	7.0		100

表2. 兵庫県に於けるアイノミドリシジミの雌の斑紋








産地名	雌の斑紋							計	
	型	A 型			A B 型				
生野町枋原			1	4		11		16	
関宮町福定		3	1	18	5	8	5	40	1
〃 大久保		1			1	9	1	12	1
一宮町縦ノ木林道						2		2	
大屋町横行				9	3	2	2	16	
温泉町扇ノ山					2			2	
斑紋別計		4	2	31	11	32	8	88	
型別計		6			82			88	
%		6.8			93.2			100	

表3. 兵庫県に於けるメスアカミドリシジミの雌の斑紋

産地名	雌の斑紋					計		
一宮町 福知			56	30		86	3	
〃 草木	2		12	4		18		
〃 百千家満			8	5		13		
神崎町 根宇野			2	1		3		
〃 作畑新田			7	2		9		
山崎町 梯			20	9		29		
〃 河原山			9	7		16		
夢前町 雪彦山			6	1		7		
佐用町 上石井				1		1		
千種町 木地山			1	1		2		
〃 三室山					1	1		
波賀町 赤西			1	4		5		
生野町 柄原	1		47	27		75		
加美町 三国山			2			2		
関宮町 杉ヶ沢			10	11		21	2	1
〃 福定			6	5		11		
大河内町 砥峰			5			5		
〃 深山				2		2		
山東町 与布土			1			1		
計	3		193	110	1	307	5	1
%	1		62.9	35.8	0.3	100		

3. メスアカミドリシジミの雌の斑紋

本種の雌の前翅表の橙色斑はクライシ現象を示し、北海道産では大きく発達し、南西日本では小さくなり、九州では消失する個体がある³⁾。また、中部地方より北の産地のものの橙色斑の発達した個体は、後翅表後角部付近や中室付近に小さい橙色斑が現われることがあ

る³⁾。これが国内の本種の斑紋の傾向であるが、県下ではどのような斑紋の個体があるのかを各産地ごとにO型とA型を4つに分け、5つのパターンに分類してみた。

前種2種同様、いざ分けるとなると、どの型に分類するか迷う個体も多かったが、橙色斑として認めにくい程淡い個体については1ランク下げて集計している。

檢視した 307個体の中ではA斑が発達し、3つの橙色斑がつかなくなったような個体は千種町三室山産の1頭だけで、その他は橙色斑の発達は弱く2ヶ~3ヶの個体がほとんどである。また、橙色斑が1ヶの個体は19産地の中ではなく、一宮町草木と生野町柄原では0型が見られた。これは307個体中わずか3頭である。

橙色斑が2つの個体と3つの個体では2つが62.9%と比率で多い。珍しいところでは後翅表後角部に橙色斑が現れた個体が杉ヶ沢で2頭、福知で3頭ある4)。また、後翅中室端に現われた個体が1頭見られた。

〈参考文献〉

- 1. 藤岡知夫(1972)図説日本の蝶 ニューサイエンス社 東京
- 2. 藤岡知夫(1975)日本産蝶類大図鑑 講談社 東京
- 3. 川副昭人・若林守男(1976)原色日本蝶類図鑑 大坂
- 4. 花岡 正(1981)メスアカミドリシジミ雌の斑紋 てんとうむし(7):39

(S28:Masami Hirohata 〒671-22 姫路市)

フタスジカタビロハナカミキリ

花 岡 正

兵庫県下の新採集地の状況を報告する。

春に出現するギフチョウの様に産地が限定され、発生期間も短かく美麗なので人気の高い大型のハナカミキリである。

①産地：扇ノ山、赤西溪谷、音水溪谷、氷ノ山山系で採集されているが、筆者は藤無山山系でも採集した。1985年5月12日、15:00位に宍粟郡波賀町道谷、藤無山山系にて2♂♂1♀をヤマシャクヤクの花の中から採集した。

②出現期：5月初旬より、標高の低い赤西溪谷から音水溪谷、藤無山、氷ノ山山系へと出現してくる。

6月初旬まで見られる年もある。

③採集状況：ヤマシャクヤクに訪花中の個体が多いが中には葉上、根際、飛行中(飛ぶ早さはカナブン位いで羽音も高い) 変わった所ではタニウツギのビューティングでも採集されている。ヤマシャクヤクの花の中では交尾中のものなどペアで採集される個体が多い、最高9頭まで採集した。

(S.19:Tadashi Hanaoka 揖保郡太子町)

初冬の蝶の一日 (セイタカアワダチソウの花に集まる蝶)

近 藤 伸 一

1985年11月3日加古川市北在家の空地で1日中蝶の観察を行った。観察場所は加古川市役所の南に隣接した縦10m横100m程度の広さの野外駐車場で、中央部に砂利が敷かれ、ヨモギ、ヌスビトハギ、芝、ススキ、イタドリ、ギシギシ、ニワホコリ、スズメノヒエ、セイタカアワダチソウ、カタバミ等が周囲をとりかこむように繁っていた。当日は快晴で風もなく、セイタカアワダチソウがちょうど満開で、この花に蝶が1日中吸蜜に訪れた。

コンクリート建築物やアスファルト道路に覆われた市街地では、このような空地が昆虫にとって大切なオアシスとなっている。

20分間隔でこの空地进行を1周し、観察した蝶は7種延べ152匹であった。時間ごとの蝶の活動の様子を飛行中、吸蜜中、静止と3種類に分け次表にした。キチョウとチャバネセセリが吸蜜に特に熱心であった。蝶の種類ごとに、活動時間帯、吸蜜の時間帯が少し異なるようである。

蝶の活動の様子 1985.11.3.

	ヤマトシジミ	ヘニンジミ	モンシロチョウ	キチョウ	モンキチョウ	カタタハ	チャバネセセリ	計
10:00	△3 △1	×1	○2					6
:20		×1	△2	△1	○1		○2	6
:40	○5 ×1			△2			△1	8
11:00	○1	×1		△2			△2 △1	5
:20	×2 △4		△1	△1			△2	6
:40	△2		△1	△2			△3	6
12:00	○6	△1	○2 △2	○1 △1	○1			10
:40	○4	△1	○1 △1	○1 △1				8
13:00	○1	△1	○2 △1	△1			×2 △2	6
:20	○4 ×2		○2 △2	○1			○1 △4	8
:40	×1	×1	○3	○1			△3	6
14:00	○2	○1	○1	○1			×1	6
:20	○1	△1	○1	○1				5
:40	○6 ×1		○1 △2				×1	8
15:00	○7							7
:20	○2 ×2					×1		5
:40	×1							1
計	△51 △15	○1 △4 △4	○17 △11 △0	○5 △11 △0	○2	×1	○7 △18 ×6	81

(S62: Shinichi Kondo 神戸市)

有馬の蛾より

岡村 八郎、森 博

はじめに：

筆者の一人、森 博は神戸市北区有馬町に永住しているが、1960～1961(昭和35～36年)を中心として数年間、有馬温泉街の街燈に群れる蛾を採集した。私(岡村)は森氏からいろいろ御教授をうけ、彼が今まで誌上に発表されたことは殆どない由を承っていたが、彼は最近病身で、凡そ500種に及ぶ標本も、充分に同定できないまゝ古くなったのもあり、全部の目録を作るのも大変なので、とりあえず森氏の採集された中で、御自まんの種を紹介されたいとお願いしたところ、北隆館の昆虫大図鑑(1)、及び保育社の日本蛾類図鑑上、下を参照して、比較的少ないとされる36種を選んで私に通信してこられた。

こゝにそれらの種を列記して同好者の参考に供する。順序は北隆館の昆虫大図鑑(1)に従った。

スズメガ科

1. *Oxyambulyx ochracea* Butler.

ホソバスズメ、1960年7月21日採集 (以下年月日
簡略)

2. *Oxyambulyx schauffel bergeri* Bremer & Grey

モンホソバスズメ 61. 7. 30

3. *Smerinthus tokyonis* Matsumura

コウチスズメ 61. 7. 22

ヒトリガ科

4. *Spilosoma bifasciata* Butler

フタスジヒトリ 60. 6. 18

ヤガ科

5. *Cryphia obscura* Warren

キノコヨトウ 60. 6. 71. 8. 22

6. *Helicoverpa assulta* Guenée

タバコガ 60. 6. 26

7. *Ochopleura praecurrens* Staudinger

オオホソアオバヤガ 60. 7. 21

8. *Xestia stupenda* Butler

マエキヤガ 60. 9. 21

9. *Hadena aberrans* Eversmann

コハイイロヨトウ 60. 8. 23

10. *Leucania salebosa* Butler

オオスジシロキヨトウ 60. 8. 18

11. *Actinotia inter mediata* Bremer

コモクメヨトウ 61. 7. 1

12. *Dypterygia caliginosa* Walker

クロモクメモトウ 61. 6. 12

13. *Bambusiphila vulgaris* Butler

ハジマヨトウ 60. 8. 16

14. *Polyphaenis subviridis* Butler

ウスアオヨトウ 60. 6. 25

15. *Amphipyra tripartita* Butler

シロスジカラスヨトウ

16. *Mormo muscivivens* Butler

アオバセダカヨトウ 60. 6. 6

17. *Dysmilichia gemella* Leech

モンオビヒメヨトウ 63. 9. 17

18. *Athetis albisignata* Oberthür

シロテンウスグロヨトウ 60. 8. 8

19. *Sphragifera biplaaga* Walker

コマルモンシロガ 60. 7. 27

20. *Artena dotata* Fabricius

ツキワクチバ 60. 8. 22

21. *Ophiusa olista* Swinboe

コヘリグロクチバ 61. 7. 16

22. *Poralleria maturata* Walker

ムラサキアブトクチバ 60. 8. 16

23. *Oraesia emarginata* Fabricius

ヒメエグリバ 61. 9. 17

24. *Synpnoides hercules* Butler

アヤシラフクチバ 61. 7. 1

シャチホコガ科

25. *Cerura menciana* Moore

オオモクメシャチホコ 60. 9. 3

26. *Nerica bipartita* Butler

ナカスジシャチホコ ?

ドクガ科

27. *Lymantria xylyna* Swinhoe

アエグロマイマイ ?

28. *Euprotis curvata* Wileman

マガリキドクガ 59. 7. 19, 60. 9. 16

シャクガ科

29. *Geometra glaucavia* Ménétrés

- コシロオビアオシヤク 63. 6. 17
 30. *Gelasma ambigua* Butler
 ツバメアオシヤク 60. 8. 2
 31. *Jodis dentifascia* Warren
 オオナミガタアオシヤク 60. 6. 16
 32. *Carige irrorata* Butler
 ヒロバトガリナミシヤク 60. 6. 23
 33. *Fascellina chromataria* Walker
 エグリエダシヤク 60. 7. 23

マドガ科

34. *Herdonia margarita* Inoue
 ギンスジオオマドガ(モリヤママドガ) 60. 7. 9

メイガ科

35. *Polythlipta liguidalis* Leech
 ツマグロシロノメイガ(マダラシロオオノメイガ)
 61. 5. 31
 36. *Sitochrosapalealis* Denis & Schiffer
 müller
 ウラグロシロノメイガ ?

あとがき：

十分に他者の採集目録や文献を参考にしていないので、現在の珍しい種とくいちがう所もあると思うが、森氏の御苦勞の一端を紹介した。

森は同好者の御質問や御意見を期待するので、お気づきの点は本誌や森 博宅へ御通信下さい。

(文責：岡村)

参考文献：

- 原色昆虫大図鑑 I (蝶・蛾) 篇：北隆館
 原色日本蛾類図鑑上, 下. : 保育社
 日本産蛾類大図鑑 I, II : 講談社

筆者：

岡村八郎：〒658 神戸市
 (大, 14年生) Tel, 神戸(078) 851-
 森 博：〒651-14 神戸市
 (明, 44年生)



タテハチョウ科の習生の変わった 越冬幼虫 2例

木村 三郎

1. 遅くまで葉上にいたゴマダラチョウ

自宅庭に植えてあるエノキで、例年なら11月の中旬には、すべての幼虫が木の下に降りているのが観察されるのに、ほとんどの葉が落葉した1986年11月10日、下枝に2頭の幼虫が、ミスジチョウの越冬幼虫のように葉枝基部に吐糸して葉と枝とをしっかりと結びつけて中央部に静止しているのが観察できた。

その後もずっと見ていたが、霜や氷が張ったにもかかわらず遅くまで樹上に静止していたのが12月12日まで見られたので、気温とともに報告しておきます。

11月1日～5日		最低気温 3℃	最高気温 21℃
6日～10日	観察日○	2	19
11日～15日	○	2	17
16日～20日	○	2	17
21日～25日	○	2.5	16
26日～30日	○	-0.5	12
12月1日～5日	○	-0.6	13.5
6日～10日	○	-1	13
11日～15日	○	0	13
16日～20日		-1.5	13.5

2. 木のくぼみにいたミスジチョウ

1987年1月4日、蝶友の近藤伸一氏、谷川勝彦氏ら4人で生野方面へゼフ卵とミスジチョウの越冬幼虫の調査に行った時、生野ゴルフ場附近にてカエデの樹上の枯れ葉上で越冬している個体を捜していたところ、木のくぼみにたまった落葉を見ながら、ふと思いついて(ゴマダラチョウであれば、こういう場所にも越冬幼虫が観察できるのだがと言いながら)なにげなく、葉をめくって見ると偶然にも樹皮と落葉を糸でからめながら、幼虫を見つけることが出来た。附近のカエデも調らべて見ると、もう一例谷川勝彦氏が確認採集された。ミスジチョウについてはこのような事例は報告がないと思われるので、報告しておきます。

調査及び発表についてご協力いただいた諸氏に厚くお礼申し上げます。

(S.03: Saburou Kimura 飾磨郡夢前町)

兵庫県山地性オオウラギンヒョウモン について (IV)

(卵形態の変異の調査)

近藤伸一

はじめに

表1、卵底部における縦隆起条数

タテハチョウ科の卵は、一般的には円錐台型又はまんじゅう型で、卵殻面には縦隆起条が上部精孔帯から下部卵底にかけて、ちょうどスイカの模様のように走っている。オオウラギンヒョウモンの卵は、縦隆起条が側面で数をふやし、卵底で最多となる。

1981年兵庫県関宮町産の母蝶から得た卵の縦隆起条数を調べ、卵の形態に個体差とともに地域差も存在するのではないかと推定した。

この度兵庫県内の新産地(日高町)の卵の形態を調べる機会があったので、関宮町産の卵の形態の調査とあわせて報告する。

母蝶	縦隆起条数											合計	
	産卵期		18	19	20	21	22	23	24	25	26		27
No.1 (関宮町)	初期 0~609		2	0	0	0	11	30	35	13	3	1	96
	中期 610~1000		0	0	0	2	5	10	23	19	8	1	68
	後期 1001~1507		0	0	0	2	6	18	32	12	4	0	74
	小計		2	0	0	4	22	58	90	44	15	2	237
No.2(関宮町)	初期 0~500		2	2	11	14	24	12	9	0	0	74	
No.3 (日高町)	初期 0~150		1	0	14	17	4	1	0	0	0	37	
	後期 750~850		0	1	5	3	13	18	3	1	0	44	
	小計		1	1	19	20	17	19	3	1	0	81	

1、母蝶の採集場所及び産卵

No.1 ♀…兵庫県養父郡関宮町東鉢伏
産卵 (1981, 9, 30~10, 21)産卵数1507

No.2 ♀…兵庫県養父郡関宮町東鉢伏
産卵 (1983, 9, 24~11, 9)産卵数 1776

No.3 ♀…兵庫県日高郡日高町神鍋
産卵(1986, 9, 25~11, 13)産卵数約850
(木村三郎氏採卵)

2、卵底部の縦隆起条数について

No.1 ♀~No.3 ♀から得た卵を産卵期別に抽出し、縦隆起条を調査した(表1)。

No.1 (関宮町産)の縦隆起条数は23.8本(加重平均) No.2 (関宮町産)は21.7本であり、No.3 (日高町産)は21.5本であった。

同じ母蝶の産卵期別の縦隆起条数は、No.1ではほとんど同じ傾向を示したが、No.3では初期(0~150)で20.7本、終期(750~850)で22.3本と明確な差が生じた。

3、縦隆起条の上部と下部の関係

上部精孔帯から下部卵底に走る縦隆起条の中間に1本から2本の縦隆起条がおこるため、卵底の縦隆起条数は上部の数の2倍以上となる。

各母蝶の卵ごとに上部と下部の縦隆起条数の関係を表に示す。

表2、No.1(関宮町産)の卵の上部及び下部の縦隆起条

上部 \ 下部	18	19	20	21	22	23	24	25	26	計
8	1	0	0	1	0	0	0	0	0	2
9	1	0	0	0	3	1	1	0	0	6
10	0	0	0	1	5	14	16	4	3	43
11	0	0	0	0	2	5	5	4	3	19
12	0	0	0	0	0	1	2	2	0	5
合計	2	0	0	2	10	21	24	10	6	75

表3、No.2(関宮町産)

上部 \ 下部	18	19	20	21	22	23	24	計
7	0	0	1	0	0	0	0	1
8	1	0	4	8	8	5	4	30
9	1	2	6	6	14	5	5	39
10	0	0	0	0	2	2	0	4
合計	2	2	11	14	24	12	9	74

表4、No.3 (日高町産)

上部 \ 下部	20	21	22	23	計
8	1	6	0	1	8
9	0	4	1	0	5
10	0	0	0	0	0
11	0	1	0	0	1
合計	1	11	1	1	14

おわりに

今回は強制産卵させた3♀のオオウラギンヒョウモンの卵の一部について、縦隆起条数だけを調査したが、3例とも同じ母蝶から採取した卵の中で、形状にかなりの個体差が存在した。また同一の産地であるNo.1とNo.2の母蝶の卵の間にも明らかな差異が存在した。

本種の卵に地理的変異があるかどうか興味あるところだが、No.1、No.2、とNo.3の両者の間に差を認めることは出来なかった。今後調査数を増やすこと及び他産地の卵の調査を進めていくことにより、明らかになると思われる。

本調査にあたり、貴重な卵をいただいた木村三郎氏卵の調査に御協力いただいた山口福男、矢野進治、福永智子の諸氏に深くお礼を申しあげる。



撮影者…山口福男

<参考文献>

近藤伸一 兵庫県の山地性オオウラギンヒョウモンについて (II)
(てんとうむしNo.8 181~185)

白水隆 原章…原色日本蝶類幼虫大図鑑 (保育社)

牧林 功 チョウの幼虫の形態 (ニューサイエンス社)
(S.62:Shinichi Kondo 神戸市)

材から得たカミキリ

花岡 正

1984年から1986年にかけて、県下の3地区の材から得たカミキリを報告する。

美方郡浜坂町

①キブシ ①ヒメクロトラ②トゲヒゲトラ③コジマヒゲナガゴバネ④ヒメヒゲナガ⑤ケシカミキリ⑥トワグムモン⑦シロスジドウボソ (4日に越冬成虫、幼虫割出)

⑧カラスザンショウ ①ヒトオビアラゲ②フタオビアラゲ③キボシカミキリ④タイワンメダカ

⑤カクレミノ ①タテジマカミキリ (1985、VII、29羽脱)

⑥タブ ホシベニの幼虫だけ確認

宍粟郡波賀町赤西、音水渓谷

①エゾエノキ ①アカネキスジトラ②ホソツヤヒゲナガゴバネ③クワサビ④シロオビゴマフケシ⑤エゾサビ⑥クモガタケシ⑦キッコウモンケシ⑧トゲバ⑨ナガゴマフ⑩アカジマトラ⑪クリサビ⑫トラフホソバネ⑬ホソヒゲケブカ⑭ニイジマチビ⑮ヨコヤマトラ (1985IV、22、1♀、IV231♂脱出)

⑯ケヤキ ①トガリバアカネトラ②キンケトラ③ヒメクロトラ④タギグチモモト (一瀬氏) ⑤ナカジロサビ

⑥モミツガ ①ヤマトシロオビトラ②セミスジコブヒゲナガ③キボシチビ (1985VI 4脱出④ヒトオビチビ (吉田氏) ⑤ツヤケシハナ⑥ニンフホソハナ

⑦カラスザンショウ ①キイロアラゲ (1985VI20より脱出、多数) ②タイワンメダカ③フタオビアラゲ④ヒトオビアラゲ⑤トラフホソバネ (黒田、吉田氏) ⑥チャボヒゲナガ

⑧ブナ ①タカオメダカ②フタオビミドリトラ③クモガタケシ④ガロアケシ⑤フタモンアラゲ

⑨カエデ ゴイシモモト

⑩フジ ①カッコウメダカ②トガリシロオビサビ③アトモンマルケシ

⑪ヤマグワ ①キバネアラゲ

揖保郡御津町室津

- ①クサギ ①ケプトハナ②アトモンマルケシ③アトジロサビ
 ⑧ハゼ ①ヨコヤマヒメ②ケシカミキリ③ガロアケシ
 ⑨アカメガシワ ①ズマルトラ②ガロアケシ③アトモンマルケシ④ヨツスジトラ
 ⑩カエテ ①アオカシキリ (黒田氏)
 ⑪フジ、アケビ ①カツコウメダカ②ドガリシロオビサビ③アトモンマルケシ
 ⑫アベマキ ①キイロトラ②キマグラヤマカミキリ (黒田氏)
 ⑬ヒメヤシャブシ ①ハンノキカミキリ

坂、谷林道のエゾエノキからゴイシモモブトが多数羽脱したとの吉田氏の報告有り。

発表にあたり、黒田、吉田、一瀬氏の御協力に深謝致します。

(S.19:Tadashi Hanaoka 揖保郡太子町)

近辺で2年連続か年を隔てて採集されている例も多く、少ないながら土着しているのではないと思われる。

2年連続同一場所かその付近での記録としては、姫路市網干区新在家、五色町広中、神戸市北区山田町ではそれぞれ1979年と1980年に、新宮町善定では1980年と1981年に、御津町御津周辺では1985年と1986年に記録があり、その他にも、相生市、猪名川町、宝塚市、南淡町、洲本市などでは毎年連続ではないが何回かとれている。

表. 年次別採集個体数表 (1950年-1986年)

年次	'50	'51	'52	'53	'54	'55	'56	'57	'58	'59	'60
採集数		1		1		1	3	2	3	1	
年次	'61	'62	'63	'64	'65	'66	'67	'68	'69	'70	'71
採集数		1	1							1	4
年次	'72	'73	'74	'75	'76	'77	'78	'79	'80	'81	'82
採集数		3	4	1		5	1	12	12	1	
年次	'83	'84	'85	'86						※	計
採集数	2	5	4	1						5	75

※ = 年代不明

本種のような暖地性の蝶にとっては、土着するためには冬季の可酷な気象条件をいかにのり切るかというところにあると思われるが、これまでの例を見る限りでは1-2月の最低平均気温が高かった1976年には採集例がなく1978年も1頭にとどまっている。その反面、気温が低かった1977年には4頭も採集されており、この相関関係については、今のところ何ともいえない。今後どのような経過を辿るのか興味を引くところである。

本稿を草するに当り、森下泰治、山下剛史、西隆広、高柳栄一、近藤伸一の各氏には採集記録を御提供いただいた。御厚意に深く感謝申し上げる次第である。

〈参考文献〉

- 広畑政己(1982) 兵庫県産蝶類分布資料(2) てんとうむし(8): 30-32
 広畑政己(1984) 兵庫県産蝶類分布資料(3) てんとうむし(9): 18-19
 加藤信一郎(1984) 宝塚市清荒神のチョウ(追録3) きべりはむし12(1): 29
 前川和昭(1984) 採集4例の報告 Parnassius(31): 7
 杠 隆史(1985) 六甲山系の蝶(2) crude(26): 13-16

(S.28: Masami Hirohata 姫路市)

県下に於けるクロコノマチョウの分布について

広畑 政 己

暖地性の蝶で近年東進北進をしている蝶はナガサキアゲハなど数種が挙げられるが、本種もその一種であろう。兵庫県では春季の記録も含め、1985年までに筆者の手許にある記録をまとめてみると64頭が採集されている。それらは広畑(1982, 1984)、前川(1984)、加藤(1983)、杜(1985)その他で報告されているが、記録をさがしていると、この他に10頭の個体が採集及び目撃されていることがわかったので、それを従来の記録に加えて、年次別にどのような経過を辿ってきたかをまとめてみた。

新たに記録のあった産地は神戸市長田区双葉町で1980年に1頭、1984年に2頭採集されており、その他に宍粟郡波賀町赤西溪谷で1984年に3頭、芦屋市三条町で1985年に3頭、揖保郡御津町稲富で1985年に1頭、同町室津で1986年に1頭が採集及び目撃されている(以上未発表)。これらはすべて夏以降の記録である。

1951年に有馬温泉で初めて採集されてから60例75頭を数えるが、近年採集例も増え、1980年には夢前町と新宮町では春季の記録もあり、また、同一場所かその

てんとうむし 総目次

題 名	発行号数	頁数	総頁数
姫路昆虫同好会発足によせて……………山本広一	No.1 or 2(1976)	2	てんとうむし 2
読者の目……………神戸新聞社 大谷記者	"	3	" 3
県下のFavonius について……………岩村 巖	"	4	" 4
ギフチョウの飼育について……………玉田作次	"	5	" 5
刺すハチ・刺さぬハチ……………三木順一	"	6	" 6
私とアサキマダラ……………市川義彦	"	6	" 6
私の昆虫採集記……………沢辺 保	"	7	" 7
道場の蝶二種……………矢代 武	"	7	" 7
ジャコウアゲハの異常型……………森下泰治	"	7	" 7
私と昆虫……………三木安貞	"	8	" 8
《食草》①—カンアオイ……………家永善文	"	8	" 8
昆虫館だより①……………千種川グリーンライン昆虫館々長 内海功一	"	9	" 9
会報発刊によせて……………姫路市立科学館々長 丸尾準治	"	9	" 9
播磨地方のムカシトンボ……………相坂耕作	"	10	" 10
兵庫県産スジグロシロチョウの異常型……………木村三郎	"	10	" 10
私のねがい……………木村三郎	"	11	" 11
子供——虫へのあこがれ……………城東幼稚園職員	"	11	" 11
蝶採集について……………唐土洋一	"	12	" 12
林田町に産するヤブヤンマの生活……………菅原昭夫・相坂耕作	"	12	" 12
姫 昆 サ ロ ン……………	"	12	" 12
虫への想い出……………石井為久	"	13	" 13
佐用郡の蝶・前年との比較……………黒田 収	"	13	" 13
雌岡山のギフチョウ……………花岡 正	"	14	" 14
佐 用 の 蝶……………黒田龍一	"	14	" 14
加古川市の蝶……………吉野和義	"	14	" 14
兵庫県産のキマダラモドキ……………井出敏晴	"	14	" 14
花田中のハンミョウ……………金田裕房	"	15	" 15
僕 の 希 望……………細川大雄	"	15	" 15
〔伝言板〕・〔質問箱〕……………	"	15~16	" 15~16
会 則……………	"	17~18	" 17~18
会 員 名 簿……………	"	19~20	" 19~20
行 事 予 定……………	"	21	" 21
会員募集要項……………	"	22	" 22
書写山でキベリハムシ発生……………木村三郎	"	2	てんとうむし24
ハネピロトンボ西播地方に偶発……………相坂耕作	No.3 (1976)	3	" 25
ハネピロエソトンボが再飛来……………菅原昭夫	"	3	" 25
ルリボシカミキリを再発見……………三木安貞	"	3	" 25
兵庫県下に於けるミヤマカラスアゲハの異常について……………広畑政己	"	4	" 26
郷土のウスバカゲロウ相とアリジゴク……………相坂耕作	"	5	" 27
《食 草》②—エノキ……………家永善文	"	5	" 27
応聖寺のウツギノヒメハナバチ……………三木順一	"	6	" 28
報告文の書き方……………法西定雄	"	6	" 28
夢前町菅生潤の蝶……………谷川洋行	"	7	" 29
蝶との出会い……………吉田 豊	"	7	" 29

てんとうむし 総目次

題 名	発行号数	頁数	総頁数
岐阜市内のギフチョウ……………飯田逸博	No.3 (1976)	7	てんとうむし29
昆虫館だより ②……………内海功一	"	8	30
会誌・会報発行について……………	"	8	30
ジュニア質問箱……………	"	8	30
記録用紙・分布作製図について……………	"	9	31
分布作製図について・会員募集要項……………	"	10	32
姫昆サロン会ご案内……………	"	11	33
資料室・姫昆ミニニュース・行事予定……………	"	12	34
会 員 名 簿……………	"	13~14	35~36
サロン会・行事予定案内……………	No.4 (1977)	1	てんとうむし37
西播のクロツバメシジミについて……………岩村 巖	"	2	38
秋まで生き残るメスグロヒョウモン……………法西定雄	"	2	38
揖電地区の蝶相……………相坂耕作	"	2	38
ウラミスジシジミとその食樹に関する知見……………広畑政己	"	3	39
昆虫館だより ③……………内海功一	"	3	39
ハチの行動半径……………三木順一	"	4	40
上月町円光寺のシルビアシジミ……………木村三郎	"	4	40
飼育中のツマガロヒョウモン……………木村三郎	"	4	40
甲山ふもとでアサギマダラを目撃……………法西定雄	"	4	40
三日月町の蝶……………広利雅美	"	5	41
《食草》③-サネカズラ……………家永善文	"	5	41
会 員 名 簿……………	"	6	42
揖電地区の蜻蛉相……………相坂耕作	No.5 (1979)	1	てんとうむし43
ナガサキアゲハ御津町に大発生……………花岡 正	"	6	48
兵庫県産ナガサキアゲハの分布について……………広畑政己	"	7	49
ギフチョウの赤紋消失異常型の記録……………相坂耕作	"	10	52
兵庫県のオオウラギンヒョウモン……………尾崎 勇	"	11	53
佐用郡産オオムラサキのスギタニ型……………広利雅美	"	11	53
西播におけるウスバシロチョウについて……………唐土洋一	"	12	54
姫路市飾磨区の蝶相……………桑名 誠	"	13	55
相生市の迷蝶……………米村和繁	"	14	56
ジャコウアゲハの異常型……………森下泰治	"	14	56
ナガサキアゲハ越冬の記録……………広畑政己	"	15	57
ベニカミキリの越冬……………西高生物部	"	15	57
姫路市北部のキマダラルリツバメ……………法西定雄	"	16	58
ギフチョウの水浴……………広畑政己	"	16	58
キジョランとアサギマダラ……………三木順一	"	17	59
昆虫館だより……………内海功一	"	17	59
兵庫県におけるOlenecamptus属カミキリムシ3種の分布について……………高橋寿郎	No.6 (1980)	1	てんとうむし60
9月に羽化したツマキチョウ……………広畑政己	"	4	63
兵庫県のシルビアシジミ……………広畑政己	"	5	64
姫路市の昆虫……………相坂耕作	"	10	69
西播の蝶分布資料(8) 宍粟郡のメスアカミドリシジミ……………岩村 巖	"	21	80
相生市のナガサキアゲハについて……………米村和繁	"	22	81

てんとうむし 総目次

題 名	発行号数	頁数	総頁数
姫路市児童生徒科学作品展に拾った蝶……………木村三郎	No.6 (1980)	23	てんとうむし82
アカジマトラクカミキリ多数採集す……………黒田 収	"	24	83
神崎町でメスアカミドリシジミ採卵……………石井為久	"	24	83
三濃山へクロヒカゲモドキをたずねて……………唐土洋一	"	25	84
福崎町の蝶……………石井為久	"	26	85
鷹の巣高原でオオヒカゲを採集する……………花岡 正	"	26	85
西脇市の蝶……………吉田 豊	"	27	86
姫路市産アオスジアゲハの異常型の調査……………相坂耕作	"	28	87
兵庫県に於ける蝶5種の新産地……………広畑政己	"	30	89
姫昆虫ミニミニニュース……………編集部	"	30	89
第16回国際昆虫学会議に出席して……………三木順一	"	31	90
昆虫館だより ④……………内海功一	"	31	90
佐用町でモンクロベニカミキリを採集……………黒田 収	"	31	90
兵庫県下における異常型の記録……………相坂耕作	"	32	91
分布を広げるナガサキアゲハ……………唐土洋一	"	33	92
赤西溪谷でオナガシジミを採集……………花岡 正	"	33	92
ギフチョウの食草カンアオイ属Heterotropaの違いによる成長差…尾崎 勇	"	34	93
夜間灯火に飛来した蝶14種……………相坂耕作	"	36	95
西播地区でのクロコノマ採集例……………稲田和久	"	36	95
ウラギンシジミの越冬についての知見……………広畑政己	"	36	95
新入会員名簿……………	"	37	96
兵庫県に於けるウラナミジャノメの分布と生活史……………広畑政己	No.7 (1981)	1	てんとうむし97
兵庫県の山地性オオウラギンヒョウモンについて……………近藤伸一	"	6	102
クローアゲハの赤紋発達型を採集……………小坂文之	"	9	105
兵庫県のクビナガハムシ……………高橋寿郎	"	10	106
兵庫県におけるキチョウについて……………木村三郎	"	15	111
夜間灯火に飛来した蝶(II)……………相坂耕作	"	19	115
西播におけるムラサキツバメの新産地……………唐土洋一	"	19	115
西播の蜻蛉(I)アカトンボ属……………相坂耕作	"	20	116
12月に羽化したシルビアシジミについて……………広畑政己	"	24	120
カラスザンショウを食べるキアゲハ……………唐土洋一	"	24	120
兵庫県のトラハナムグリとヒラタハナムグリ……………高橋寿郎	"	25	121
村岡町大笹にてコキマダラセセリを採集……………広畑政己	"	29	125
兵庫県産蝶類分布資料(1)ヤマキマダラヒカゲ・エゾスジグロシロチョウ広畑政己	"	30	126
ルリボシヤンマ・オオルリボシヤンマの新産地……………相坂耕作	"	34	130
昆虫館だより ⑤……………内海功一	"	34	130
甲虫の奇型 3種……………高橋寿郎	"	35	131
兵庫県におけるミドリヒョウモン黒色型について……………木村三郎	"	36	132
相生市の迷蝶 一部訂正について……………米村和繁	"	37	133
オオウラギンヒョウモンの古い発生地を尋ねて……………山本俊良	"	38	134
メスアカミドリシジミ雌の斑紋……………花岡 正	"	39	135
イッシキキモンカミキリが灯火に飛来……………相坂耕作	"	39	135
宍粟郡下でムラサキシタバを採集……………相坂耕作	"	40	136
兵庫県におけるテングチョウ2化の記録……………木村三郎	"	41	137

てんとうむし 総目次

題 名	発行号数	頁数	総頁数
ルリボシカミキリ(<i>Rosalia batosi</i> Harold)の斑紋異常について……………黒田 収	No.7 (1981)	42	てんとうむし138
三田市乙原地区の蝶……………吉田 豊	"	43	" 139
赤穂郡産オオムラサキ「スギタニ型」の記録……………唐土洋一	"	43	" 139
新入会員名簿……………	"	44	" 140
兵庫県のクワガタムシ……………高橋寿郎	No.8 (1982)	1	てんとうむし141
氷の山周辺のカミキリムシ分布調査……………黒田 収	"	13	" 153
チャイロホソヒラタカミキリの新産地……………花岡 正	"	27	" 167
ウラクロシジミの新産地……………花岡 正	"	27	" 167
オオキトンボの一奇型……………相坂耕作	"	27	" 167
オオルリボシヤンマの新産地追加……………相坂耕作	"	27	" 167
オサムシタケとオサムシの奇型……………高橋寿郎	"	28	" 168
兵庫県産蝶類分布資料(2) 県下における迷蝶の記録……………広畑政己	"	30	" 170
兵庫県の山地性オオウラギンヒョウモンについて(II)……………近藤伸一	"	41	" 181
姫路市でウラムシジジミ……………木村三郎	"	45	" 185
兵庫県におけるヒメヒカゲについて……………木村三郎	"	46	" 186
西播のミヤマカラスアゲハ採集例……………唐土洋一	"	49	" 189
西宮のナガサキアゲハ……………法西定雄	"	49	" 189
ミヤマカラスアゲハの雌雄型……………木村三郎	"	50	" 190
シルビヤシジミの新産地……………石井為久	"	50	" 190
キチョウの雌雄型を再発見……………相坂耕作	"	50	" 190
中町安坂でエゾスジグロシロチョウを採集……………広畑政己	"	50	" 190
御津町室津での糖蜜採集……………稲田和久	"	51	" 191
昆虫館だより ⑥……………内海功一	"	51	" 191
西播の蜻蛉(II)トンボ科……………相坂耕作	"	52	" 192
相生市の蜻蛉……………米村和繁・米村和也	"	56	" 196
兵庫県産蝶類に関する文献目録……………高橋寿郎	"	57	" 197
新入会員名簿・編集後記……………	"	78	" 218
兵庫県のハナムグリ……………高橋寿郎	No.9 (1984)	1	てんとうむし219
兵庫県産蝶類分布資料(3) ジャノメチョウ科6種の記録……………広畑政己	"	18	" 236
西宮のウスイロコノマチョウ……………法西定雄	"	24	" 242
ミスジチョウの遅い採集記録について……………広畑政己	"	24	" 242
西播磨の蜻蛉(III) ヤンマ科……………相坂耕作	"	25	" 243
芦屋町の蝶……………西 隆広	"	28	" 246
ミスジチョウの羽化例……………近藤伸一	"	39	" 257
夢前川のカゲロウ類……………上野哲郎	"	42	" 260
アオスジアゲハの冬期の幼虫……………近藤伸一	"	44	" 262
フタスジカタピロハナカミキリを坂の谷林道で採集……………吉田 豊	"	44	" 262
赤西溪谷にてアカネキシトラカミキリを採集……………花岡 正	"	44	" 262
ズマルトラカミキリを多数採集……………花岡 正	"	44	" 262
兵庫県における蝶数種の採集記録……………広畑政己	"	45	" 263
赤西溪谷にてアオタマムシを採集……………黒田 収	"	45	" 263
加古川市の蝶……………高嶋 明	"	46	" 264
昆虫館だより ⑦……………内海功一	"	49	" 267
イシガケチョウの幼虫発見……………上田倫範	"	50	" 268

てんとうむし 総目次

題 名	発行号数	頁数	総頁数	
ジャノメチョウの幼虫をカサスゲで採集……………	広畑政己	No.9 (1984)	50	てんとうむし 268
姫路市の昆虫 (セミ科) ……………	相坂耕作	"	51	" 269
マツノマダラカミキリの天敵の一つ……………	黒田 収	"	52	" 270
広峰、増位山系の昆虫……………	木村三郎	"	53	" 271
てんとうむしNo.8の訂正……………	"	"	58	" 276
東播磨におけるミスジチョウの分布……………	広畑、近藤、徳岡	"	59	" 277
オナガアゲハの翅脈異常個体……………	西 隆広	"	59	" 277
材から出たカミキリ達 その1……………	黒田 収	"	60	" 278
県下内陸部におけるナガサキアゲハの採集及び目撃記録……………	広畑政己	"	60	" 278
夏休み、沼島でみた蝶……………	西 隆広	"	60	" 278
ヤナギの枯れ枝よりカミキリ13種を採集……………	花岡 正	"	60	" 278
ベニカミキリの姫路市における採集例(1)……………	黒田 収	"	61	" 279
赤穂市でヒメカマキリモドキ採集……………	木村三郎	"	61	" 279
注目すべき Catocala 2種……………	相坂耕作	"	61	" 279
兵庫県昆虫年表……………	高橋寿郎	"	62	" 280
新入会員名簿・編集後記……………	"	"	70	" 288
佐用郡三日月町の蛾覚え書……………	川副昭人	No.10(1987)	1	てんとうむし 289
県下の蝶数種の新産地……………	広畑政己	"	10	" 298
兵庫県産蝶類分布資料(4)タテハチョウ科、シジミチョウ科11種の記録……………	広畑政己	"	11	" 299
兵庫県のダイコクコガネ (兵庫県甲虫資料、158) ……………	高橋寿郎	"	23	" 311
神戸市摩耶山の蛾類採集目録……………	岡村八郎	"	37	" 325
アブラムシの分泌物を吸う蝶 2例……………	広畑政己	"	45	" 333
昆虫館だより ⑧ ……………	内海功一	"	45	" 333
兵庫県の山地性オオウラギンヒョウモンについて(Ⅲ)……………	近藤伸一	"	46	" 334
モンキアゲハの翅脈異常……………	山本健一	"	51	" 339
西播磨の蜻蛉(Ⅳ) サナエトンボ科 ……………	相坂耕作	"	52	" 340
梅雨明けの杉ヶ沢……………	山本健一	"	54	" 342
兵庫県のナガハナノミ・ヒラタドROMシ (兵庫県甲虫相資料、159) ……………	高橋寿郎	"	55	" 343
兵庫県におけるエゾスジグロシロチョウの新しい産地……………	広畑政己	"	58	" 346
相生市のカミキリムシ……………	米村和繁、米村和也、米村理子	"	59	" 347
ヤマトシジミの斑紋異常型個体を採集……………	高柳栄一	"	61	" 349
表紙の説明 (水草に翅を休めるベッコウトンボ) ……………	相坂耕作	"	61	" 349
兵庫県に於けるミドリシジミ類 3種の雌の斑紋について……………	広畑政己	"	62	" 350
フタスジカタビロハナカミキリ……………	花岡 正	"	65	" 353
初冬の蝶の一日……………	近藤伸一	"	65	" 353
有馬の蛾より……………	岡村八郎、森 博	"	66	" 354
タテハチョウ科の習生の変った越冬幼虫 2例……………	木村三郎	"	67	" 355
兵庫県の山地性オオウラギンヒョウモンについて(Ⅳ)……………	近藤伸一	"	68	" 356
材から得たカミキリ……………	花岡 正	"	69	" 357
県下に於けるクロコノマチョウの分布について……………	広畑政己	"	70	" 358
総 目 次(てんとうむし)……………	"	"	71	" 359
姫路昆虫同好会新入会員名簿・編集後記……………	"	"	76	" 364

姫路昆虫同好会新入会員名簿

1986. 11. 30現在

◆ 編集後記 ◆

会報「てんとうむし」No.10をお届けします。皆様のお手元に届けるのが大幅に遅れ、早くから原稿をいただいた諸氏に迷惑をおかけしましたこととお詫びいたします。

1976年5月の発足以来早や10年がたち世話をさせていただいているメンバーも仕事が変わったり、役職についたりする年代となって、多忙をきわめています。

当初の県内の昆虫相説明という初期の目的に十分達成したとはいえませんが、他の同好会誌等の報文を含めると、この10年間で目的の60~80%は達成されたものと思われます。

今後も地方の特殊性を生かした同好会として、会報発行の有無にかかわらず、連絡紙を通して仲間との情報交換を行い、お互いの連絡網として、これからも姫路市立科学館の資料充実と兵庫県産分布の蓄積に力を入れたいと思いますので、ご協力の程をお願い申し上げます。
(運営委員)

「てんとうむし」No.10

発行日 / 1987. 2. 20

発行 / 姫路昆虫同好会

飾磨郡夢前町菅生潤161

編集者 / 相坂耕作・木村三郎・広畑政己

印刷 / 西播印刷所

目 次

佐用郡三日月町の蛾覚え書	川 副 昭 人	1
県下の蝶数種の新産地	広 畑 政 己	10
兵庫県産蝶類分布資料(4)タテハチョウ科, シジミチョウ科11種の記録	広 畑 政 己	11
兵庫県のダイコクコガネ (兵庫県甲虫資料、158)	高 橋 寿 郎	23
神戸市摩耶山の蛾類採集目録	岡 村 八 郎	37
アブラムシの分泌物を吸う蝶2例	広 畑 政 己	45
昆虫館だより ㊸	内 海 功 一	45
兵庫県の山地性オオウラギンヒョウモンについて(III)	近 藤 伸 一	46
モンキアゲハの翅脈異常	山 本 健 一	51
西播磨の蜻蛉(IV) サナエトンボ科	相 坂 耕 作	52
梅雨明けの杉ヶ沢	山 本 健 一	54
兵庫県のナガハナノミ・ヒラタドロムシ(兵庫県甲虫相資料、159)	高 橋 寿 郎	55
兵庫県におけるエゾスジグロシロチョウの新しい産地	広 畑 政 己	58
相生市のカミキリムシ	米村和繁, 米村和也, 米村理子	59
ヤマトシジミの斑紋異常型個体を採集	高 柳 栄 一	61
表紙の説明 (水草に翅を休めるベッコウトンボ)	相 坂 耕 作	61
兵庫県に於けるミドリシジミ類3種の雌の斑紋について	広 畑 政 己	62
フタスジカタビロハナカミキリ	花 岡 正	65
初冬の蝶の一日	近 藤 伸 一	65
有馬の蛾より	岡村八郎, 森 博	66
タテハチョウ科の習生の変った越冬幼虫2例	木 村 三 郎	67
兵庫県の山地性オオウラギンヒョウモンについて(IV)	近 藤 伸 一	68
材から得たカミキリ	花 岡 正	69
県下に於けるクロコノマチョウの分布について	広 畑 政 己	70
総目次 (てんとうむし)		71
姫路昆虫同好会新入会員名簿・編集後記		76